

554-164



1200501509876

554

164

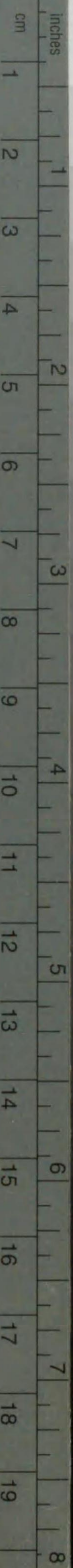
〇 複写

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



2, 8.17

三戸郡誌

第四編

三戸郡誌

第四歌謠篇

目次

俗謠

其一、童謠

一、童謠	一
二、子守唄	二五
三、毛毬唄	二六
四、お手玉とりの唄	二六
其二、民謠	
一、ごいはい	四一
二、えんこえんこ	四二
三、にひがた	四二
四、おひわけ	四三
五、あいやぶし	四三
イさかもり	四四
ロあいやぶし	四五
ハじんく	四七
ニだうちうふし	五〇



其二、民



其三、民

ホてうしぶし.....	五〇
六、しろかねころし.....	五一
七、盆踊の唄.....	五五
謠 (二).....	六四
一、田植唄.....	六四
二、春田打うた.....	六七
三、餅搗の唄.....	七一
四、米つき唄.....	七二
五、から白唄.....	七四
六、磨白唄.....	七五
七、木挽唄.....	七五
八、土突うた.....	七六
九、馬方ぶし.....	七七
十、牛方ぶし.....	七八
十一、錢ふぎの唄.....	七八
其四、民謠 (三).....	八〇
一、ゑんぶり.....	八〇
二、大黒舞.....	八六
三、福俵積.....	九九

其四、民謠

四、杓子舞.....	一〇〇
五、槍をどり.....	一〇一
六、四方踏み.....	一〇一
七、萬歳.....	一〇一
八、鶏舞.....	一〇二
九、駒踊.....	一〇九
十、墓獅子.....	一一〇
第五、御詠歌.....	一一七
第六、語り物.....	一二四
一、奥淨瑠璃.....	三四
二、松尾節.....	三六
三、まんのみ長者物語.....	三六

和歌、俳句

其一、和歌

八景の歌 八戸八景(淺山月霜) 八戸近世の八景(橋本波安) 八戸八景(石橋次常) 十五戸八景(荒木田舎暉) 十三戸八景(菊地東江以下) 白銀八景(讀人不知).....	一四三
ゑんぶりの歌(源次常以下) 渡東嶋和歌集(渡政興) 橋本八右衛門	
橋本波安 浪打磐彦 橋本理宇吉 駒嶺賢治 小井川元吉 武尾猛三郎 川村末吉	

南部麻子||菊園會||西村宗博、及川恒道、鈴木浪江、藤井鐵之助、佐野貫一、漆澤好方、松原季男
坂本榮教、武尾候、鳥屋部虎太郎、釜沼忠作、大川菊子、奥寺貞、和田豐子、
新派の和歌||十首(下野白果)、霜(根市木陽)、雜抄(稻垣浩)、歸去來(黑澤林泉)、山居(盛壽)
くくたち(島寺寒光)、穗世(河野元太郎)、花鳥(戀川なぎさ)、

其二、俳句.....一六

船越掉左||北田掉雪、山崎掉之、北田白郷、野内白齋、

玉梅庵畔李||(窪田互來)||野中畔鳥||南部互連||李州女||李有女||森川蘭路||逸見子彦||逸

見子彦||野中畔鳥

上野家文||(神山瓢馬)||葛西文河、村井文喬

月館佛平||

蕪島仙乙因||

松橋寛兆||(松橋梁曉、白麟)||壽川享常丸

松尾頂水||川守、釜淵阿淵、近田梅隣、中島觀之、種市互扇、泉美、松尾羅丈、竹村竹洲

早桶庵瓦鏡||逸光、綠水、箕綾、米田有以、大西五交、久保三豆、江渡春水、三浦素旦、中村班亀、

藤田青球||

三浦文來||三浦雁岱||鈴木老月||高橋菊翁||金澤左丈

梶川北亞||百島白錦||豊島北等||西村白仙、酒井梅丸、北村古心、前田櫻曙、枋内互洲、松

橋隆兆、宮岡子文、神田梅柳、釜沼北雨、室岡北郎、小西櫻園、白井子恭、神山梅興、下斗

米北笠、玉内櫻卷、上田北園、接待櫻州、金子一丸、高橋百生、寺井蘭秀、

保崎海大、稻本十八公、春日美唄、近藤電波、瀧澤萬吉、福田晨星、野澤葛堂

三戸郡誌

第四 歌謠篇

俗謠



童謠
童謠

人真似 小真似

荒谷の きつね

粕竹で ほんだせ

鮫では

人まね 小まね

あらやの きつね (鮫)

—1—

だけである。人の真似をするものがあるさかう囃し立て、嗤つた。あまり囃し立てられるさ、其處に居たまらなくなつたり、泣き出したりしたものである。

荒谷は館村大字賣市の一部落、白山堤(澤里溜池)御前水堤(賣市溜池)を隔て、八戸町に對してゐる。

泣けつつ めつつ、お寺の前さ、赤猫し、よって、白猫抱いで、まるれ まるれ (八戸)

泣けつつ めつつ、お寺の前さ、赤猫し、よって、ぶんぶど 跳ねろ (鮫)

泣けつつ ごんほ、あが猫そって、黒猫抱いで、お寺の前さ、まるれ まるれ (館)

泣き出した子供を、手を拍ちなどしながらからかつた。「ごんほ」は「泣けつつ」「泣けつつ」同じで、「ごんほ」「ごんほほる」「ごんほほり」などご用ひられた。

泣いだ 泣けつこ

あッべらほんご わらた (八戸)

泣いだ 泣けつこ

えッへらツミ わらツた (館)

子供の泣くのを止めさすに、泣きやむ時なごに、こんなことを言つて、笑はせにかかつた。

をどごど をなごど ちーようせんこ

あんまり ちーようして 泣がせんこ (八戸、田子、淺田)

をどごど をなごど ちーようせんこ

おらば かでないで 泣がせんこ (小中野、鮫)

この後へ「ヤッポ ヤッポ」を指さして嘸し立てた。男の子女の子が交つて仲良く遊んでゐるのを、他の子供

らが多少嫉む氣持があつて嘸し立てるのである。かうして笑はれて、それを掻いたり泣き出したりでもするこ、更にまたこれが幾度もなく繰返され「ヤッポ ヤッポ はやせ」になるのである。

「ちーようす」は「ふざける」といつた意味である。

江戸の ヤツこ、をなごに 敗けで

すんつこ まんつこ さんがりこ (八戸)

江戸の ヤアヘア、をなごに 敗けで

すんつこ まんつこ さんがりこ (下長苗代)

女の子の口喧嘩などして敗けた時に言はれた。

「やつこは奴」「やあへあは瘦せ」のことで、瘦せた子供である。あるひは瘦せてゐたために「瘦せ」と呼ばれた子供があつたのであらう。現にかうよばれるものがすくなからずある。

すべりこ たんたん やけアおがだ、

焼けでも 焦けでも すべた方アい、

雪や氷の上を滑る時に自ら嘸してゐる。凍つた道の上に雪を運んで来て「かたかた」と言つて足駄で小刻みにその雪の上を幾度も踏んで凍てつかせたり、前の晩水を撒いておいたりして滑るのである。

「やけあおがだ」は解らない。「おがた」は「御方」女房の義。(八戸)

滑つてころんだ時には

何處だかの、がんばわらすア、
すべつてころんで、痛ぐした。

おごしてけつたいども がんばアうづぐ (八戸)

ごごたかの、がんばわらすア、
すさんご ころんで、鼻かした。

おごしてけつたいども がんばアうづぐ (鮫)

さ囃し立てた。

『がんば』は『しらくもあたま。』か、ぶたがべたべたこついてゐる子供が澤山あつたが、年年すくなくなつて今ではあまり見られなくなつた。『うづぐ』は『傳染する』といふ意味である。

これは雪の上ばかりでなしに、屋外で轉けた場合何時でも使つた。

雪や氷の上を滑りながらころけることを、『雉子こつた。』といひ、濱の方では『章魚こつた』といふ。『雉子三羽こつた』など言ひながら雪のついた裾をほろつてゐる子供をよく見つける。

おしーやらぐ おまんこ、墓口こ、
錢さへはいれば ぱく ぱく。

おしーやらぐア 何んだ。
おがわの こびちよ。

着飾つた女や藝妓などが通るにこんなこを大聲で叫んだ。しかし却つてその美しいものに氣おくれがしたやうに

こんな場合顔を赤くしてゐる子供の方が多く、悪太郎きもにだけ用ひられたものであるが、今は殆どきかない、今若し使つたら女の殆どすべてに『おしやらぐ』の言葉があてはまることになるであらう。その時代の藝妓或ひはその前の女郎をさした言葉が、その頃の子供には赤い着物を着白粉を顔に塗つた女すべてにあてられてゐた。

『おがわ』は『便器、』曲物または手桶などのやうに把手を一つだけつけて作つた。『こびちよ』は『こび』(垢)を調子づけたものである。(八戸)

外法 たんづぐれ

馬のり ちーようづん (提灯)

外法頭を嘲けるに用ひた。(八戸)

松前の ほうぎ星ア、(慧星)

あつちーやむけ こつちーや向け

かもごどアない。

『どうなこお勝手』といつた風な態度で、子供らが拗ねたり腹を立てたりするに、こんなに囃して却つて憤らせたものであるが、今は全くきかない。(八戸)

べろべろう かけろ

親でも 子でも、

屁ひつた方さ きろツミ向ウけ (八戸)

屁をひつた時ばかりは限らない、多くの子供の中から一人を選ぶ時に、棒の先の曲つたのか、紙燃の端を曲けた

のか、正月だミ瑞木の鍵を使つて、これを両手でもんでまはしながらやつた。子供らはもこは「からみ飴」こいつて棒の先へ飴をからめたのを口の中へ入れてそれを両手でもみながらも囃したものである。

これを鮫では

べろべろ かげこ

屁イひた方さ むウけ (鮫)

三戸地方では

べろべろ かぎこ

屁ひつた方さ

ひろツミ むけ (三戸)

こいつた。

一人 二人 さべのご、おうぎだけア 目くされ、がんど はいぎ べごの糞 やけばたの くそさらひ、

さらアれないで 甜めつた (三戸)

一人 二人 さめのご、大ぎだ目の 目くされ、がんどウほいどウ もうぐれの やけツばたの 糞さらひ、
糞さらえないで、なめづつたやづア 誰だべがな (鮫)

一人 二人 さめのご、大ぎだ目の目くされ、がんどウ ほいどウ もうぐれの やけツばたの 糞さらひ、
糞ウさらつた 樺箕 甜めだづアやい (八戸)

指さしをしながら、かう言つて子供らの頭敷をかぞへていつた。その最後のものが鬼になるやうに鬼えらびにも使つた。

「がんどウほいごうもうぐれの」を「ぐわんミ吠えたむく犬」につくつたりもするが「がんどウ」も「ほいど」も人を罵る言葉であるからこの儘でも意味だけは通るやうである。「ほいど」は「乞食」。「樺箕」は樺の樹の皮でつくつた箕、塵取に用ゐるものである。

どツちかツち 恵比壽、ゑびすにきいで、い、方 ミウるやうに (鮫、八戸)

どツちかツつ ゑべす、ゑべすにきいで、大黒 ミウらば ミウれ (八戸)

どツつ かツつ えべす、えべすに きだほ、おら ミウる (三戸)

二つの一つを取るこき、或ひは二つ三つのうちから一つを取るこきにかう唱へながらその敷をわたつて納まつたものを取つた。

「誰さん」ミ呼びかけて返事のない時か、或ひはわざミ聞えない工合に呼びかけて、返事がないからこいつてからかふのに

「誰さん」ても 返事が無い、

ゆんべ(昨夜)花よめこつたがな

こいふがある。男の場合は「花嫁」、女の場合は「花婿」ミ代るこきは勿論である。

こんなこきをやつてゐる時「呼んだかな」ミ振りむいたり、別な人へ言かひけたのへ振りむいたりするこ、突如

きろつこ向いだ 金之助

『やッほ やッほ』なきまやられてしまふ。そしてうつかり顔を赧くするこまが多かつた。(八戸、三戸)

座頭の坊さん

縁がないこて

縁のさかづき

さッしませう

こゝらか

まだまだ

よがんべ。

輪になつてぐるぐるまはりながら歌ひ『よがんべ』で止まるこ、輪の中の鬼が輪になつてゐる一人を手探りで名を當てる。當らぬうちは何度も繰返す目隠し鬼の歌である。(八戸)

ひしこ いわしこ、はんまりがひ(蛤貝)こ、飛んで來た。

さアらば さッて、着にせ。

ガアのガア、

そのまた ガアのガア

集まつた子供の履物を片一方づ、出して、うたひながら一人がそれを擲り出し、裏返つたのが一つになるまで繰返し、その一つを目隠しをしておいて置いてその子に探させる。その時その子についてゐるいて

天にひみつ、足もこに一つ

さ囃した。(八戸)

『ひしこ』は『乾鯛』である。

ひウらいだ ひウらいだ

れんけの 花ア ひウらいだ。

つウほんだ つウほんだ

れんけの 花ア つウほんだ。

手をつないで輪になつた子供らが、開いだ開いだて手を伸して擴がり、洞んだ洞んだて手をちやめて皆寄りあつまり身替まで隔んでしまつた。よく夕方に町の中で遊んだ遊びである。(八戸、三戸、田子)

これを鮫では

ひいらいだ ひいらいだ

かほちーやのはアな ひいらいだ

ひいらいだこ おもツたら

見るまに つほんだ (鮫)

さ唄つた。鮫から階上へかけての海岸地方ではお盆にも蓮の葉の代りに南瓜の葉を用ひる。

こゝろ こゝろ

さのこゝろ ほしいぞ

〇〇さんの ころ 欲しいぞ
 それもそんだす 何けで育でる
 砂糖ど 饅頭ど お菓子さ 米よ
 まだ足りない
 新米一斗
 まだ足りない
 箆筒に 長持ぎツさりど
 まだ足りない

夕方など、大勢の子供が二組に分れて、一つの組から一つの組へ子供を買ひこるのである。男の子でも女の子でも美くしい子供から先に買はれて行つた。その時三戸や田子では「そんだら、連れでけい」と言つた。

『こうろ こうろ』は『子賣ろ 子賣ろ』であらうか、或ひはまた『買うろ 買うろ』であらうか。『どのころ』は『どの子』であらう。(八戸、平良崎、三戸、田子)

セツセツせ、一にたちばな 二にかきつばた、三に下り藤、四に獅子牡丹、五つ江山の千本ざくら、六つむらさき 色濃くに染めて、七つ南天 八つ山吹を、九つ功名しらそに染めて、十に殿様 葵あひろの御紋

女の子が二組に分れて相對し、その二人づゝが掌てのひらを合せたり手拍子をこつたりして謠ふ。

『こうめう』はわからない、或ひは『巧妙』にあつるのかも知れぬ。この下の『しらそ』を上郷田子などでは『あら』といふのから見て『更紗』などの訛つたのでは無いかも思ふ。(八戸、田子、上郷)

かくれ鬼を、『かくれんこ。』湊みなとなどでは『かくれぢよつこ。』といふ。その時の謠

かぐれんこ、やんまの 松前もの、

早く おがくれ まづかいしよ (田子、上郷)

鬼おにごつこのこは八戸では『鬼おにこほぐり』こほぐり湊などでは『鬼おにぢよつこ。』と呼んだ。

一戸 二戸 三戸さくら、五葉松いばらやなぎ、柳やなぎのうらうら(梢)さ、御祈禱書ごいのりたがひいて、誰だれよんだ、城しろの別當べつたうさま ふつつかーぬけた どん

手をつなぎ合はせ圓まるくなつてゐて唄つた。(上郷、田子)

すずめさん 雀さん

お宿を かして呉れ

七八文しちぱちもんでよいのか

そんなら通れ

この遊び方ははつきりわからない。(平良崎)

ごどさま ごどさま

赤いほほ ください

赤いほほア ながら

白いほほ ください (田子)

こウこさき こウこさき
 赤いほほ くだされ
 白いほほ くだされ
 赤いほほ 無がら
 白いほほに 金^{かね}つけで
 くだされ くだされ (戸來)

こウだいさま 出はった
 ほんのやうに まるい
 見ろ見ろ あねさ
 姉さは 嫁ご
 嫁この ほつほ
 こウだいさま 下さい
 けるのは いやか
 雲の中さ かアぐれだ
 赤いほほ 無がら
 白いほほ ください
 白いほほ ながら

青いほほ 下さい (中澤)

まんまいさま まんまいさま
 赤いほつほ ください
 赤いほつほア ながら
 白いほつほ 下さい (八戸)

『まんまいさま』も『こウだいさま』も『こウとさま』も『お月様』である。『ほつほ』は『衣裳』。月を見て唄ふうたである。

つぶよ つぶよ 豆つぶよ
 去年の春 イッたらや
 烏こいふ 馬鹿やづめア
 ちツくり もツくり さがされた (下長苗代)

かだ雪かんこ
 白雪しんこ
 しんこの寺さ
 あづき(小豆)ばツミ はねた
 はねた小豆

すみミツて 豆こア

こころ ころ

『小豆ばつミ』小豆に入れた鱧^{うどん}鈍のここ。 (戸來)

からす からす

いが家ッこ 何處だい

松越えで

杉 こえで

たッほらの 下だ 下だ (戸來)

この『たつほら』が、田子では『かッほら』になる。

からす からす

いがいッこア どこだ

松ア おいで

杉ア おいで

たアほらの下だ

もどれ もどれ (館)

からす からす

んが行く路さ

門が立ッて

杉ア立ッて

行がれないヤ

もどれ もどれ (八戸)

からす からす

からす子ウ 見ンつけた

からすのはンね 見ンつけた (八戸)

さんびア ござま

かアらすア かがさま

すずめこア まごウこ まごこ (田子)

さんび(喜)ア ミウさま

烏ア か々さま

すずめこア 孫こ

あをじこア 野郎こ

雲雀こア 嫁こ (八戸)

さんび さんび

袴アはいで まはッたら

さかなの骨 けいるア (下長苗代)

夕暮雁の飛ぶのを見るこ

がんがん

棹に なアレ

かぎに なアレ (八戸、鮫)

ささかんだりもした。

蜜柑 食へたい 錢持だない

錢函 さがして 叱られた (八戸)

朝まに 起きたら 買ッて食ッてこ

ひるまに なッたら 戻してこ (鮫)

だまッて 團子くッて 屁いたれた (鮫)

だまされ 團子 三ッつくた

佛の 團子ア ミッてかれない (八戸)

つのだし つのだし

つのだせ

やり出せ (八戸)

つのだし つのだし

角ウ 出さながら

んが 家こ

ぶッこわす ぶッこわす

つのだし つのだし

つノウ ださながら

大家どんさ

こどわる こどわる

『つのだし』は『かたつむり』。(八戸、斗川)

こめツこつこ(みづすまし)
こめツこつこ
朝まに おぎだら
おはぐろ(鐵漿)つけろ (八戸)

螢を呼ぶ語はたくさんある。

ほウだろこア ほウだろこア
そツちの水 うまぐない
こツちの水ア うんまい
こちーや來ウ こツちーや來ウ (倉石)

ほウだるこ さがりこ
山やま越えで
にしんからこさ 鹽まいでこウい こい (野澤)

ほだろ ほだろ
あツちの水 にウがいぞ
こツちの水 あまいぞ

あまい方さ

さがれ さがれ (猿邊、野澤)

ほだアる ほウだる

あツちの水ア しーよッばいぞ

こツちの水ア ああまいぞ

あアまい方さ

さがアレ さがれ (小中野、八戸)

ほウだるこい

やまぶき來い

あんだの光こ

ちーよッこ見で來い (野澤)

ほウほウ ほウだるこ

山鳩こい

まアど(窓)の光りこ

ちーよこ見で來ウ (下長苗代)

ほだいろ ほしい

山道來い

あんどんの光りこ

ちーよーいこ見で來い (下長苗代)

ほだる ほだる

よるは 高だか 高提灯

ひるは 草ッ葉のかけ (猿邊)

ほウ ほウ ほウだる來い

ほだるのおやぢは 金持で

夜は提灯 さがのほり (野澤)

ほウだる ほウだる

なんばん畑の ほウだるやい

あツちの水ア にウがいじーよ

こツちの水ア あアまいじーよ

あまい方さ さがアれ さがれ (八戸、小中野、湊)

ほだアる ほだアる

山みづ向ひの ほウだる來い

あんどの光りこ ちーよーいこ見で來い (八戸)

ほウだるさん ほウだるさん

よるはびかびか 高提灯

ひるは草葉の 露のかけ (館、小中野)

ほウだアるア ほウだアるア

あツつの水ア うまぐない

こツつの水ア うんまいぞ

うんまいほさ 山ぶき そツて

さがれ さがれ (田子)

ほだいろ ほだいろ

ほだいろの 蟲は

さしむしで

親の ためこて

火や こほせ
火や こほせ

『さしむし』は『やさし蟲』の訛つたのかとも思ふ。(下長苗代)

この唄が鮫では『さんほ』に代つてゐる。螢がるないからである。

だんぶり だんぶり

ほつつの水ア しーよッぱいや

こつちーや 來う

こつちーや こう (鮫)

兩手の指をほつほつこ合はせながら唄ふのに

子ッこど 子ッこど 喧嘩して

くすり屋のをぢさんがこめでもきかないで

入びこ笑ひて

親だちア 憤^カこる (鮫)

子供こ 子供こ喧嘩して

子供の 喧嘩に 親がつく

人さん 人さん

なかなか 止まない この喧嘩

藥屋さんで やッこ直した (八戸)

別れの挨拶の『左様なら』が尻取りになつたのに

左様なら 三角、また来て 四角、四角は豆腐、豆腐は白い、白いは兎、兎ははねる、はねるは蚤、のウミは赤

い、赤いはほづぎ、酸^マ漿は鳴アる、鳴アるは尻、尻は臭い、臭いは便所、便所は狭い、狭いば井イ戸、井戸は深

い、ふかいは海、海は廣い、廣いは世界、世界はまるい、まるいは鞠、まアりはあがる、あがるは飛行機、飛行

機は飛ぶ、飛ぶは鳥、からすは黒い、黒いは炭、炭はおごる、おごるは馬ア鹿。(八戸、鮫)

がある。

さめア 鮫脰 こしらへで

白銀ア範酢ウかけて

湊ア 皆くツて

小中野ア こまツた

八戸ア 腹やんだ (鮫)

などの類になるこ、何處にも相應にあるやうではあるが、集まらなかつた。

この類の尻こり文句のうちで、子供が二人掛合ひになつたり、或ひは一人で、早口に唄ひつづけて行くのがあ

ゆんべ生れた太郎 米イ食ひたい 米イ食ひたい
米イ食ひたがら 田ア作れ

田ア作れば 泥アつぐ

泥アついだら 川さはいれ

川さはいれば 流れる

流れだら 葎さ ミツつけ

よしさミツつけば 手ア切れる

手ア切れだら 麥の粉をつける

麥の粉をつければ 蠅やたがる

はいはらりんの物語 語り候 (八戸)

この末の句を戸來では

麥の粉をつければ 蠅がたがる

蠅がたがらば ほしいほい語りそうらふ

こやる。『ほしいほい』は『逐ひ逐ひ』である。

友達ア友達ア 花摘みに行かないな、何花摘むね さぐら花摘むね 一枝折つてひつかづぎ 二枝折つてひつかづぎ 三枝目に日が暮れで お婆さまの小屋さ 宿ミツて泊つたれば 朝まに早く起きてから 竹三本見つけて それをぎつくと割つたれば 赤い小袖が十二ひろ 白い小袖が十二ひろ 太郎坊に着せれば 次郎坊がうらめる

次郎坊に着せれや 太郎坊が恨める 隣の娘御に來せて 花かんざしさ、せで 花帯させで 仙臺まで送つたれば 仙臺の鼠こア あんまりあんまり聴しくて あつち行つても ちーよーいちーよーい こつちーや來ても ちーよーいちーよーい ちーよーいちーよーい鳥こにはやされで どうがまひが焼け出した 座頭が見つけて きかぢ(壘)が聞いて 足ほつかいが馳せて 手ほつかいが火イ消した (戸來)

上から 上から かんかん鳥こア飛んで來て あんばら屋に つっぱいた。あんばら屋に 何がある。箱こアある。箱の中に 何がある。太鼓がある。太鼓の中に 何がある。笛こがある。笛の中に 何がある。むすこがある。息子の名ば 何こいふ。したん太郎こ申します。(戸來)

二、千守唄

ねんねこ ねんねこ ねんねこやい ねつたら あッば方さ へで行くべア ねながら

ねんねこ ねんねこ ねんねこやい

『あつば』は『母』、『いんこ』は『犬』のいんこである。(倉石)

『ねる』は『睡る』といふこと、以下皆さうである。

ねんねこやアい ねんねこやアい ねつたら あッばほさへでいぐア ねながらあアがに ミツてかせる

『へでく』『へでく』『へでく』は『もも』に『連れて行く』『らふ』『いんこ』ああが『は』あが『のひいたので』赤犬』といふことである

(上郷、田子、淺田)

ねんねこやい、ねんねこねんねこ ねんねこやアい、ねたらあッば方さ へで行くやい、ねないば 小鷹

お母さんに 叱られ 子に泣がれ、近所の子供にや いぢめられ、はアやぐ正月ア来ればよい。風呂敷包みで 里へ行く、お母さん さよなら もう来ない。お父さん さよなら もう来ない。そんなこ言はないで また お出で、ねんねろねんねろ ねんねろやあい (戸來)

もうりは樂なやうで つらいもの、お母さんに 叱られ 子に泣がれ、近所の子供らに いぢめられ、早くお正月ア来ればよい。風呂敷包みに 下駄そろへ、おどさんさよなら もう来ない。おがさんさよなら もう来ない みなさんさよなら もう来ない (八戸、淺田)

坊やお守は 何處行ツた。あの山越えて 里行ツた。里のみやけに 何貰うた。でんでん太鼓や笙の笛、おきアがり小法師に 犬張子。欲しくなアがら 一つおけ、あしたの市にもッて行くべ やアいねんねろねんねろや い (戸來)

ねんねんころりよ おころりよ、坊やはよい子だ ねんねしな、坊やお守は 何處へ行つた。野山を越えて

里行ツた、里の土産に 何貰うた。でんでん太鼓に 笙の笛 (八戸)

おねねさまの お守は 何處へいつた。あの山こえて 里へ行ツた。里のみやけに 何もらツた。でんでんがツかに 笙の笛、おきアがり小法師に はり鼓。ねんねろねんねろやア (八戸)

ねんねこやんまの 白犬こ、山を越えて里さいぐ。里の土産に 何もらた、びいびに がらがら 豆太鼓、でんでん太鼓に 笙の笛。ねんねろねんねろ ねんねろやい (八戸)

おねんねお守は 何處へいつた。お山を越えて お里へいつた。お里のおみやに何あける。でんでん太鼓に笙のふえ、おきあがり小法師に 犬張子。おねんねおねんねおねんねよ (八戸)

ねんねん小山の小兎は どうしてお耳がお長いの お母さんのおなかに むた時に、櫃の實すぎの實たべたので そうれでこんなに お長いの そうれでこんなに お長いの (八戸)

ねんねこ やんまこ しろ犬こ、ねいで起きたら んまいこほんどこ 買ッてけるア、ねんねこねんねこ ねんねこやい (鮫、八戸)

一にこわいや子守役、二に朝起き泣く子をだまし、三に しいやべられて 四に叱られて、五に 五器等あらだ

められ 六に ろくだもの着せかぶせさせ 七に しみしまで改められて 八にはぢかれて 九にくどがれて 十に親どもにきどけられて さア ねんねろやいねんねろやい (戸來)

友達やい 友達やい、花ご折りに行がないが、何の花ご折りによ 櫻の花ご折りによ、一枝折つて ひかづんで 二枝折つて ひかづんで、三枝目には 日が暮れだ。爺の方さ 泊らうが、婆の方さ 泊らうが、どうで泊るなら 婆の方さ。ねんねろねんねろ ねんねろやい (八戸)

おねねろ おねねろ おごろごろ、おねねろ おごろごろ おしづみアれ

おねんねお山のお鬼は なぜに お耳はお長かろ、かやの實杉の實 たべるゆる それでお耳がお長かろ、おねんねおねんねおねんねよ

この二つは八戸の殿様のまごころでの唄だと言はれるものである。
子守を『もり』もりこ『ま』ま多くは言つた。子守と言ふのは近頃になつてからである。

三、手 毬 唄

よいよい娘は中娘、いせはごんざる貫はれて、きんなんごうし(金欄緞子)を七襲 白布かがみを七面 十二手箱をかすかすこ、こら程揃へてやる程に、必ずかへるな おりせ殿。歸るまいこは思へども、こうさんか、さんあ

ねこさん、お聞きなされや あいな様、日本照らさるお日さまも、西へ曇れば雨なる、東へくもれば風なる 他人の心はあの如くあの如く (八戸)

一つには ち首くはへて、二つには ち首はなして、三つに水を吸みそろ、四つには四まきまきそろ、五つには 管をさりそろ、六つには その機おりそろ、七つには なしきおりそろ、八つには きんなんをたたんで、九つに こゝの横町で しこめて おこめて、十に さりごこ ねりそうだ (八戸)

どツから下した お芋屋さん、お芋は一升いくらです。三十五文でございます。もすこしまけないか スチーヤラカボン。あなたのここならまけてやる。枳を出し、筈を出し、菜盤庖丁出しかけて、頭切られる八つ頭、尻尾切られる唐の芋、隣のをばさんお茶あがれ、お芋のめツくらばし あがらんせ。うまかつた うまかつた (浅田、倉石、田子、上郷)

朝に早起ぎ空見れや、美人のやうなる上臈は、西洋手拭を肩にかけ 草色ちりめん帯にしめ、白いさかづき手にこつて、一杯あがらんせ お客さん。二杯あがらんせ お客さん。あまのお客さん飲む時は 酒の肴は無くなつて、しろ瓜から瓜かぢか瓜 いやかいな いやかいな 一イ二ウ三イ四五六七八九つ十、一つあなたに貸しました (浅田、倉石)

おまんこまやで子が泣く泣くこ、何こ泣くやら 立寄りきけば、牡丹芍薬けんまりざくら、わしに一枝 この子

に一枝 くれて下さいよ 三百ついた (平良崎)

下の長屋で米搗き音よ すっさんさんさん 十二の音よ ゆうべ通りの 花嫁御 お嫁小袖さ 血がついた。血ではないもの 紅ぢやもの、洗つて濯いで 乾したれや 六疊の座敷へ 乾したれや 座敷は狭くて 出て走る まだ見せ見せお姫様 お姫のかたから 狀が來た。なにたら狀だか 讀んで見る、いさきはたおりつきもののおさい子あさい 三百ついた (平良崎)

俺はかがさま やぎもち好ぎで 昨夜九つ 今朝また七つ、一つ残して 袂に入れて、馬さ乗りしまに ほったらやいこ落した、取るも恥かし 取らぬも悔やし 羽こア生えたら 飛びあがれ やぎ餅 (鮫、平良崎)

おらが隣のかゝさま やぎもち好ぎで ゆんべ九つ 今朝また七つ 一つのこして たもささ入れで おま(馬)さのりしまに ほったらやいこおさし、さるもはづかし さらねアイもくやし、はねこアおえたら 三百あがれ 餅 三百あがれやぎ餅 (湊、下長苗代)

おらが坊主がよい坊主、木綿合羽もめんがわひの茶の小袖、野にも山にも寝たけれど、松葉にさされて眼がさめた。こ、は何處だと思たれや、鎌倉街道の森の下、森からつづいてしなの町、しなの町から何買うた、一にア香爐營二ア硯 三にア更紗さらきの帯買うた。誰に呉れよこ買うて來た。お千代に呉れようこ買うて來た。お千代は死んで今日七日、それが嘘だら行つて見ろ、松三本杉三本 合せて六本 京の雀さ大阪の雀さ あがったり下つたり ちーよ

い三百ついた (平良崎、田子、上郷)

えーぢーよがえぢーよまこえぢーよさがさん、さいたがさん、しのびがさん、さんこせイヤミのがみさアまはこ、は船場のさかりがさん、一イニウや三イが四ウ 五つ六つ七な八つ九つ十。一つあなたに貸しました。はい借れました。おう侍衆は おかこではやして えぢーよがえぢーよまこえぢーよさがさん (一郷、田子、鮫、八戸平良崎、戸來)

ひんじーやアくる 三年味噌 四年大根さ さいさいさい。赤坂あかの寅さま女房又來てどら打つさいさい女ばやして たんばこいぶして 笹原三軒 焼いたさ さいさいさい。鑑かん鮎あゆ丁 棚から落して 砥いでもこいでも ぎぎ目は見えぬさ さいさいさい (戸來、上郷、田子、八戸)

さんどん叩くは 誰さまだ。かうしこばやの あねさまだ。今頃何しに おだいました。せきだの皮緒せきこ 賣りに來た。せきだの皮緒せきこ なんほ色だ。赤いのど白いのど ねりませで あしたはまち(市)の日 まづまづ一貫貸しました。(鮫、八戸、戸來)

さんどん叩くは 誰ア娘、いさく作兵衛の 二番娘、さてもよい子だ 綺麗な子だ、わしの女房になるならば、親に三貫子に五貫、ましてをぢよめに 四十五貫、四十五貫を何にする、たかい豆買つて船に積む、船は何處船秋田船、秋田土産に何買うた。親の譲りの 玉手箱、あけて見たれや 何はいてら。血がついでら。血ではなが

んべ 紅じやもの、誠に紅だま おッしーやれど、向ひのおまんが鼻血たらしたま 言ふてたもれ いふてたもれ (八戸)

おらあ隣の千松さまは 江戸で遊びの歌留多に敗けて 金をよごせまお便りア来るし 一兩二兩なら借りてもやるべア 金が三百兩に大小は三腰、絹の小袖は百七つ、百七つ (八戸)

おらアかがさま仕立屋ごウ好き、下谷一番針者のでとで、五兩に片帯三兩にくけて、くけ目くけ目に口紅さして折目折目さ七房さけて きろりかろりま新寺まるり 新寺和尚さまに腰締められて おきーやれ放され帯解けまする、帯が解けたら結んでもやるべア、縁の切れたは結ばれぬ 結ばれぬ (八戸)

正月ア 門に門松、二月ア 初午、三月ア お雛さんま、四月ア お釋迦さま、五月ア お幟、六月ア あらたんめ、七月ア たなばた、八月ア お祭、九月ア 菊の節句、十月ア おゑんべす、十一月ア お大師講 十二月ア 餅つつぎ (八戸)

おらがお仙が 大根好きで 大根ばたけで 大根食ひ食ひ塩なめた あれアしーよッばい これアしーよッばいな。

おらがお仙が ごんほう(午夢)すうぎで、ごんほ島で ごんほ食ひ食ひ屁をたれた あれア臭いな これア臭いな。

おらがお仙が 人參好きで 人參島で 人參食ひ食ひ赤腹だ あれア赤腹だ こりア赤はらだ。

おらがお仙が 煙草すうぎで 煙草ばたけで 煙草のみのみ目がいぶい あれア目がいぶい こりア目がいぶい

おらがお仙が 芋をすうぎで 芋の畑で 芋を食ひ食ひのどからい あれアのどからい こりアのどからい。

おらがお仙が 機織りすうぎで 機をおりおり肩痛い あれア肩いだい こりア肩いだい (八戸)

四、お手玉ごりの唄

お手玉を八戸三戸の方面では『だんま』だまこ『五戸方面では『あやこ』言ふ。お手玉ごりの唄は『だまこり唄』『あやこり唄』こなるこなる。

お一つ お一つ お一つお二つ お二つ お二つ お二つおん三つ おん三つ おん三つ おん三つおんみな
お枕かへして おツてんばらりこ きーよきんな きーよきんな きーよきんな花咲き 花さき 花咲き はん
なもお大師こ お大師こ お大師こ おんだいびつき びつき びつき びつきすうすめ びつきもおしーやら
ず おしーやらす おしーやらすおねがひしーよ おねがひしーよ おねがひしーよ おんねもお買ひしーよ
お買ひしーよ お買ひしーよ お買ひしーよもんどし もんどし もんどし もんざしばったばた もんどしば
たばた もんどしかぎどし かぎどしばったばた かアぎも一俵 一俵 二俵 三俵 四俵 五俵 五俵もツて
たわら 五俵も馬かへせ 一足 二足 三足 四足 五足 いづもたんたん 瀧水 明日は蓮華の花みづ 開き
ミツても來い ただ水向ひの お山の雨ふりばんなこア 咲いだか咲かないか わしア知らぬ ミツてもこなく

『ごいはひ』を『神樂歌』として取扱つてゐる所のあるから推して、さうした神樂歌からこゝまで自然に育てられて來たものであるかも知れない。

だんだん 繁れや

おつほの松も

そよめぐ、そよめぐ

その一つである『おつほの松』といふのである。『ごいはひ』は何時でもこの『おつほの松』に始まつた。

『おつほ』は『お壺』『お庭』の義である。庭のこゝを『つほ』或ひは『つほまへ』と言ふ。

ゆるり たんぶりこ 浮びて

土佐から 船は

つくまで つくまで

門に立てたる 祝ひの松

かかる白雪 みな黄金

春のはじめに 客もうけた

客も申せや 福の神 (下長苗代)

ご祝ひは ただ 過ぎざれば

御庭の松も そよめぐ

縁はただ 深きさふらふ

ななせ(七文)の河は

浅くなるや 浅くなる

よろこびは 三よろこび

なも よろこびに 皆まるる

この三つは婚禮の時の唄である。(田部)

婚禮のときに唄ふにもさまざまある。

酒宴が済むと唄ひ、唄が終ることも一度お吸物が出て客は去つてしまふ。

『お部屋入の唄』といふのに

御祝ひがなわいさきて

繁く來よなこ イヤイノほん

つほ松がまた イヤイノぢよウめく

ヨイヤヨイ さでのこウヤイ

縁がただ 深きさふらふ イヤイノ
七瀬の川が 深かれや イヤイノ
浅かれや

ヨイヤヨイ さでのミウヤイ

よろこびは 三よろこび

なも よろをの 皆まるろ

ヨイヤヨイ さでのミウヤイ

部屋入の式がすんでこの唄、この唄のあまが受取渡しの式、それが終るに「受取渡しの唄」になる。

芽出たい芽出たい 媒人さま イヤイノ サイノ 神さまなりまして 縁結びを結んで渡します。はい受こります。

ヨイヤヨイ さでのミウヤイ

鶴と亀とのごいはひもつて

松と竹との重なり添ふをもつて

この家に納まる 納まって定まる

ヨイヤヨイ さでのミウヤイ

御亭王の 西の間に 小池はある。葎は三本生ひ伸びて 嫁と姑と仲よいよし 家内繁昌よし 孫さかえて暮しよし ヨイヤヨイ さでのミウヤイ

二日目には「禮返しの唄」をうたふ。

もりやどのむし よく聞いて下され

ゆうべ 神さまの座敷

今日の日は もりや殿のざしき

お酒と肴は充分に使ひます

座敷は福しく ヨイヤヨイ さでのミウヤイ

もりや殿の御馳走には 何をする

山にひいたる雉子の鳥

川にひいたる真鴨のこり

濱さかなとしては 何をする

鯛とすすき、これば吸物に 料理人さま頼む。

ヨイヤヨイ さでのミウヤイ

こりざがなには 何をする

すい、あぶらめさまさまの

小ざかなをまごのへて
これを料理人さま 頼む
ヨイヤヨイ さでのミウヤイ。(田子、上郷)

二、えんこえんこ

『どいはひ五十 さつま三十』の『さつま』は『さつま節』『薩摩節』である。この『さつま節』は殆んど失はれてしまつた
これに似たものに『えんや節』がある。この『えんや節』もまた今では『えんこえんこ』の中に含まれたやうな姿である
『さつま節』『えんや節』の歌詞は手に入らない。『えんこえんこ』だけの歌詞をあける。

『えんこえんこ』は茜染か、南部の茜紋りかの一抔頭巾を被り、その上から鬱金うづきんの手拭を疊んできりりこしほり顎の
下で結び、錢太鼓を両手に持ち、手首のまごころを器用に動かし饒にぎはさ小鈴こすずりをしやらんしやらんこ鳴らしながら踊つた
踊るのは主もに子供だが、年寄も踊る。

けやぐア許もとから 二三尺も貴ろた
帯に短かい たすこ(褌)にア長い

八幡薬師の 鐘の緒に

けやぐア買ッてけだ たいま(玳瑁)の櫛、させば名の立づ さ、ないもならぬ どうせこの櫛ア きま櫛だ

染めや 染めや なに染めがたに

淺黄に こまがた(細形)べね(紅)鹿の子

伊勢の國から 播摩の國さ 扇投げだ。届いだな おなづアい 誰れに届けよう 扱け扇(下長苗代)

えん子えん子こ 呼ばる時あ ようがた えん子 嫁にけで こまア缺けだ(湊)

三、に ひ が た

『にひがた』『にがだ』『にがだ』と言はれる『新潟節』で、傘かさ手拭てぬぐいをもつて何時でもよく踊られる。樽たるなきたたき
ながら唄つた。

にひがた出でから あをしま沖に 船は出船で ままならぬ

にひがた出でから 昨日今日で七日 七日なれども まだ出て 會はぬ

にひがた出でから まだ帯アみけぬ 帯はみけぬに 氣はみける

笠を手にもち 暇をねがる かさねがさねの いまごひ

笠を忘れた つるがの宿さ 天氣ア曇れば 笠こひし

佐渡で蕾んで 新潟でひらぐ 兎角新潟は 花どころ

四、おひわけ

『おひわけ』は『追分』で『追分節』である。『にひがた』もよく唄はれる節で『おひわけ』『おひわけ』などと呼ばれる。謂ふところの『松前追分』であるが、歌詞としてはこりたてるものはない。

鳥も通はぬ 八丈が島は 今は開けて 馬車も通る

春の彌生に 啼くうぐひすは 梅の小枝に ほつほけきーよ

函館沖から 白帆が見える あの船ア津輕の 中わたり

西は御番所 東は關所 關所番所で ままならぬ

あいな あねさに 用やはあらば せめて場所まで 送りたい

松前生えたる 紫竹の竹は もこは尺八 中らうだけ うらは恵比壽の釣竿

船底に 枕揃へて きく濱千鳥 寒いじーやないかよ 浪まくら

一に追分 二にくるえだは 三に坂もこで 日を暮らす

紫の 紐にからまる あの鷹でさへ 落ちて來れば 藪にすむ

五、あいやぶし

『あいやぶし』は『あやぶし』も多くは訛つて呼ばれてゐる。『あやぶし』と呼ばれることも勿論である。これこそ唄はれるものに『じんく』『じんくをざり』がある。これは『じんく』の訛つたものである。

『あいやぶし』はさきには『じんく』などと一緒に幾つかの唄を順序だてて唄はれたものゝやうであり、その名はそれらを併せた上の名稱であつたのが、その幾つかのあるものが失はれ失はれたあきでは、その一つが單獨にその名でよばれるやうになつたものであると思はれる。

『あいやぶし』は『さかもり』『あいやぶし』『じんく』『だうちづぶし』『てうしづし』の五つから成つてをり、その

五つが上の順序で語りつがれた踊られたものであつたのが「てうしぶし」「だうちうぶし」がさきに「び三つ」になつた。それで或時には「あいやぶし」は三つから成つてゐるを考へられた時であつて、この期間が久しく續いたらしい。それが更に「さかもり」が「さかもり唄」の混雜を招いて結果遂ひに一つ一つに割れてしまつたものであると思はれる。この唄は海路の交通がもたらしたもので、鮫、みなぎが先づこれを傳ひ、それが殆んどこの郡全體に及ぼしたものであらう。

イ、さかもり

「さかもり」は早くも「さかもりうた」酒宴の賑はしのための唄に紛れて滅んだもの、やうではあるが、それは「あいやぶし」が三つになつてからのことで、その前に「だうちうぶし」「てうしぶし」の亡くなつたことは認められさうである。今單に「さかもり」を呼べば「あいやぶし」「じんく」「おひわけ」「にひがた」「どどいつ」しろかねころし」「よさねぶし」などすべての酒宴の唄を考へられてゐる。小中野では或時には「しろかねころし」をさして「さかもり」を呼ぶやうである。このうたが「さかもりうた」の現在では主なものである爲かもしれない。

「さかもり」は古くまた「おんさぶし」も呼ばれた。調は二上りである。

あひたや みたや こよしやど にがひのいどの にあがりや

と言つたやうに、多くの訛つたものが多く、随分長く曳かれる悠長な唄である。

逢ひたや 見たや 戀しやこ 願ひの絲の 二上りや

色よき花は 高山に 及ばぬ戀路に 身をやつす

松前さまは 春の花 春は鯨で 一盛り

あの山かけの 石燈籠は 今宵は誰が こぼすやら

阿漕が浦に ひく綱も 度かさなれば あらはる、

思ひもよらぬ 今朝のゆき 誰が踏みそめし 下駄のあこ

枯木の枝に うぐひすは 花咲け咲けこ 啼くわいな

ロ、あいやぶし

「あいやぶし」も二上りで、唄の中へ「ハット サツサイ」を掛聲がはいり、末の七音と五音との句の間に「ヤレ」を「コレ」の聲を入れる。唄の前後には「ハア、ヨイヤアヨイヤア」或ひは「ヨイヤサア ヨイヤサア」を囃子がはいつた。踊はいまは拳をやる時にだけ酒席では用ひ、二組になつて行つたり來たりして踊るが、一般には手踊として昔のままの踊がついてゐる。

『あいやぶし』の名は「アイヤ」といふ第二の句から出て来たものであることは直ちに考へられる。

あいやえ あいや さかたの 川まん中で あやめ咲くこは しほらしや

あいやえ あいや 長の字長いこよむが なぜに 吉の字 よしこ讀む (鮫)

あいやえ あいや いやそれ 煙草のけむり 次第しだいに うすくなる

あいやえ 鮎は 瀬につく 鳥あ樹にこまる わたしあお前の 氣にこまる

あいやえ あいや さかたの川まんなかで あやめ咲くこは しほらしや (下長苗代、館)

以上は元唄によられてあるもので、そのほか普通うたはれる唄には

やさほえ やさほやさほこ 懼かくすがた わしも櫓を押す かいもかく

いくらえ いくら通よても 青山もみぢ 色のつくまで 待たしーやんせ

いくらえ いくらかよても 戸板に豆よ 豆は 戸板に のりアしまい

さまはえ 様は三夜の 三日月さまよ 宵にちらりこ 見たばかり

島はさえ 島はいろいろ 七しま八しま わたしアお前に 淡路しま

あきはえ 安藝の宮じま まはれや七里 七里長濱 七ゑびす (鮫、小中野)

樺こいふ字は 木扇に華よ はなに離れて 氣はのこる

おもはさんすな わしおもたこて わしにア主ある 花だもの

なんほぬしある 花だこて 一枝折るにも 娑婆の義理 (野澤)

あひの吹くのに 船ア來ない なぜに 荷物ア無いのか 船ぎめか (戸來)

竹の切口さ すこたんこたんこ なみなみたツぶり 溜りし水は 澄ます濁らず 出ずいらす (野澤)

ハ、じんく

「じんく」は「しほがまじんく」ミ呼ぶものと同じミ見てよいやうである。本調子で唄の終りに「ハットサツサイ」ミ聲をかける。館村の「ひらがた」も野澤村の「いぢぢぶし」もこれと同じであるらしい。たゞし館村でも踊は「じんく」ミよんでゐる。

さアさ 出た出た もろこし船が 波にうたれて 岸に寄る

じんく踊らば しなよく踊れ しながよければ 嫁にこる

さがり松から 塩釜見れば お客もて出す 四つ手かご

鮫のをなごこ 大阪樽は 天下晴れての 菰かぶり

風はさが西 沖ほどまかた 思ッたみやこ(宮古)へ 寄せられぬ

押せや押せ押せ 下の關までも 押せや南部の 躑が崎

島の鷗が もの言ふならば たよりききたい 聞かせたい

寄せて下んせ もどりの節は 一夜なりこも 鮫浦へ (小中野、鮫)

破れ障子に うぐひすこめて はるかはるかミ 待つてゐる

せくまいせくまい 世界は車 廻る時節を 待たしやんせ (小中野)

小夜の中山 ひこりて寂し 一つ音を出せ ほここぎす (戸來)

八幡林の お堂建てたる 左甚五郎の大工殿 煎じてあがらされ かながら (鋸屑)を

あれを見ないが 浅間の嶽を なぎた煙が三すぢ立つ 三すぢ立つこは いつものことよ 四すぢ立つこは 氣にかかる (館)

こいぢこられて 腹立つならば かたぎうたんせ 色がたき

わしのこいぢば 賞めるぢやないが 味は福島の つるし柿

大阪下りの蛇の目のからがさ 轆轤の心棒の竹に おもひばお前にささせたい

梅にうぐひす 柳につばめの 松に鶴 (野澤)

二、だうちうぶし

『だうちうぶし』は『道中節』であらう。三下り。今ほこんど唄はれない。

だうちうぶの まづのほる のほりくだりの でかけ茶屋

茶屋のかがア こちや寄れ まぐら 枕よらないば 身も寄らぬ (野澤)

山やま見れば 霧のエイ かゝらぬ 山も無い

笹山見れば 笹のエイ 露やら なみだやら

めでたい座敷 鶴こエイ 亀こは まひあそぶ (鮫)

ホ、てうしぶし

『てうしぶし』は三下りで、前のこおなじく今は唄はれない。『銚子節』であらうと思ふ。

伊勢の はしりがね 二十五はかぎり 今年ア二十一 あど四年 (鮫)

てうしおそばに 残燈立^{あかりたて}でて 一つあけます 爛^たさまし

かッがアも かがアだす かななこりやめで こどもこどだす 晝まなが (野澤)

六、しろがねころし

『しろがねころし』は『しろがねころばし』とも言はれる。『しろがね』は『白銀』で今の湊町の鮫灣に向つた漁村である。『ころばし』は聲の良いものが得意になつて轉々玉を轉がすやうに聲をひいて行くそれから起つたものであらうと思ふ。『ころし』を若し附會すればその美聲によつてきく者を惱殺するこいふ義にまつて大過なきものは思ふが、單に『ころばし』が『ころし』に移つてきたと見る方が正しいのかも知れない。

湊白銀などのものが、船着場であつた鮫灣の、紅い灯にあこがれた時代に何時かはなしに生れた一つの郷土情調である。今になつてその起原の詮索はなしうべきではない。たゞいまだに鮫のおしやらく(遊女)であつたもの、作と稱せられる二三があるのから推しても、そこで生れそこで育まれたものを見るのに無理は無いやうである。

綺備に迷はない 姿に惚れない 金で買はれぬ 心意氣 (よしゑ)

親がかり 通ふ千鳥は まだ親がかり こがる、いさ子は 籠の鳥 (いさ子)

よしゑ、いさ子にも今あれば七十歳前後の女であつてはるか後期には屬するであらうが、今の『しろがねころし』の三味線が全然『二上り甚句』なるものゝ緩かなのゝ急なのゝの度を異にしただけでだがひに等しいものである。こおなじく、この頃の三味線が『しろがねころし』に摸された時であらうかとも想像される。『二上り甚句』を鮫では『いまはやり』小中野では『東京さかもり』と呼び『しろがねころし』よりは甚しく遅れて移植されたものであつた。たゞこの

三味線のために『しろかねころし』が多少その音律を變へたであらうことも考へられる。のみならず實際に於て『しろかねころし』はその肉聲の上でも三絃の手の上でも必ずしも皆一様でなく種々な姿を持つてゐるのである。

『しろかねころし』は二上りで囃子は古くは『キタコラサ』と短く切り、今は『キタコラサツサ』とや、伸びて行き、または『ハイハイ』といふがはいる。この唄には踊は無かつた。昔あつた話すものはあつたがその姿を傳へないしまたその昔のそれを信ずるものが區々してゐるので、眞偽は今定め難い。たゞ五七年前、鮫に來てゐた踊の師匠松島屋島松(春十郎)がその二三に振付けをしたけれども、それぞれの歌詞によつて形容を添へたといふだけで『しろかねころし』の踊は稱し難く、その頃の幾人かゝたまたまこれを踊ることがあるだけで感心したものではない。

白銀そだちで 色こそ黒い 味は大和のつるし柿

山坂山坂山坂こえて 逢ひに來たのを 歸さりーよか

鮫こ湊の あひだのきつね わしも二三度 だまされた

氣になる氣になる 田んほのきつね これ程待つのに こんこ鳴く

白銀沖から 帆をまき上げて 湊川口さして來る

鮫で蕪島 白銀で三島 湊川口 明神さま

鮫でかぶしま 白銀ア三島 漁師ア口あいて さかな待つ

沖のかもめの 嫁ごり見だが 鯛なますに 鯖の鯨

酒の肴にあ 何アまだよがろ 海の中 鯛すゞき

田舎なれども 鮫浦見れば 沖に蕪島 背に恵比須

白銀そだちは紙衣かみこの性だが すこしもめれば 切れたがる

磨けど磨けど 根が鐵なれば 時々浮氣の さびがつく

まごまるものなら まごめておくれ 誰しも戀路は 同じこい

せくまいせくまい 曾我兄弟は 十八年目で 本望こぐ

せくまいせくまい 曾我兄弟は かたきたづねて 本望こぐ

沖の蕪島 辨天さまは わしのためには まもり神

鮫で呑む茶は 澁茶もうまい 鮫は水がら 心がら

行けや鮫浦 かへれや澁 こゝは思案の みなこ橋

送りたいぞや 送られまいか せめて與七の 川までも

送りたいぞや 送られまいか せめて四つ谷の 杜までも

種蒔かぬ 庭に松さへ 生えたぢーやないか 思つて届かぬ 事はない

豆の葉に 粟を包んで お主にあける まめでござんせ あはずこも

見定めた 的が無ければ 心の弓を どうして迂闊に 放さりーよか (鮫、澁、小中野)

常に唄はれてゐるものゝうちから以上をあけただけで、どの唄でも唄はれるのである。次にすこしばかり調子のちがつたものをあけて見る。

白銀ころばしア 白銀須賀から 鮫までこウろだ 鮫の蕪島で 七ころび (野澤)

一日逢はなきヤ 二日三日四日五日六日七日八日 九日十日も 逢はぬようだ (鮫、小中野)

おらが隣の 馬鹿嫁たのんで 人參賣るにやつたけやな 人參賣るよば知らないで 酒を呑んだ大根買はないか
こ ふれださうだ

おらが隣の 馬鹿嫁たのんで 南瓜賣りにやつたけやな かほちやー賣るよば知らないで 畑のごろつき買 な
いがこ ふれたさうだ

竹に雀は ちんちんばったばたこ おはねを揃へて 宿めてこまる わたしアあなたの氣にこまる (下長苗代)

『しろかねころし』は鮫、澁、小中野などの地方から出稼ぎする妓たちのおもむく限りの土地土地に今では廣く傳播されてゐる。青森縣、岩手縣の全圖、秋田縣、宮城縣の一部、それに北海道にわたつて行はれてゐるが、その名は時に『八百節』になり『鮫節』になりして『しろかねころし』の名にばかりよつてゐない。この海岸地方の妓の分布を見るには寧ろ恰好な唄も言ひうる。

七、盆踊の歌

盆踊は今でも大陰曆の十月に行はれる。その十三日から十六日までを中心にして、或ひは七日盆(七夕)から二十日まで、或ひは七月の月中さいふやうに、その所によつて定まつてゐる。その外にその町その村その部落部落の祭の夜には何處でも何時でも行はれてゐる。

踊の手振や足敷によつて、唄の調律によつて、また囃子によつて、種類はさまざまあるが、歌詞は殆んど一樣である。足敷は普通のは十三足であるが、『十二足』といつて較では別な足のふみ方をするのがある。『なされぶし』といふが唄ひ方では主であるけれども『なにあどやらい』『さか』『ささなにや』『よばれるものもある。調子の急がしくなつて來たものに『さんかよぶし』『さか』『ばかばか』『さか』『いらぶし』『さか』『さいのぶし』『さか』『松前』『さんさぶし』などさまざまあるこれらは多くは北海道から傳はつたものである。そのうち最も異色のあるものは『おしまこ』『おしまこ』と呼ぶものであらう。

『おしまこ』はまた『うしまこ』とも呼ばれて、もこは三戸郡一圓に行はれたものであるが、今では鮫、湊、小中野などに名残をこどめてゐるだけである。『おしまこ』の起源は明らかでない。『下北郡郷土史』には

南部藩二十八世重直公管内巡視の砌、時恰も七月十五日の盆に至る。代官所にて老若男女を呼集めて踊らしむ。中に『おしま』なる美人美聲あり、藩主大に喜ぶ。それより右のオシマコ踊り郡内に擴るに傳ふ。件のおどりは三戸郡まで南部通一圓流行す。

さかいて次の唄を載せてある。

田名部オシマ子の音頭さる聲は大安寺柳の蟬の聲

この唄が野澤村で次のやうに唄はれてゐるのが或ひはこの間の経路を示してゐるのかとも見られるが信じられるかどうかかわからない。

田名部うしまこの おんどさるこゑは 夏のやなぎの 蟬のこゑ

聲のよいのに うだせできけば 五しきばやしの セみの聲 (野澤)

『おしまこ』はこの歌詞を節から節へうつる時に重ねて行き重ねて行きしてその聲を長く長く曳くために、一つの歌詞を唄ひきるにだけで餘程の時間を要する。そして盆踊が生れて來たと言はれる『法歌』といふものを想起されることが多い。その音律の上でもその手振の上でも最も多くこれが感ぜられる。これが『ないも』『ないもないも』『こ』では呼ばれる『大念佛』ある地方でいふ處の『法歌』の現に行はれてゐる湊町の白銀に尤も深い根を下してゐることは面白い事實である。『おしまこ』は矢張りかうしたところから發してそのまゝ、昔の姿をこどめてゐるのである。見た方が願當ではなからうかと思はれる。

『ないも』は鮫村でも階上村でも行はれたが今はきかない。白銀では『大念佛』と書いた高張提灯をさきにして新佛の佛る家の家族が三箇年の間、その他に信心者が特に加はつてその宿から繰出し、太鼓、鉦、笛の囃子を入れながら念あを唱ひながら墓地をめぐる、それぞれの新佛の墓前に松あかし(迎火)をする。各自は手に提灯を掲げ世話役は團扇を持つてゐる。それが福昌寺の玄關でぐるぐるの輪になつて唄ひながらめぐり、世話役はその所々で團扇を掲げるのである。このあま白銀では世話役或ひはその宿の前で踊を踊つてゐる。

『ほねないも』『ないも』『ないもないも』はいづれも念佛の訛つたものであらうし、この孟蘭盆に行はれる行事が、すくなくも盆踊のうちの『おしまこ』は一つものであつたらうと考へる。そしてそれが一つであつたのが、二つに分れたものであるとも考へる。

白銀でいつも唄はれる『おしまこ』の唄は

そろたそろた 踊り子の衣裳は さこの染屋が 染揃へた

盆ど七月あ いどき(一時)に來ないが 小豆どころこで ぢーやがぢーやがこ

そろたそろたこ 踊り子がそろた 秋の出穂より なほそろた

さがるさがるこ 長者の山アさがる さがる長者の山 今夜ばかり (湊)

なにアどやら なにや なされだアでア なにやアどやアら (鯨)

『おしまこ』のほかのは歌詞にはあまりに關はらないから次にすこしばかりつらねる。

踊をどらば 寺の前で踊れ 寺の和尚さま 見ではめる

噓^ひせたむせたこ 音頭こりア噓^ひせた 早く持つて來ないが 砂糖の水

さがるさがるこ 長者の山さがる さがる(賑ふ)長者の山 今夜ばかり

踊をどるも 二十四五五六 三十こければ 子が踊る

踊をさらば しなよく踊れ しなのよいのを 私ア嫁に

踊をどらば ぐるぐる廻れ 空のここさま まはるやうに

揃った揃ったこ 踊り子アそろうた 秋の出穂より なほ揃った

今夜の踊は しまらぬをどり 五尺繩もて 締めておけ

踊り見に來たが をどりに來たが 此處は立見の 場所でない

振うれ振れ振れ 五尺の袖を 袖を振らないば しなは出ぬ

盆十六日 雨降るならば 寺の十文字目で 地藏あ泣ぐべア

盆の十六日 闇夜でけないが 嫁も姑も 出てをどる

わたしア音頭ミツて をどらせるから 夜明鴉の わたるまで

をどりをどるも 昨日今日ばかり 明日は山々 草こりに

三千世界の 鳥をころし 主さ朝寝が して見たい

若しも道中で 雨降るならば わしが涙さ おもはんせ

赤い袴は だてにはかけぬ かあい男の 目じるしに

しんほ杉の葉に 光り物アあつてらよ 星かほたるか 化物か

おらもなりたい 八幡の竹に 八幡はちまん 旗竹に

何も知らない なされ節ひみつ なにアどなされて なにアどやらイ

高いたかいさ 高館ア高い 南部八戸 目の下だ

嶽の白雪 朝日でまける 姉こア結った髪 寝でまける

はけた頭さ 毛こ三本生えた お母さんよく見た 蒸汽(汽船)さ見た

はやるはやるさ 人力車はやる おらも乗りたい 湊まで

姉ここつちーや向け かんざしア落ちる 簪ア落ちないヤ 顔見たい

頭禿けても 薬罐のやうでも 帽子被れば よい男

やもめ娘さ 山吹の花 なんほ咲いても 實はならぬ

立てば芍薬 坐れば牡丹 歩く姿は 百合の花

わたしア死んだきて 泣く人持たぬ 寺の卵塔場で 鴉ア鳴ぐ

馬鹿にしーやんすな 三尺野郎め わたしあ五尺で かたきこる

をがしごと見だ 天狗澤てんござの澤で 兎アへご(牛)さ乗って 堰せきはねた

今朝の朝草 何處で刈つた 東長根の かけ野場で

月さいどぎに 出て来たわたし 月は山蔭 わしア此處に

きりぎりす 何處で生れて 聲がよい 七つ細みち 笹やぶで

月は出て来た 青山抱いて わしも抱きたい 十七八

山脊吹かせて 松前わたる あさは野さなれ 山さなれ

あねこどごさいぐ 一升樽さけて ころろ産生^{うぶしな} おみき酒

あねこどごさいぐ 柴刈り山さ 柴にはぢかれて 七ころび

あねこちーやんちーやらめいで 粥こ鍋まけた 杓子アおよばないで 手でさらった

酒は米の水 飲まねば酔はぬ のめば甘露の 味がする

肥えだべごこさ 曲り木の鞍^{くら}こ 金のなる木を 横づけに

今年ア世中よい 三六の世中 米は一石 粟二石

竹にからまる 朝顔さへも 露に一夜の 宿くれる

今夜のお月様 よぐ出たお月 同じ床の間さ ががんこさす

はなればなれの あの雲見ないが 親の無い子は あの如く

親の無い子は 日暮れに知れる 指をくはへて 門に立つ

あねこどごさいぐ 豆の草取りに 豆は子だけで よい豆だ

お前正宗 わしアさび刀 お前切れても わしア切れぬ

當世はやはりの ランプでさへも 芯^{しん}がなければ あかされぬ

隅から隅まで 開けた時節 なぜにお前は ひらけない

開けないとも 主あ言はずとも 在郷育ちの わしじーあもの
馬鹿にしーやんすな 長者の子でも わたしア乞食の 子ではない

寝でもねむたいでア 夏の夜は 枕よせる間に 夜が明けた

朝草に 刈込められたか あのきりぎりす 思ひ知らずに 馬に乗る

其三 民 謠 (二)

一、田 植 唄

『田植唄』は田植する時の唄ではあるが、そのまゝで『ごいはひ』なごのやうに唄はれる場合が多い。

お年男の太郎次殿は 五階のヤイ松を 何處で迎へた ハアヨイサ ヨイサ ヨイサ

ソレガヤイ 西の御嶽のヤイ瀧の澤で 五階の松を迎へたな ハアヨイサ ヨイサ ヨイサ

お年男の太郎次殿は 若のヤイ水を 何處で迎へたな ハアヨイサ ヨイサ ヨイサ

ソレガヤイ 西の御嶽の瀧の澤で 黄金交りの若水迎へたな ハアヨイサ ヨイサ ヨイサ (八戸)

アアウン 腰ア痛いでアヤイ 肩アやめるア どこでア 腰やすめよ

やめるところでア 腰アいだいでア 肩アやめるア どこでア この腰 阿彌陀ほどけば 通りぬけるでア

お日暮れもこのお日様 何處さしおでア 西をさしておでア 御縁があればこそ

今朝いんづる朝日をば されも立ち寄ッてをがめ

おひるもぢの お女郎やい 何時の衣裳でまゐる 夏の衣裳でまゐる

夏は白きぬのかたびら着 藍染からかさ藍染 だれのからかさ (上郷、田子)

西の坂の坂中に 名の無い鳥こは巢をかけた。何こさやづる。與太郎殿におなめ(妾)もでこさやづる

今朝のはがのあまに 咲いたる花は何の花 稻の花か金のはな 今は長者こなるはな (野澤)

朝 の 唄

今朝のいんづる朝日をば どれもどなたも出てをがめ

おもひ殿御は田に立だせ しかま見ればにごにごご めされがくにもまされた 米こぎのお手もこは 白き水は
流れる 名のやいほども流れる 槽(こが)やほども流れる

お晝持の唄

お晝持の橋かけは 板の橋をば踏みおろし 金のそり橋架けようこ。
お晝もちのお膳は 九十九人前揃へた。

かいは(柏葉)折の唄

かいは折のわらべは 折るべきかいはばをらないで 十七八さ目をかけた

晝の唄

お田の神の晝休み 何の枕でめされた 綾のまくらでめされた。
お田の神のたんならび うしろ千刈に前千刈 二千刈も一トはがに

夕の唄

お日は暮れるミ鴛鴦は 西に戀人あればこそ 西にさして飛ンばれた。
腰はやめると金腰は 何處で此の腰は止まぢーよや 阿彌陀ほどけを通りぬけで その下でやまぢーよこ。

夜の唄

あまり部屋こにゐるほどに いた、頼んで占ひ聞けば 何の神のせいもない 手なへ手つほりそらだつみ(野澤)

二、春田打うた

『八戸風土誌』(稿本)に

春田打

名の如く春季田の打返し播種等より秋季稻の收穫までを叙したる唱歌を三味線に合せ舞ひ唄ふものにて、古へ年代は不詳なれども松太夫三吉なる者八戸に住し(或は盛岡より來りしならんミその子孫の語れり)近郷の民家に至り、此わざを演じ惠比須大黒の晝像を配り年穀の豊饒を祝き謝儀を受け來りしが八戸藩開始の後、延寶元年正月三日殿中謠初の式として松太夫を殿中に招致し、徒目付役所に於て勝手三役(吟味役、目付役、勘定頭役)列席して其技を演せしめたり、此日松太夫烏帽子直衣にて出頭し、惠比壽大黒の晝像を臺所へ呈し、躑の小模形を執り唱歌一章毎に假面を替へ(此假面八枚及び小模形今坂口氏に傳)三味線に連れ左の唱歌八章を奏し、舞踊り以て謠初の式を終る。爾來恒例となりて明治維新に及へり、享保十年七月八戸藩より松太夫へ領内典屋頭を命せられた其覺書及び春田打の唱歌は子孫坂口松太夫祖先の遺物として傳來保存せり、即ち左に録して考證に備ふ。』
ミ、その唄をのせてある。今は全くそのかたちをこどもないが、農家の行事を唄つた唄に相關するところが多からこゝにもそれを載せる。

春田打うたの一

やらやらやらやらや、めいてよう、出雲の國より御田うちはまいりた、まいりたるや、所に、これのおうたはどれどれよう、うつてこそやまいらしよう、南まぢはせんちよう、北のまぢはせいんちよう、中の町のようきを

ば、御苗代や所にうちは定めや、よろこぶよう、是よりも南によしが、おやまのふうもきに、千年へたる翁三万年へいたる翁三よう、たちまわりくねりて、はやしたてたるきなれば、春の日のやれながさに、この歌はさきつうめて切すけ、きりやすけたる此歌の、かたのほどにかついで、うつへき御田は是ぞ、しづかまちをのほりにこがねまちをこくだりに、田をうばうつてや、めでたよう

その二

たねまきのじやうすてよう、まいなるや、いけをばなにが池三申よ、福が池に富が池、たないけ三名をつけ、さはさははらふて、にこり水をつきのけ、ごふけ水をたいておろすへきや、種は備前早稲に、さうで雀しらすのはや早稲が、よふをなるや、稻草俵なごにひようをして、おこり入ては、とをり入、御苗代をなされるよ、こ歌にもかいたりや、かいて回る所に、種蒔のじやうすて、白銀のたな桶、朱の糸でからかいてすくへ入ては取入、ゑんやつさいふて、はかつて、明きの方へ向いてよう、南方へもゆうざり三よう、西方へもゆうざり三中のほぎにまきこめ

その三

三十三日三申は、お早乙女ふうれたよ、何處の國をふうれたよ、あいつようかやあやかさしなのようかやすうけかさ、ばんごうをようわやたかがさど、ろく國の早乙女、唄ひこがれまいりたよう、正月のこいはひに、松の葉をば手に持ち、ゆうをうたるものかな、やら唄をばや、うたまでよう、田をばや、そふぶりく三植たりな、ざはこあがりたまひば、

その四

のうおは何處の早乙女、鎌倉早乙女の、ごしやうは、にかいつくり八ッ棟、ようがあげればひるなる、日がやくれば、ならのかねの、みくらなるもの、御門口を見れば鶴三亀は巢をかけ、鶴は千年榮ゆる、亀は万劫や經たるもの、おつほ口をみたれば、五百千本の、竹の子、五百千本がそなた、ごしやうがめんしやうなるものはよう、唄をばうたふて田をば、そうふかく三うへたりや、ざはこあがりたまひば、

その五

七十五日三申すには、かり屋かけを成さる、かりや掛のしだいは、よろつよしは親はなよう稲刈の上手で、まあつ鎌をきたへて、それ我が影の鎌をば、金があまし三申て、それ天竺へのほせて、月の輪形の鎌をば、しやじおろし成さる、腰のほごによりさしまわす、お田をほめたよ、上の田のや稲穂は下の田へもゆうらゆうらり、ゆらめきまわる所をよう、下鎌やさつ三刈りまいり、むじり結んで、おがの神や大黒三ころ神へ参らしやう、三鎌四かま、かつたりな、三束三把の稲をば腰のほど脊負ふて、でぢらちよこやおろした、

その六

おろしおいたる稲をば、誰人はこくよう、よろつよし三親、親なよう、稲こきのじやうすてまあつ、竹をきたへて、今年竹は節みじか、二年竹はしやうがゆはひ、三年竹のよよしをも三節切りて、ひななかにつまいて、稲こひたるしだひは、かた膝をばをうり膝、かた膝をば開いて、おし三うめて、ゆふざらり、かい三うめてはゆうざらり、こいておろす籾をばよう、白金の及びろかす、小金まいたるきねてなよう、しんきれやちやうちやう三

てんごうらくにおしたりな、かなわかの身をもじてよう、すうわりや、すすうわりミ、すうわりく〜とふいたりな

その七

それにまごみやうちつれて、みやまそうぜんゆはるゝよう、是よりも北にこそ、まきの林ふうもごには、駒がふうふうや降くたり、神にこりてもごそちなし、佛にこりても印なし、ましてや人間しらざれば、ひへさんのおさるこそ、みたてまつるのめでたさよ、さらばその名を記さんご、ち、馬の其名はのぼつ太郎ご申なり、ははや馬のヤ御名をば天人ごうごや申なり、天人ごうにや、のぼつ太郎年々あつまりたまへて、ふうく〜男女のかたらひす、父や馬のヤかたちより、名馬千正、おもけやる、母や馬のヤかたちより、とね千正おもけやる、二千正のやめい馬をば、さらばみまやを記さんご、おもてみまやは三十三、うらのみまやは三十三、兩方合せて六十六、つなきこめたるきのへ申、つながれたるはかのへ申、それからみまやははんちよする、

その八

さらりく〜ご百まんがかよふも（以下破棄散じす）

この唄を唄つた松太夫の典屋頭免許證文ごいふものを「八戸藩史稿」にかいてある。

覺

- 一、かふきしはる
- 一、あやつり

一、小芝居追出し

一、大かくら

一、かこかたり

一、西宮札引

一、馬やまつり

一、あや立物

一、手つなし

一、大からくり

右ヶ條は不及申是に付添類者御領内中不殘支配可致者也

享保十年己七月十三日

松田勘十郎印

戸來清三郎印

八戸典屋頭松太夫

三、餅搗きの唄

前出し

そろた揃ろたご、きぎア(杵)そろたよ、よいでア、さろの木をだちの きぎアそろたよ

ヨイヤラサンヨ 十七八のおろすきぎはよ、よいでア 八幡お山にひまきますアよ、ひまきますこはヤイ、ひびくせでいよ、よいでア、石もこんごみ碎けますアよ、まして搗く餅ア白くなるよ

ヨイヤラサンヨ 十七八のヤイ乳を飲めばよ、よひでア、飴か甘草か夏梨子かよ、飴でない甘草でアないよ、よいであ 一夜づくりの甘酒だよ、あま酒だミヤイ よい酒だよ。

鎌倉のかものすけアよ よいでア 音にきこえし船方よ 上る船には花を咲かせよ、よいでア、下る船にはよ實をならせよ

旦那さまのヤイ 床の間にアよ よいであ 白き鼠はよ 巢をかけたよ 白きねずみは何處ねずみよ よいでア 主佐の港の ヤイ福鼠よ 福鼠だミヤイ 白ねずみよ (田子、上郷)

四、米つきの唄

米つきの唄も唐臼うたも磨臼うたも前のもちつき唄も共通してゐるやうであるが、それぞれの土地で呼ぶやうにこゝには區別しておいた。

七つしめこは そら見れば へかけきころで 忘れて 殿に顔うたれ まへの河原に身をすてる

紙は浮ぎるし 身は沈む 兄弟親子 見たならば こよしかべア ましてあ しのぶ殿御は こよしかべア (上郷、田子)

酒屋の米つきには 何がなるよウ 難儀だ親父の子供アなる

向ひの小見世に立つあねこ けろッてけなけりーや ミッてくる

十七八のおろすきぎアよウ ヨイヤナア 八幡お山まで 響きますよウ (島守)

七つ下りに出て見れば 前の穂はせはすがれる すがれらば 出て刈りあれ 七十四人も 出て刈りあれ

七十四人もゐたなかに どれは長者どんの婿どのだ 左鉢巻ひだり鎌 それは長者どんの婿どのだ

鎌倉のかものすけ 舟のり上手ミ 音に聞けだ 上る船さば 花咲がせ 下る船さは 實をならせ

鎌倉の御所の寺 いがなる大工は建でし家だ 金の柱にこだねのたるぎ 屋根は小判のこけら葺ぎ

十七八のおろすきぎ 八幡お山まで響きます 八幡お山さびびきもしならば 石も米よぎ碎けるべい 石も米よ

こ碎けるならば まして搗ぐ米ア 粉になるべい。

酒屋米搗ぎに 何アなるべ なんぎなおやぢの 子供アなる

酒屋米つぎを立見るあねこ 見れば見るほど目にこまる けるにーやけまいし 婿にはいる

酒屋手代衆に何はなる 古い十呂盤そろばんの珠はなる

酒屋かがさまに何はなる 古いまるまる(便器)の底はなる

十七八の今朝の役ア めいじちようじのお茶の水 九十九匹の駒の水 九十九匹の水汲めば 髪かみの結ぶがな暇も
無い 厩うまの腕木に腰をかけ 死ぬべが迷ふべがきまころす (野澤)

五、から白うた

餅つきにも今は唄ひ、踊もついである。

これの旦那さまの お座敷に 十七小女郎は酌に立つ 酒よりも 肴よりも 十七小女郎は 目にこまる

これの旦那さまの お座敷は うしろは なみなみ 蔵くら七つ

これの旦那さまの つほ松に 鳶とびこ小鷹は 巢ねをかけた

これの旦那さまの お厩うまから 三歳栗毛の 聲こゑはする (野澤)

六、すり白ひきのうた

十七八の おろすきぎアヤイ 八幡林さひきますアヤイ 八幡お山さひびくせでヤイ 米は石よこ碎くだりますア
ヤイ エエデア ア、石は米よこ碎くだけるせでヤイ まして搗く米ア粉にもなるベアヤイ 粉にもなるベアヤイ 石
にもなる エ、まして粉にもなる 酒にもなる 酒は諸白男山もろはくやくこやま (館)

七、木挽うた

えんぎーよ えんぎーよこ えんぎーよばやめてな おらはや ささだちは えんぎーよ ばやめて こさしろ
上手でなア

一にアヤイ ふぐの鳥 二にあヤイさくらヤイ 三にアヤイ 櫻うづざりて コレアヤイ 祝いわひこ申ますものだよ

(田子、上郷)

えんこえんここ えんこはいがに おらがごうさまだちア 餌差を上手だ、おらは隣の伊勢松木挽ア、おらにま
したる木挽だ、腰におもつ箱 腕に竿提げで いつも北の方の小松原サ おらも若い時ア 栗のいんがら(稔)も
食いのんだ エンサ (野澤)

八、土 突 う た

『どづき』『けんづき』『どんづき』『かめづき』『かづき』などいふ。その唄

書いた文さへ よみよは知らぬ か、ぬ白紙 よみよは知らぬ 書かぬ白紙 よみよが御座る 折目折目に 文
句があるべアね いまこそ揃へた お前の揃へた

旦那さまのヤーイ ホーラ 床の間ネアホーラヨイトナ 白い鼠はヤーイ ホーラ 巢をかけた ホーラヨイト
ナ ホーラ エ、これは 旦那さまのヤーイ ホーラ 福ねいすみ ヨーイ トーナ (八戸)

やいどんな やいどんな やいどな鼻も やい鼻だ ハアやいどんな やいどんな (戸來)

よいぎんな よいぎんな やいどんなよいぎんな 亀の子アぶらめく よいどんな 一杯のませるよいぎんな

亭主もよろこぶ よいどんな あねさまもかさまも よいどんな ぢさまもばさまも やいどんな どんづき
ど無法つきア 飲まないは突かれない よいどんな

やいどんな やいどんな 東の隅から 西のすみまで やいどんな

聲のよいのに 唄せできけば ハアヨイヨイ 小松林の蟬のこゑ ヨイヨイヨイヨイ アレアランコレアラン
やいどんな

唄ひどころこ 鳴る瀬の川は ハアヨイヨイ 何時もどんどんこ鳴ればよい ヨイヨイヨイヨイ アレアランコ
レアラン やいどんな (田子、上郷)

やい これア ぎりついたこ 亀の子石さ ぎりついたどう

やい それア よいわさい よいわさのよいこせい (戸來)

九、馬 方 ぶ し

煙草吹き吹き ハイ 馬方よかれよう

これを前出しに、六尺程の綱を首からかけて唄つた。

馬の手綱で 日は暮れるア 雨は降れども ハイ 逗留はならぬ 明日は栃木の駒の市

小夜の中山 ハイ 夜更けて通れば 三味ミ琴の音で 眼はさめる

七つ八つひくア ハイ 親方よりも 一つア手びきの わしはよい

染めて着せたい 馬喰さんの浴衣 肩に鹿毛駒すそ栗毛

おらも ハイ なりたや 馬喰さんの唄に いつも葦毛馬の 駒さのるア (上郷、田子)

十、牛方ぶし

春のほい出し ごまめづら それをかせたいヤ すそこぶち サンサン

一の先達は すだれごぶち それの後たちア すそこぶち サンサン

やむかごまばし これお茶屋の唄 腰はこごでもしなは良い またも買へ買へ 茶屋のかが サンサン (上郷)

田子)

十一、錢ふぎの唄

山形の 彌吉が唄アは 小鍋焼く 粟ミ米 小豆ミ交せて 小鍋やく お汁には 人じん午莠豆腐ミ山いもこ
おひらに 粟茸草だけ椎茸漬しづく (巨來、島守)

松島の瑞巖寺ほどの 寺も無い 前はうみ うしろは繁く小松山 松の中に坂もおじやる 坂も坂 七坂八坂
九の坂 十坂目に本堂建で 錢をふぐ 錢も錢 銀貨のぜにを ふぎまアす

うらいけヤ 浦島太郎 婿にいぐ 亀に乗りて 釣竿かついで 婿にいぐ お迎ひには 乙姫さまの お迎ひに
銀のさがつき手にこりて お肴には ふけつの貝のお肴よ 黄金の銚子で注ぎまはす 年いぎは八百八十八つま
でも

婆さまむす 二升樽提げで何處さ行く 嫁御のお里さ 孫抱ぎに 孫も孫 初まご抱ぎに行くごもす 産着には
こうしき白もらつてお目出たい こふたでは あやめに桔梗に こうしき染 おふたでは 鶴ミヤイー亀ミ
五葉の松 爺さまむす 孫の文は 今來だどやい 落どすな 落しまい 下には亀ミ 上には鶴ミヤイー (野澤)

仙臺の孫六さまの青の駒 こはれたてあいやい 一萬兩ど七きれだ その金をやおい 名のある箆筥に 納めおぐ (上郷、田子)

一の關 まんろく様の芦毛駒 子は出たには 一萬四百七きりだ 祝ひの酒は一分二朱 (島守)

ひばくらが 酒屋の破風に巢をかけて 夜明ければ 酒こせ賣れさ さやづるは (下長苗代)

其四 民 謠 (三)

一、ゑんぶり

ゑんぶりのことを書いた書物がいくつがある。そのうち古くから本壽寺に傳はるといはれた一つがあつたが現存しない。「青森縣史」が「八戸風土誌」からぬいた「右本壽寺書物の内に有之由書拔仕候」とある「ゑんぶりの話」といふのがそれであらう。この「ゑんぶりの話」と「ゑんぶりの起原」として傳はつてゐるものは同じものでその最後の少しが不足してゐるだけであり、「杵搦の大意」といふのも別な名で傳つてゐるのがある。結局ゑんぶりのことを書いたものは「ゑんぶりの始」(起原)と「杵搦の大意」の二種になるが、そのどつちにも「猥りに他見無用可秘々々」といつたやうな奥書があるためにいろいろあるごまかく傳はつたのであり、且傳へつゝあるのである。考察の資料としてこの二種をかゝけてみる。

杵搦の大意 (杵搦之卷)

抑杵搦云事糠部五郡に於て權輿するこは古今に傳へて兩説有、南部三郎光行公當國の國主たりしより始る言傳へ又御曾子九郎判官義經公蝦夷へ御渡海の節暫時御休館を据玉ひしに始るごも云り兩説區々こいへごも皆此説を以て今權輿はじまりとす余説亦區々有こいへ共取るにたらぬ説にして評に及はしと云

光行公に申奉るは人皇五十六代の帝清和天皇の御後胤鎮守府將軍陸奥守八幡太郎義家公の御舍弟新羅三郎義光の御曾孫加賀美次郎遠光公の三男なり始は信濃三郎光行公に申奉りしか後南部三郎に申奉る甲斐の南部に住居有し故也

清和天皇に申奉るは清和源氏斗りにもあらず源家の源にして惟仁に申奉り後に水尾帝に號す文德天皇第四の皇子嘉祥三年に太子に立天安二年に位に即きたもふ帝なり

扨右大將賴朝公天下統一統し玉ひ建久三壬子七月征夷大將軍に任し鎌倉に將軍の御居城を築かせ玉ひ日本六十餘州の總追補使に成もろもろの大小名郡縣の司を指揮せられ侍りし時光行公も右大將の命に依つて此糠部を拜領有て當國へ移り玉ふ頓て建久こなり御任國の時或は海上或は陸地に其説も又區々なり委しくは奉舊秘事舊秘録舊話集に明なり御紋は花菱幸菱九曜等成しを鶴の御紋に直し玉ひしことは南部二十六代太膳太夫信直公後に利直公に御改名秋田御陣の節御吉瑞の御事有殊に御勝利有しより用玉ふ武家評林記または南部舊記にもせたりと雖又奥秘の書卷には左にあらず是異説也と言へしと言ひ鶴の御紋は一羽二羽むかひ合たるにかゝはらず源家相傳の御紋也謂あり元より向つるの御紋は右大將より拜領の御紋にて光行公御弓勢誠に目出度古事のあらせ玉ふこなり甚以奥秘にてあからさまには顯しかたし抑清和源氏に鶴の紋有こは昔より著しき事なり義經公御太刀等はひこつひこつながら向ひ鶴の御紋なり其外源家公達鶴の紋を附玉ひしこおほろけなす又判官義經公御休館云事は義經公兄賴朝公の御代官として諸軍勢を催促し數萬の兵を引具し宇治の手より朝日將軍木曾義仲を京都に責破り禁庭を守護し猶勅命を蒙り檢非違使となり一

院の御使こして攝津の國一の谷に平家を破り八鳥壇の浦に押語彼の門を西海に打亡し逆鱗を心すめ奉りみか父のあだを亡し亡父義朝の孝養に備ふも是寄代の譽さいふへし如斯君父の爲粉骨碎身して山野に臥し風波に魂を飛し兵糧にうえ餓鬼の思をなす事幾度其かんなん更に例ふるに物なしさいへども梶原景時景季が讒言に由て御兄弟の御仲不和にならせ玉ひ都を落大和に暫ししのびおはせしに大和の上人義經公にすすめて曰く君の良發明才をもつていかんそ奥州に落下り玉ふの理あらむや亦罪科なくして數人の從者に苦痛をさせんや西三十三ヶ國を味方にし京都に旗を揚げ良黨にも後榮の樂をさせ玉ひよこ折角す、められしか共其の兄の禮を重し終に都を落わつか主從十三人山伏姿さまを替伊達領の秀衡を御頼み有て北陸道を御下り高館衣川の館に御安座あらせられしか共秀衡死後子息泰衡等不所存にて義經公を害し奉らんこするの計謀を先習し玉ひ討死の体にもてなし北高麓へ渡らせ玉ふ道の順路なればこて此糠部に暫時休館なし玉ふ。此時より糺摺始るさいへり故に其衆の頭を九郎殿さいふ心にて頭九郎殿さいふと傳へたりは一説なり又た光行公糠部拜領御下向有其後糺摺始る藤九郎盛長其頭を動し夫故云こ此説に前後の虚實ありそれ藤九郎盛長は右大將近臣の一人にてしかも當國下向無之人なり乍去亦一説あり其譯如何となれば盛長は右大將未だ蛙ヶ兒島に流され勅勤の御身に渡らせ玉ふ節より頼朝公に二心なく勤仕し無二の忠臣なりしかど君臣の中に聊か不慮の事出來り盛長人並の立身にも至らず其子藤九郎何某成者光行公御任國の節しかも當國に來り居て糺摺の一將士こなりしより今帆の先烏帽子着を藤九郎言こ云り是前條の頭九郎藤九郎の二説何れを是こし何れを非こせんや時代も頃も既におなし扱また舊記諸家の日記も又大昔の事にて似あはしからねば極めて是こ一方に落し難し云々僭將士も數多あるべきを藤九郎何某を以て今の世に傳へ侍るこは此人一曲一撫の事其頃聞たる名人にてありし故に見物の諸民時の人其撫曲の興あるにめでて藤九郎殿くこ云しより今に傳へていふこや一曲一撫さいふは今いふ能舞能囃の類に同し先にいふ通り其説如斯二説さいへ共其齟齬の意は同事也其次第は御休館且は任國こして此糠部に來玉ひけれども始ての國

さいひ又諸郡諸村にも各々郡村邑里の主有て早速にしたがひ奉らざりし故右を隨ひ玉はん爲始め玉ひしと也 判官殿休館光行公御任國聊か年の前後のみにて時代は既に同頃さ知るべし南郡舊記に委しければ略すされば當國に任國して鎌倉由井ヶ濱より御上船金濱の浦に來着有しは師走の事にて先啞に上り地利御見立有て三戸相内觀音堂を御本陣こなし年賀を祝し玉ひけれ共其年の十二月小の月にて新年の祝も調ひかたくこほしければこて私に一日を加へ三十日こし二日を元日こし祝し玉ふこれ私大のはしめなり

小の月を大こなす事唐天竺は知らず日本には吉例ま、あり其一左に
貞觀二庚辰年閏十月の小を改めて大こす朔旦の冬至を賀せん爲なり云云如此むかしも小を以て大にする例有是清和天皇の後字也

南部舊記に云私大は南部光行公御任國より當國に始る云々十二月小なれば來る年の元日を前へまわし十二月の小を大こし來る正月の二日を元日こし祝ふ尤間二日を元日こするゆへに三日は二日なり四日は三日こなり次第に一日つづ前へ繰りて日を用ゆる也二十日まで右の通り二十日より二十二日改む二十二日よりあこは曆の通り廿一日をけつりて無くするこしるべし

扱て十二月小を私大こして一日の靜緩を取り新春の聖節を祝ふさいへこも郡村の地頭出勤なし隨ひ奉らざりければ斯ては其儘に置へきにあらずこて豫め大正月を祝ひ且つ郡村地頭降伏の備立凡を用意して或は三十人或は五十人又七十八人の老若剛壯の將士により組をなさしめ新年の祝こ名附郡村地頭の館に家々屋々へ推參なさしめ祝言亂舞に事寄其館く家々村々の貧福厚薄剛柔の様子を考計り知り隨はしめん方便なり是が爲郷村其嚴重なる降伏に恐れ何れも我勝に御任國の御本陣に出勤せしこ也然は此降伏の備へ早速の出任従ひし事目出度ためしなればこて其後吉例こなりたるよし舊記にのせたり始めは故に新春の歡樂こ云く後に其所持のもの帆にたればこて後世帆摺と名付しかも持所

の品を取替たりしは是太平の有さまなれば也昔持たる所の道具の圖

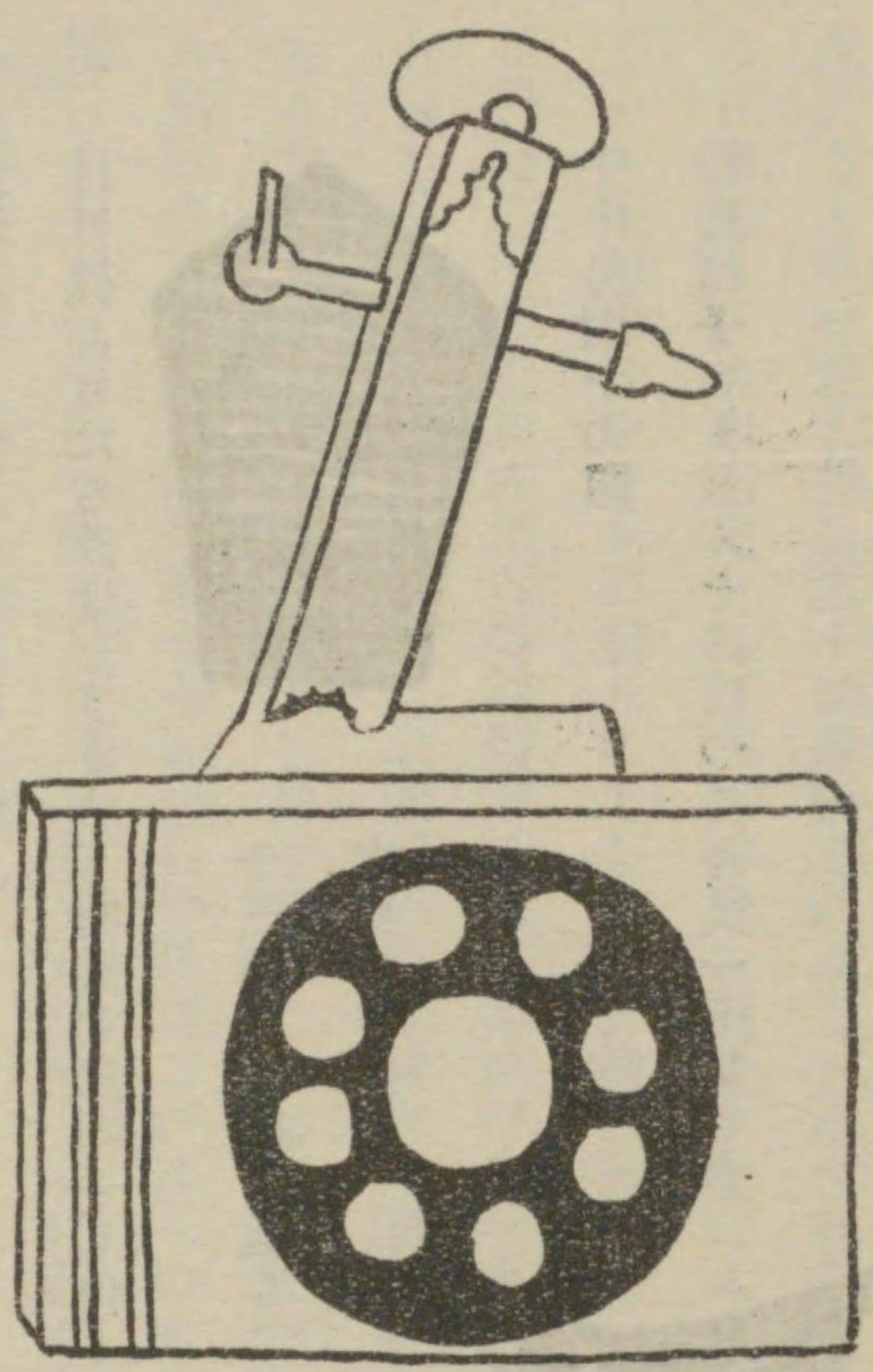
むかしは楯にして楯にあらず軍書にある楯は殊の外相違なりと知るべし如斯ものを用ひて推參せしなり(第一圖)

子餅引龍菱形引筋等は組頭々々の將士により紋所も又組手ごに違ふ物を如斯先手に進め五人も十人も突立々々々祝名付つゝ實は館々家々え押込したかひしと誠に其備ひて進事戰場に向ふにひし曳矢々々の聲を出して押入しなり去るに今帆を用ふことはしたかへ給ひて靜謐成し後の吉例なればやむべからず農具に替たり夫只氏は國の本萬古の重寶神慮に叶ひ侍らんとて田植名付豊秋を祝すになぞらひしかも楯は帆に似たればとて帆を用ひ其後帆摺は俗人呼ならはせり。

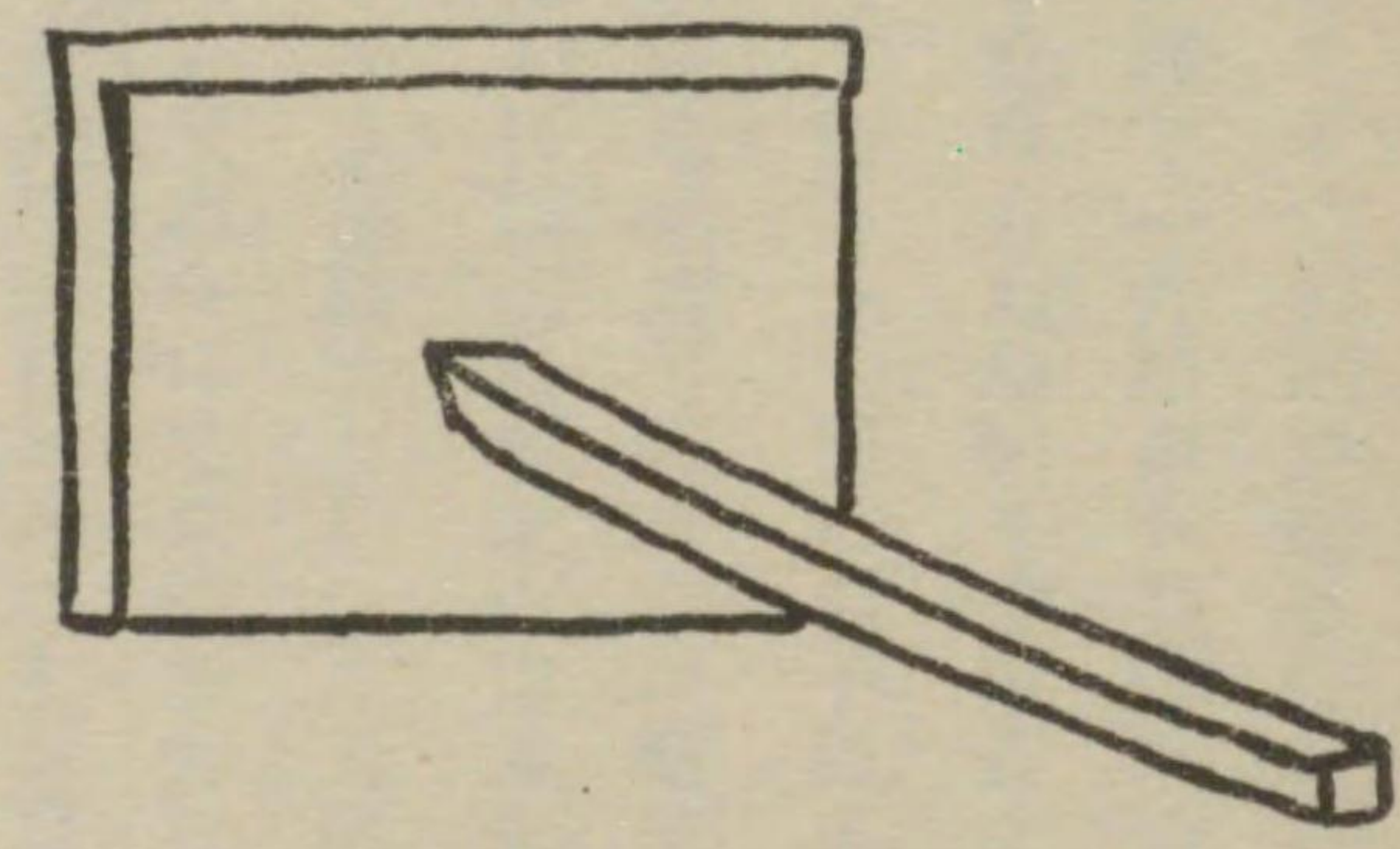
農業に用ゆる帆の圖 (第二圖)

天竺唐土日本國替れも此道具農業に用ふことまた同し中國杯にては勿論用る品也改正三才圖繪等に載たり

第一圖

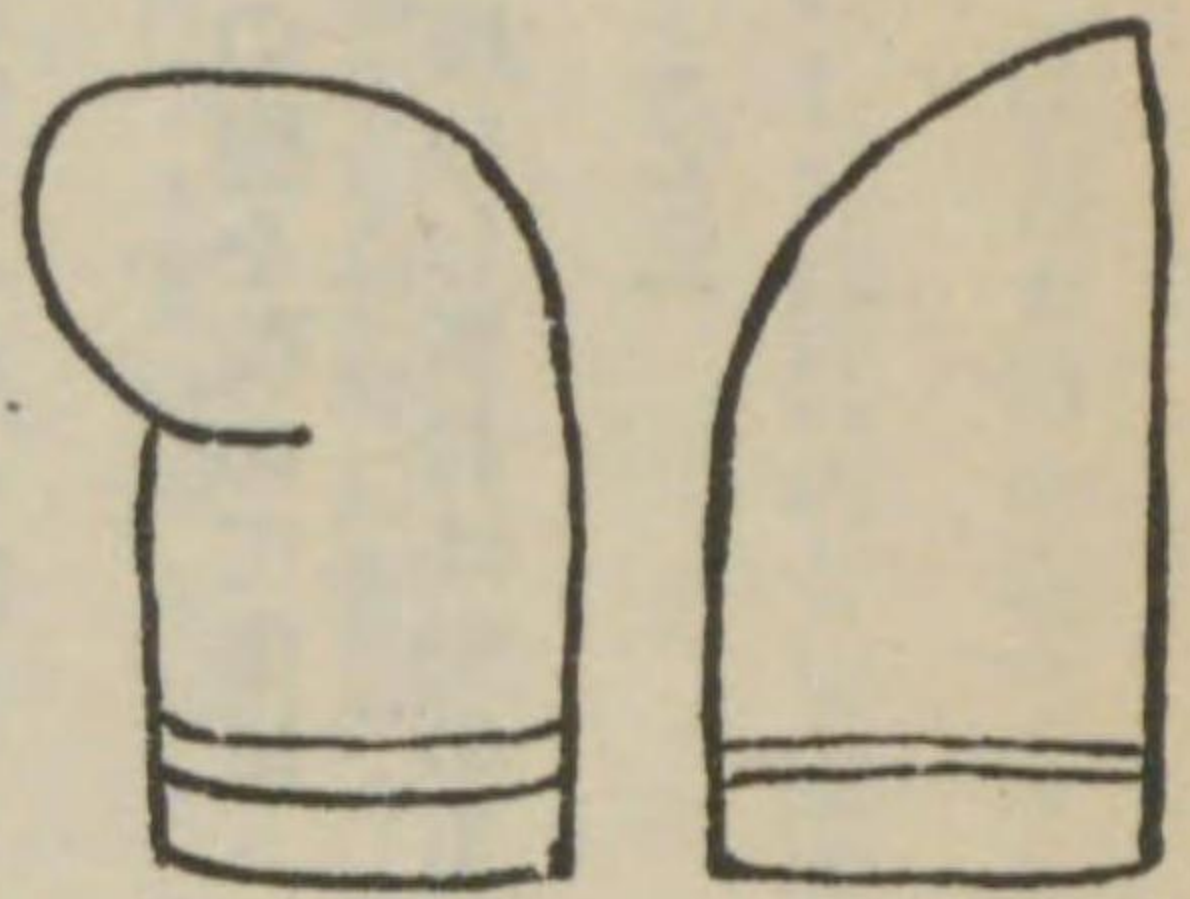


第二圖



又曳突々々の聲を改めて榮屋々々心にこめて祝言せよと傳えられしと云

又烏帽子を用ひし事昔は兜の用具なり梨子打烏帽子折烏帽子などを用ひしといへども今用ゆる烏帽子も梨子打風折を形こるこ云



なし打鳥帽子の形

折るほしの形

鳥帽子に牡丹芙蓉の花を付る事は兜の吹かへしに表せり昔は牡丹の葉芙蓉の葉杯を鍬形や角形のかたち似より
せ前立にかざり付しもありしと傳ふ。

以外似よりたるるほしさまゝ右又立鳥帽子も色々有一種ならぬ事と知るべし

今三番叟千壽萬歳等に用る

立鳥帽子



兜巾鳥帽子の圖

侍鳥帽子とも云ふその形つくり又一様ならず



鳥帽子着は三人より五人七人九人十人十二人迄昔はありし也是昔は物奉行等にてやあらん然るに後世迄も傳て右の

如く用るゝは其數いわれあり三人は三光または天地人又五行青黄赤白黒にもあやからん或は七曜九曜十幹十二支に
も表せし也鳥帽子着の内にも第一を先鳥帽子といひ此先跡を主の鳥帽子としてその外副鳥帽子等也先鳥帽子は先陣を
兼たる大將を表し跡鳥帽子は殿號といふてしんがりの大將也殿言ふは跡へ残り一人踏止り其略を補て去る皆謂ある
事也鳥帽子の大夫行違ひ様に辞宜禮式に扇子を額にあてる事は庶人たりとも私ならぬ鳥帽子と斷るの式法で今又柄を
止めて鋤鍬の柄を用是亦農具にてしかも當國の得物なれば自然のうつり替りと知るへし柄に鳴子様の物を付又笛太鼓
手扱鉦すへて鳴物を用る事陣鐘陣太鼓合圖威勢を示す道具に評す又笛太鼓小鼓等亂舞千壽萬歳の囃子物にて用きたれ
り依て私の持道具にあらずと云云又柄唄は神代の催馬樂をまねふなり唄のふしは國所に言葉の違ふ如く村里の風調又
別々なり拍子に三拍子五拍子七拍子有事これ七五三に評し本ちきて七五三とかき注連さよむこ天照皇太神宮の昔よ
り堅固なる謂ある難有事と知るべし今袋持といふものあり昔は兵糧の締役なり又家々にて米錢を出しはこれ各人数の
糧にして其日の費し也しかるに今物費ひの如く思は誤れりといへりかよふの祝舞は禁裡大内にも新曆の佳賀さまと
有て諸大臣家に其費あり恐多く並へ奉るはあらねと皆謂れをひくの祝なりと云云故昔は遠村遠里を祝せんには小荷駄
を用意せしと也他村に替り荒谷村の柄は大小を帶たる事は御當家御當國に御分國台命によつて寛文四年御分れ遊され
し其以前八戸彌六郎殿根城在城成りしに故有て遠野横田の城へ移從是は寛永三年の頃にて凡三十有餘年後にして根城
に町を引今の御町廓を遊はされ御當城に御居城御鎮座に相成其御年の年賀しかも荒谷明の方にて柄の古禮古實を知り
たる老人荒谷に多く有て初柄とりしといへり其故他村に替り荒谷の柄は今に大小をさすといふ尙委しくは諸秘記によ
る大意の控留也穴賢猥に他見無用たるべし、

抑入皇五十六代清和天皇の御子一品貞純親王御子六孫王經基卿此御時始て源姓を賜る多田の満仲の四男河内守賴信其子伊豫守賴義其子三人あり第三を新羅三郎義光其子刑部三郎義清其子逸見黑源太清光其子二人あり武田太郎信義には加賀美次郎遠光其子南部三郎光行公其子六人有元來於甲州の南部三箇の御飯野御牧波木井といふ依而南部三郎光行公此三郷を領す然るに三男三河守義實を波木井の郷へ分る此人波木井先祖也法名日淨此方御存命中に御親父南部三郎大膳大夫光行公(建久二年辛亥十二月下旬)本國甲斐南部の莊より糠部へ入部あり同國平良か崎を定子孫代々此所に住給ふ南部大膳大夫信直○糠部といふは八戸の御城跡か然るに光行公甲斐國を御出立の後六男六郎實長皆人波木井殿といふ法名日圓上人といふ永仁五丁酉九月廿五日逝去此方の御代に今の身延山十三里四方を法華宗へ奉納あり此頃佐渡國より日蓮の弟子阿佛坊日得といへる人師を拜顔に登山して歸國あり此人俗名を藤九郎守長といふ然而の七守長の一子藤九郎守國兩人の分骨を持參して身延へ來り墓所を營む其孝心を波木井殿感心の余り家來として耕作の奉行を仰付らる追て守國新田并圃を開發せし故に波木井殿甚喜悅あり然るに守國(建治)正月十五日御盃頂戴の時に舞をまふたり其舞を御間なされしに厭態(エヒク)答申上たり又諸節はご御問あるに御發(イハク)答申上る其文句にいはいく

正月の御祝儀に松の葉を手にて持て發者(イハク)かな種脱(タノ)すたねおろす太郎治は千石儀に腰かけてこがねの揚枝をくはへて何石何斗脱した千石千斗のはり合種時けふは日もよい種時だこがねのまけ桶手にさけて朝の四ツにまきおさめ此文は始りの御いはひなり次々に至り稻の花草取田刈御上へ納め御土藏へ收るまで祝ふなり厭態の最初以上

さて又茲に波木井の讀やうに咄あり鎌倉に差出(サシ)といふ武士あり此者南部六郎左衛門尉實長に向て波木井殿ご申せしに南部六郎答るに拙者の事かご申に差出さようご申六郎なごは波木井ご申ご答しに井の字はりとよむものかご申によつて此論喧嘩となりて六郎に差出は面を切られたり此時の落首に

鋸りのはきり三人は知らずして差出て面を切られけるかな

南部六郎身延の御草庵へ登山して此事を日蓮上人に問しかは蓮師ハギリといふへしご申されしご云々身延山の記に曰波木井彌三郎長義法名日教正和二癸巳十二月廿四日逝去三代義實より後にして十代目に波木井の家滅亡なり其由來といふは駿河の九嶋兵度治甲州川内の武士共ご一味して武田信虎ご甲州の城にて合戦あり信虎公計事を以てご甲陽軍鑑にありご云々其後武田家も滅亡せしに因て波木井の末葉は身延山の町へ引籠れど云々其末葉此國へ下向すご見へたり然れば成經八戸彌六郎は波木井の末孫なるへし即ち遠野の彌六郎は南部三郎光行公には孫の家なり出目度御家なる事は多出滿仲より系圖正しく新羅三郎義光以後加賀美次郎遠光公御子二男南部三郎光行公今の御系統續き來りこれあるなり右に依てゑんぶりは波木井家へ附たるものご知るへし併八戸彌六郎八戸の根城に住たりし時荒谷に藤九郎守國の末孫拜地ごして有しか今におるて荒谷村は厭態の藤九郎の頭なり尤ゑんぶりに付ては大小をさす因て其名残るも目出度事なり然るに甲州遠光寺は身延山の客末寺にして遠光公の御開基なり又身山は遠光公の御二男南部三郎光行公領知にして御子三男へ分地し又六男波木井六郎實長御家督有て以て身延山を奉納遊はされしなり(右本壽寺書物の内に有之田書拔仕候)

此書は元老女藤野後にゆか(佐藤俊)所有の處明治三十六年清卿動番中後にて御見合にも相成へくに付差上度旨にて差出たる故後日の爲に寫置候也

其差出たる本書も東京御邸御役所にて保存致し置著者按に阿佛坊日得は日蓮上人眞實傳には藤九郎守長にあらず遠藤武者盛遠四世の孫左衛門尉爲盛ごあり其子も藤九郎守國にあらず遠藤九郎守總ごありて守總は身延山へ亡父の墳墓を建て直ちに剃髮し阿佛坊日滿ご號して佐渡へ歸りその家を寺ごし蓮華王山妙宣寺ご呼ぶ父日得を開山ごなし弟二世に日滿住職なしたりごあるを見れば守總ご守國ごの錯誤は問はずもあれ實長に奉職する暇なきが如し如何のものにや

『ゑんぶりの話』は『八戸風土誌』に據つた。

以上でゑんぶりの大略は明らかであるが、その名稱も「杵の大意」でははじめ「新春觀樂」といつたのがあとで「杵」を改めたことになり、「ゑんぶりの話」による「盤態」が「ゑんぶり」に轉じたことになる。ゑんぶりはまた「ゑんぶり」も呼ばれそれにごがついて「ゑんぶりこ」「ゑんぶりこ」も呼ばれるがその旗や幟には「豊年祭」と維新後の名をしるしてある。この豊年祭の旗印をさきに主として八戸附近ではあるが五戸三戸方面の各村々から一組三四十人づつのが五六十組から百組ぐらゐるまで長者山に集まつて三社を拜し稻荷の神輿に供して八戸の市街を練り三八城神社に行つてこれを拜しそのうちの年番の一組が南部子爵邸に他はそれぞれ市中の家々を廻禮する。組の中には三人或ひは五人の頭取すなはち烏帽子を被つたものがある。先頭が藤九郎で鞆臺やならしをそれぞれ左手に右手には扇を持つてゐるこの頭取は法被を着腹當をかけて直衣のやうな形をさせてある。法被も腹當も紺地へ大紋か鶴亀鳳凰などの模様を染めぬいてある。組のうちの故實を心得たものが先達で先達は采配といつて色紙を束ねた總のついたその、一尺三四寸ある柄にも同じ色紙で斜にだんだんに巻いたものをもつてそれを振り振り音頭をさる。頭取を中にして太鼓笛手摺鉦の鳴物の囃子につれてゑんぶり唄のまにまに烏帽子をふりたてふりたて旋轉舞踊する。この舞ふこゝを摺るこいつてこの間にはいる舞の類を舞をするこいつてゐる。八戸城の下臺口廣敷口に出て參禮するのを御前杵とか御田植と呼び藩祖直房公の時から今に連綿してゐる。

ゑんぶりには「ながゑんぶり」「どうさいゑんぶり」と二つある。「長ゑんぶり」は古くからののでそれが次第に「どうさいゑんぶり」になつて來た。「長ゑんぶり」の被る烏帽子には前髪が無く牡丹の花がつけられる。持物も皆鳴子を持ち拍子も長く五拍子七拍子である。「どうさいゑんぶり」の烏帽子には花がつかずに前髪が垂れてをり拍子も主に三拍子で調子も早くこの前髪が地を摺るほど勇ましい舞踊をする。烏帽子の繪は藤九郎の稻荷の鳥居その次が田搔きつき

が惠比壽であるが五人の時は實つくしに鶴亀がこれにつづく。しかしこの繪にも村々組々によつて多少の相異はある

もこは正月の十四日の朝になるこ松の葉を手にもつた苗取が『さあさ、こウりましーよ、こウりましーよ、苗ここウりましーよ』とやつて來、その翌る日にゑんぶりが來たが、今は二月十七日から三四日に定まつてゐる。

ゑんぶり唄も一樣では無い。そのうちの幾つかをや、纏つた姿のだけをあげる。

『八戸風土誌』にあけた杵歌

正月の祝ひに、松の葉を手を持ちて、祝ひなさるものかな、けさいつる朝日を、誰れが立ちて拜む、日本國を照らすもの、太郎治ア女房ア産をした、種を何石おろした、千石千斗おろした、一本植れば千本さなる、かひこの早稻の種かな（又河ごせの種かなこも唱ふあり）しろ引くは白の馬、誰れにさへせい取らせる、聲にさへせい取らせる（又猿にさへせい取らせるこも）聲ならば花聲に、鎌倉のかもんの助、五月召したる帷子は、肩こ袖は花あやめ、腰こ裾は卵の花、露はふみおろした、なぜにそれを取らない、袖は濡れて取らない、かへりあけても取らないか、まい田の稻は刈りころだ、鎌を打てや鍛冶どの、何かまを打ちませう、月の輪形を架けませう、これの旦那様いま盛る、四方のすみさ藏立て、俵千斗に腰かけて、黄金の揚枝をくわいて、今は御所のさかりかな、ゑんぶり摺の藤九郎は諸國の寶を摺りよせた、すりよせすりよせ摺りよせた（是にて摺りおさめこなる又）かどの曲師アよいまけし入れてこふじて叩かせた叩くにも叩いたこんちくくくこ叩いた』と唱ふもあり

下長苗代村大字惡虫のを唄ふ順序こにもあげる

初手唄

正月のナ祝ひネ ドウサイ 松の葉をば手に持ちて、祝ひなさるものかな。ハアヨイワサア、コレアコレア。」

ドウサイ、太郎治が女房は産をしたい。ドウサイ、種何石おろしたい。ドウサイ、千石千斗のヤイ八斗の種。ドウサイ、川の瀬でおろした。ハアヨイワサ。」

ドウサイ、苗取川のヤイ中の瀬は、ドウサイ、露は濡めすおろして、ドウサイ、袖は濡れるし、取らないが、ドウサイ、かいりあげてみらないが。ハアヨイワサ。」

ドウサイ、代ひくは代の御前、ドウサイ、花のこわぎの馬をば、ドウサイ、誰にさせよヤイ取らせよう。ハアコレワイサア。」

このあまに、松の葉をもつて「松の舞」を舞ふ。

「松の舞」の唄

お正月のこまなれや、門に門松お立てやる。七五三こしめをはいで、それをちーやんと飾ったこ、松の舞もはやせな。一の枝には錢がなる、二の枝には金がなる。三のあがり、四のめどり、目出たい所はヨウナようなる松かな。松の舞もはやせな。千秋萬秋、福のこまり、他所へはやらぬ、これの旦那さま、ヨイヨイヨイナ。

二番目唄

一本植ゑれば千本なる。ドウサイ、門の早生の種がな、ドウサイ、七穂でも八そうする。ドウサイ、八穂でもこ、のまはすがな、ハアヨイワサ。」

ドウサイ、鎌倉のがものすけ、ドウサイ、五月召したる帷子、ドウサイ、肩こ裾は蓬ぐさ、ドウサイ、今は御所の盛り、ハアヨイワサ。」

ドウサイ、これから芽も仕立てよばい、ドウサイ、ななたでこ申します。ドウサイ、おもいこには青柳、ドウサイ、たがだつこ申す。ハアヨイワサ。」

ドウサイ、たがだつこしろの殿、ドウサイ、笛の上手しろの殿、ドウサイ、春の花吹き合はせ、ドウサイ、夏は蟬のかんの聲。ハアヨイワサア。」

ドウサイ、千刈田のナ水口に、ドウサイ、咲いたる花はなに花、ドウサイ、錢ばなかヤイ金花か、ハアヨイワサア。」

このあまにいろいろな藝がはいる。そしてつぎが三番目、しまひ唄なる。

三番目唄

是れの且様はいまさがる。ドウサイ、四方の隅に藏を建てて、ドウサイ、俵千俵に腰をかけて、ドウサイ、金の揚枝を御へて、ハアヨイワサ。」

ドウサイ、鎌倉をめぐれば、ドウサイ、こがねの藏は九つ、ドウサイ、九つの藏のすは、ドウサイ、二十四五のヤイうちこ見える。ハアヨイワサ。」

ドウサイ、踊る駒にヤイ乗りそめる、ドウサイ、跳る駒に乗り揃ひ、ドウサイ、ばんばん、ひろぎの藤九郎アイドウサイ、ばんば競べで召された。ハアヨイワサ。」

ドウサイ、かひば折りのわらんべ、ドウサイ、折るべき榊葉を折らないで、ドウサイ、われわれに目をかけた、ドウサイ、切るに切られぬ縁の道。ハアヨイワサ。」

ドウサイ、かどの曲師はよい曲師、ドウサイ、いれでこづいでたたいた、ドウサイ、たたくにもたたいたろ、ドウサイ、こうほんぢーやくぢーやくきたいた。(調子を變へて)ドウサイ、こんぢーやくぢーやくきたいた。

こ鳥帽子かぶりが口早に唄つてかへる。歸りしなに歸り唄

歸り唄

お、よく植ゑで申したりヤイ、あいらしここにめづらしきに、鶴こに龜こに世代松こどヤイ、てんびり茶釜にちーやびちーやツこアどヤイ、さでよくよしまだにすツかり植ゑで申したりヤイ。御家の旦那さまは お氣にこそまゐるッて候、年寄のものはくろさをづかがつて、くろどめ仕り候。わんぐるから下ぐるまで、けら蟲穴から水が(調子緩くなる)通さんやうに。

これで皆歸つたのに、古い頃には更に呼びかへして摺らせたりした。その時に唄ふ唄を奥唄さか藏唄さか言つた。

奥唄

これはどなたのほつただヤイ、ドウサイ、右衛門さ左衛門のほつただヤイ、ドウサイ、よい上にも良がれかし、ドウサイ、並の穂でもヤイあれがせ。ハアヨイワサ。』

ドウサイ、澤田にも出をなアヤイもでや、ドウサイ、妙なものさ眞躰をかけた、ドウサイ、かのすすさまがお蔭だ、ドウサイ、さるにさせらせよナアイ、ハアヨイワサ。』

ドウサイ、今朝出んづる朝日さま、ドウサイ、西へ西へさ御座る、ドウサイ、西に小池はあればこそ、ドウサイ反り橋のヤイ袂さたもさ(調子變る)ドウサイ、反り橋の袂さ。』

このあゝ歸り唄を口早に唄つてかへる。この上更らに呼びかへされるこがある。その時は

今朝すごろくかものご、日和がよくて早立つ

さ唄ひすぐに歸る

八戸町のうち糠塚のは

正月の祝ひに、松の葉を手を持ちて、祝ひなさるかもんのかな。ハアヨイワサアコレアコレア。』

今日は日もよい種をおろす。何石何斗おろした。千石千斗おろした。ハアヨイワサ コレアコレア。』

代を掻くには代の馬、花のこわぎのお馬よぶ、鞆にさいせん取らせた、取らせるにも取らせた、花の鞆に取らせた。ハアヨイワサ コレアコレア。』

このあゝへ、松の舞さか惠比須舞さか大黒舞鳥さし舞などのうち一つ二つはある。そしてつぎが『中の摺り』

苗取り河の中の瀬は、露はふいておろしてそれを何故に取らない、袖は濡れるし取らない。搔取り上げても取らないか。ハアヨイワサ。』

鎌倉のしーようどめ五月召したる帷子、さ裾はゆむぎ菖蒲、中はうづるし卵の花、うんの花が咲くならば、今は御所の盛りかな。ハアヨイワサ。』

ここに手踊や手藝がはいる。『えんやぶし』『えんこえんこ』『田植萬歳』『苗取り舞』『金輪切り』なごである。『えんぶり田植』さ呼ぶ田植唄をここに一ついれておいてみる。

朝のはかの 千刈田のみなぐち、植ゑだる松は何松、次郎さ太郎の若松、一なる枝には錢はなる、二なる枝には金はなる。三のあがりの小枝に 黄金の花は九つ、一つ取れや八つ花、朝日の長者さよばれた、呼ぶも呼んだし呼ばれた。朝の長者さ呼ばれた。

摺り終つて出るのを『摺り出し』さか『摺り寄せ』さか『すり納め』さかといふ。

えんぶりのすりの頭九郎どの、すり寄せた、すりよせた。諸國の寶をすりよせた。ハアヨイワサ。』

これが終つてから『くろ止め』さか『いって頭取の一人一番後に立つ』くろどめ』さ呼ばれるのが唄へ言葉でやる。これが『くろ止めの式』さか『いって大事な作法さされてゐる。』

お、これの旦那さまの御田さ申せばヤイ、おさなみもよし、水もこもよし、早乙女の名さ申せばヤイ、愛らしこ

にめづらしこ、鶴こに亀こ、しざい萬歳、でつちり茶釜にたびじーヤツこ、おうらじも引かず、こうらじも引かず、四又四方四角に植ゑで申したりヤイ。」
おうれこそヤイ、これの御旦那様の御氣にまらうか、年寄りのものはちよつこ立ちまはり、くろ止めなんぞを仕り、上くろ下くろ、合はせくろから、おいくさなんぎを切り込んで、鼠穴からも、けら蟲穴からも水は通さんやうに、しッほりここ止めて申したりヤイ。」

名久井村では「ドウサイ」を「ドウヤイ」ミ囃すし、頭取の三人を太夫ミ呼ぶ。この太夫三人が米ミ粟ミ鏡餅ミを載せた三寶或ひは膳を頂く所作を「ほうだん」ミ言つて大事な作法ミされてある。「ほうだん」をやる時は「一本うゑれば千本になる」といふ唄を唄ふ。名久井村の順序は「今朝いんつる」から「太郎治ア女房」そのつぎが「苗取川の中の瀬」「花のこわけ」でそのつぎが「ほうだん」である。このあゝに「おひるもちのやがた」「おひるもちのござるはし、」をやり、出る時の唄を「わだり唄」ミよび「これの旦那さま今盛り」「門の曲帥」をうたつて出る。そしてそのあゝに「くろぬり」をやる。「くろぬり」は「くろどめ」ミおなじである。

二、大黒舞

ゑんぶり舞の中の一つでもあるが、單獨にこればかりも多く行はれる。大黒頭巾をかぶり手にあの小槌の形をしたがらんがらんミ鳴るのミ扇ミを持つて舞ふ。恵比須舞は小さな鯛をつけた釣竿に摸した竹、この竹には色紙をだんだらに巻きこころどころに緑色の紙片を細くして巻いたこころがある。これが柳の枝らしい感じをあたへる。これを持つて舞ふがその唄はこれミ傳へてゐない。大黒舞の來るのは正月で男でも女でも年寄でも子供でもよく舞つてあるくこの頃八戸の町にはこの鯛のついた竿を賣つてゐる、それミ一緒に鳥のついたものも賣つてゐるがこれは近年のこゝで必ずしも鳥さし舞に用ゐたものではない。大黒舞はせいぜいメリンスがまりの友禪模様位の多くは新モスリン位のその扮装で「春のはじめに福大黒は舞ひ込みました」ミ門口から唄つてはいる。舞ふのこ唄ふのミすくなくも二人である。そしてすぐに唄ひつづけ舞ひつづける。

さあ舞ひ込んだ 舞ひこんだやあ。

何はさてまた舞ひこんだやあ。

ソレお恵比壽様を 先ぎに立アで 福大黒は 舞ひこんだやア。

お家の旦那さまの 四方の棚を見でやれアなア、ソレ鏡の餅も 十二かさね、神の御膳も 十二膳、ソレ ダイ トコセイ 大々ミ飾らせ給ひ サア何よりもめでたどいやア。

春の初めの初夢になア、ソレくらさき山の樟の木を 舟に造りて今卸し、白銀はしを押し立ててなア、ソレ黄金のせんみを含ませて みなははずむ琴の絲、綾や錦の帆をかけでなア、ソレ沖吹く風を帆にのせて 寶の島へ 乗り込んだやア、數の寶を船に積み、ソレ夥多あまたの藏へ納めおく、サア何よりも目出たいどやア。

お家の旦那さまの お屋敷見でやれアなア、ソレお藏のかずは 四十八 軒をそろへて サア何よりも目出たいさやア。(調子早くなり)

豊年満作つづいて來い、夥多の寶もつづいて來い、お藏にお米は たアんさたアんミ。(下長苗、八戸、猿邊)

春のはしめに 福大黒は 舞ひ込んだやア。

一つどせい、ソレ日柄をえらんで参らる、七福神のお酒もり 身上あがれこ飲みまはす。

二つどせい、福神まつりやこの家は 日日に身上はあがります 寶の上へこ登らる、。

三つどせい、見事に見事は重なりて 今年も豊年満作だ 恵比壽舞ふやら踊るやら。

四つどせい、世にも知らる辨天の 妻持つ亭主は果報なり 子寶おたがら積みかさね。

五つどせい、意気な姿の昆沙門天は 兜頭巾をかぶらる、 悪魔を拂へて舞ひあそぶ。

六つどせい、睦ましお家に来て見れば 家内は揃ひ和合樂 孫ひこやしーやごに至るまで。

七つどせい、永く守れよ七福神、年寄り供に至るまで 稼ぎ朝起き忘るなよ。

八つどせい、屋敷まはりを見てやれば 米倉金ぐら寶ぐら 大鯛小鯛を積みかさね。

九つどせい、これより俵を積み重ね、大黒上に在はすらん 一打ち打てばにこにこ。

十うどせい、年の始の若恵比壽 松の小枝に上らる、(八戸)

春の初めに 正一位稻荷は舞込んだやア、さあ舞ひこんだやア 舞ひこんだやア。何を先ぎに立て 舞ひこんだやア。

ソレ七福神を先に立て 正一位稻荷は舞ひ込んだやア。

濱は大漁 陸は満作、ソレ百姓商人手間どりの果までも よろこんだやア。百に三升の 米買はせ、ソレすこころんこ鳴きなざる、正一位稻荷の福いなり。お家の旦那は 奥の倉へも米俵を積み重ね。ソレ俵の上にて齡をさる、サア何よりも目出たいさやア。春のはしめの年男、ソレ福柄福徳年男、小松竹は寄ンヤるか、ソレお

裏所は お俵。糶に勝栗寒作り、ソレ大黒舞は相濟んだやア。ハア御祈禱御祈禱 (八戸)

三、福 俵 積

「たらづみ」言つた。俵積みである。また福の字を冠して福俵積とも呼んだ。扮装は別に定まつてゐない。一杯頭巾の茜や鬱金のを被る位であるが、近頃はかま吠を背負つて町に出た年寄などがやるのを見るだけである。或はひもこあつて近頃失はれたものであるかも知れない。

サアサア目出たいな目出たいな、春のはしめに福俵積みあまるりた。何方の方からまるりた。あきの方からまるりた。サア旦那様、俵積のお國は何處だこおききある。私あ越後のあぎの國の七福神といふもんで、日本世界の渡り者、俵積みの先生で、サアこれからだんだん積みませう。

前の藏は錢藏、うしろの藏は金ぐら、中の藏は俵ぐら、俵藏から積みませう。七萬五俵のおん俵をば、七十五人の御人足で がいぐりさんご取巻いで 唐竹の棍棒持つて えんやご かひなすすさんごも積んだがな、積んだれまんだれ積んだがな、これこそ見事に積んだがな、お褒めでくだされ旦那様、お祝ひなアされかアがさま。

サアその次ぎのお祝ひに、絹柔かは十二品、呉服のだぐうは十二品、二十四品の品物を あなたの子供をこりよせて、からだにそなりご飾りて。お褒めで下され旦那様、お祝ひなアれ鼻さま。

サアそのつぎの御祝ひにア、奥の座敷に白髪を生ひたる婆さまご、白髪を生ひたる婆さまご、お貰なんぞお好きで すずきをゆうゆうりこりつけて、おはふりおはふりご喫んだがな、お家のがが様 大萬長者の世に榮え

千貫まるぎに腰かけて 黄金の楊枝脚へて この鼻さま、若い時は をなごもよいば姿も良い、顔は福々櫻顔、
にこつミ笑へば辨財天、榮える程も限りなし (下長苗代)

四、杓子舞

山内の 山内の 三太郎をんぢの三番目ア 杓子打ちの名人で、杓子打ちの道具には 一分鑿 二分のみ 三分
のみに すり鉋、一の坂もセツキセキ、二の坂もセツキセキ 三の坂の坂中で 腰をちつくミ休めで、あたりを
きろりミ見ウたれば 杓子木もありさうな 一にいだや、二にアやなぎ 三にさぐら 四にしだみ五葉松 むぐ
の木 七つ梨の木 八つやんまが 九つこめの木 十ウにさんミ切ツた椽の木 枝折れなんぞ見つけて 杓子
三挺ひツからけて 大町下り、杓子杓子ミ觸れたれば、十七八が値をつけた。十六四文に値をつけた。十六四文
にまけられないミ ひツからがいてひツきよーツて 大町上り 杓子杓子ミふれたれば 六十婆さま値をつけた
六十四文に値をつけた。六十四文にまけてやれミ 一挺なる杓子を ひツからけてひツきよーツて 大町上り
杓子杓子ミふれたれば 庄屋どんの犬ツこぎ 源太郎どんの犬ツこぎ、唯アだも吠えればよいものを すつかん
かんミ吠えあがる さても悪い犬ツこだミ すツべら打に打ツてやれミ すツかんかんミ打ツたれば 犬の小鼻
も缺けないで 杓子の小鼻はぶツかけた。杓子舞もみさいいな、杓子舞もみさいいな (八戸)

この唄の山内は岩手縣九戸郡晴山村のうちのそれであらう。折爪嶽の麓にある。折爪岳は山内岳も呼び八戸からは
階上嶽も名久井嶽もの中間に見える。一の坂二の坂などもこの國道の上り街道のうちに見てよいやうである。樹の名で
いたやがいたやかへで、やんまががやまががでやまばうし、しだみはならである。

五、槍をどり

湊町のうち白銀では『るんぶり』の舞のうちに槍をどりもいふを加へる。槍は三尺ほぎのさきに總をつけたもので、
柄に刻みをつける。これをもつて一人か二人で踊るので、唄の節は『なべぶた節』ミ呼んだ。船唄の一つでもとは櫓や
櫓を持つて唄つたものであつたのが、槍に形を變えたものである。唄にもその名残があらはれてをり唄もまたさうで
ある。最初の唄が誤られて『鮫山四郎さま』ミこの唄を呼んだりまたさうそこを唄つたりしたものである。山四郎ミ
いふのは今西村氏鮫での舊家であつたからである。

なべどさんしーよさま はりの木まくら ドッコイ 何處へおいでも 離れまい。

まだだまさアれた ドッコイ だましーやめに咲アく もろのウ梅

船のやぐらに 小松ようゑて ドッコイ 小松ア 嵐で ふウねア走る

あいや吹きかせ 日和もよがる ドッコイ 江戸でア 大豆の 値もよウがる

ありアさこりアさこ 押しくる船は ドッコイ 女郎に 心ば あアればこそ

六、四方踏み

これも白銀でやる一つである。笛太鼓の囃子で 鈴を持つて舞ひ、四方を踏むので四方踏みと呼ばれる。一人あるひは二人で舞ふ。

あアらおもしろ ことゝは高天の原なれば 集まる神は 四方の神々

あらおもしろの天竺の 土曜の星は雲れども わが打つ雲をあらざらひや

あらおもしろのきこくより 吹き來る風は悪魔風 地よりかへせば 伊勢の神かぜ

あらおもしろの荒神の お前の前で 松こいで 松もろともにうちうちの繁昌

こゝで鈴を投げすて、「伊勢音頭」にかはるのである。

七、萬 歳

ゑんぶりの「田植萬歳」では太夫が羽織を着るだけであまはそのまゝで、扇と小鼓を持つて舞ふ。田地しらべや馬しらべ、それから苗代うちになつて田植になり、田植は鳥帽子かぶりかやることになつてゐる。

「萬歳」に「二又萬歳」と呼ばれて名高いのが向村二又にある。名久井村には「お江戸萬歳」「神力萬歳」。その村のち高瀬には「金力萬歳」。下長苗代には「神力萬歳」など、方々にいろいろの名がある。こゝには「二又萬歳」のうちから「お江戸萬歳」「愛嬌萬歳」「龍神舞」の三つと、下長苗代村の「神力萬歳」をあげる。

お江戸萬歳

お江戸も榮えておはします。お城造りの堅固には 門々は六十六門 櫓々のその数は オイ玉を連ねし如くなり かやうに芽出度御城下には、名はある町は八百八町。『オイ名の無き町も八百八町』そこで違つた、名のある町は八百八町その外数知れず。お寺の数は「オイ 一萬三千」三百三十寺なり。かやうに目出度お城よりも 鬼門にあたりし東叡山、山の麓にしのばすの池もあり 池の中には辨財天、鶯と亀は舞々ひば、中にてさんび鴉は ふんどし締めあけ相撲するは、ノヘラホンノホン

愛 嬌 萬 歳

君も榮えておはします。愛嬌の笑顔にこもりし梅の花の 笄つもりてまばゆきや 粧ひや 誠に嬉しく候や かしくや 筆こり書きそめて 妹背つきせぬ宮立に 萬津御門の柱には 四天王の四角や八角『キリリン』そこで違つた萬津御門の柱には 四角や八角『キリリン』まるろや參ろ 御馬はつづいて 内證は子だから 川原毛の駒には金覆輪の鞍仕かけ 深紅の手綱で お馬は勇めば心も嬉しく 一と踊

龍 神 舞

あら面白の壽に 西に百丈の黄金の山を築かせつつ 東の方には百餘丈の白銀山を築かせつつ 宮殿樓門かすの
蔓を竝べつつ 右に四品の額堂あり 左にくわけんの輪燈あり 中にくわけんの寶昌堂に 大龍玉の額を打つ
『そこで違うた 大龍玉額をつけ 障子は水晶で黄金の床を張らせつ、庭の砂子は金銀で 瑠璃の部屋は爛
漫堂 眺めつきせぬ四季の花

神力 萬歳

東西 東西、今年は御歳頭にあり 又天下に普く番人ご法印がただ心 弓は袋に納まるし 太刀は鞘の世に住む
鎖さぬ御代ご治まりて そそうなる才三も ちよご見參申せ。

ハハア八分にぶん出來たる目出たい目出たいは鶴三亀 銚子土器ごり取りし 三献さらりご乾す時は 三まは
し廻るは小車の茶の會 酒宴の事すぎて 遙か末座にゐたる才三も 太夫さまの御用ごあれば取るものも取あえ
ず 御前に鳥渡畏つて候。

念なう早かつたな、其方を呼び出しごは餘の義にあらず さる御方様より當期御萬歳一刻お好みにつき 御家
祝うて何萬歳。

御家祝ふのこごなれば 徳田は身に沈む 貧乏神は外へはだして馳せ出はる、七福神福の神さまは お家の座敷
へご躍り込む、何事も永久の爲神力萬歳ご銘されたらよう御座りませう。

何事も徳若に御萬歳ごや。

『ありがたかりける神力の競ひもあらたに在します。さては尊き 日の本に、伊諾岐伊諾册の二柱の御神は 高
天原より 天降らせ給へて 天照皇大神たつてについて 初めて日本をこりたて給ふ。』

はじめて四本をこりたて給ふ。

そそうなる才三も何ごきいた。

ハハアお前は何ご仰しーやりました。

『天照皇大神初めて日本をこりたて給ふ。』ハハア四本にも証據が御座ります。四本の証據には此の才三様もたつ
て二本。

そそうなる才三奴、才三へ様をつけて太夫は何ごいふ。

ハハそんなら太夫様も立って二本、此馬鹿才三めもたつて二本 どうでもかうでも四本にきまりました。

そそうなる才三奴 足の御詮義ではない。ハハア足の御詮義でない程によいし、足の御詮義を小強くなさるごい
ふに 爪は無いばかり中足が出るご六本にきまりました。

そそうなる才三奴

『そこで違うた 神功皇后三韓高麗攻め滅させ給ひて 八幡山に跡を垂れ弓 矢神ごいはませ給ふ。』

八幡山にだらりだらり。

そそうなる才三奴 何ときいた。

ハハア太夫様 お前は何ご仰りました。『八幡山に跡を垂れ弓、矢神ごいはませ給ふ。』

ハハアだらりだらりにも証據がござります。

なに 証據がある。

だらりだらりの証據には、私もはや 八幡八幡さまへ寒三十日が中 氷を缺きかきこりました。あまりきつい
寒で みツしりご凍みまして、ただ今は正月にもなりますれば、だんだんご温みさして凍みが溶けて、唯今は

早や青洩^{あざ}がだらりざらりこできました。

萬歳もあらあ成就したにも係らず 御子孫の御萬歳をも失はん、なんぞ四方に變つた話でも知らんか。

ハハア太夫様、話さきいて氣がつかました。言ひようたら語らうか、語らうたら言ひやうかと思ひまして、よいところで爪玉に引きかかつて來ました。

そそうなる才三奴、よき所でお目にかかりましたと申ししたがよい。

ハハアそんならよい所でお目にかかりまして 私もはやなみ方へどうえら下らうこき。

そそうなる才三奴、なみ方ではないかみ方 下らう時ではない 上らう時よ。

なる程 その上らう時 大きな大金を儲けました。

なるほど。

この才三め おツこつて五百兩。

そそうなる才三奴、太夫は太夫だけで 三百兩、才三は二百兩、合せて五百兩の金だは。

ハハア成程 五百兩の金を縞の財布へすこんご入れ おらア太夫の首玉へみツしりこごふんづけました。

そそうなる才三奴、縞の財布に入れ、おらア太夫様の襟元へ納めましたと申ししたがよい。

ハハア成程、襟元へ納めまして めろりかろりと歩るぎました所 眼がぱっちりこごさめました。

そそうなる才三奴、それ程の大金を夢にしてはならぬ。

ハハア太夫様、夢でない証據がござります。

なに 証據がある。

夢でない証據には ななつぶどんこにこごすま

太夫、才三

『萬歳や萬歳や 若水 かはりてあれ見たか 上には鶴 下には亀 千萬年までも御祝儀 明年までの御暇乞

ひ。』

八、鶏 舞

鶏舞は『ケイバイ』と讀む、能樂の傾盃樂からくづれたものであるとも説いてゐるが、今では『トリマヒ』とさへ呼んで、獨立した一つのものになつてゐる、主もに盃盆會の行事としたもので、二三十人のものが鶏の形を模した烏帽子を被つて輪になつて踊つた。近年は漸く失はれて豊年祭や三社大祭などの折々にその名残をこゝめ、それも階上鳥守などの山間の土地にだけのことされてゐる。

その唄として傳へるものに、

朝日長者の一人姫

三國一の手ぎもよい

三國一の實には

吾が兒にましたる實なし

北上ましたる川は無い

ましたるは阿武隈川

廣さは四萬餘丈

深さも四萬餘丈
合せて八萬餘丈

この鶏舞に墓念佛といつて孟蘭盆會に墓前で唄ふものがあり、心經を讀誦したあゝに唄ひつづける。

七月は もの、哀れな月なれや 野にも山にも かぶら火たくもの なむあみだ

前のお施餓鬼 位牌の梵字を讀んでみろ 讀むに讀まれぬ涙ながれぬ なむあみだ

前の榎の樹に 何はなる なむあみだ佛の六字なり

七月七日とようするは 親の御墓へ立むかへ 御墓まるりのその戻り 雨が降らずに袖しほる

そねの間によそ見たれや みそ萩を今年手にこる 水をば手向ける なむあみだ

香の煙りは細けれど 天に昇りて雲なるもの なむあみだ

戀しき人の墓見れば 見るより早く涙ながれる なむあみだ

七月野に咲く百合の花 佛に手向ける なむあみだ

長き草をば鎌で刈る 短き草をば手でむしる

死出の山 いかなるお人は死に初めた 二度ミ歸らね死出の山

父はてんまの生れ人 母ははりまの生れ人 父に後れて第三年 母に別れて今日七日 七日なれども人寄らぬ

人は寄らぬも理で道理 後はぎうおうぎうどの道は三筋あり 左の道へ行く人は 八萬地獄へけかけるぞ 右

の道へ行く人は 劍の山へけかけるぞ 後生よき人の行く道は 中なる道を行くとかや 太刀や刀で切り拂へ

念佛功力で浮ばせる かくにしくどくぎうどうし 大切ほつふ大師うんじよ あんなんこうく なむあみだ。

(地引)

九、駒 踊

駒踊も鶏舞のやうに供養のためのそれであつたのが、たゞの一つの舞になつてしまつたやうな姿である。その由來は明らかでは無いが、野澤村大字西越字釜坂といふに牛頭天王の祠があつた。この社殿は莊麗なものであつたが神佛分別の時に御多分に漏れず破棄されてしまひ今はその跡に小ひさな祠をこどめてあるに過ぎない。二百年程前この土地を管するために來てゐた盛岡藩士山田仁左衛門、この土地では旦那様さよばれてゐた者の一人であるが、この牛頭

天王を祀るために七頭の駒を象どつて駒踊をつくつた。この土地では言傳へてゐる。鹿毛栗毛青毛など七種の毛色につくつたその駒が近年まで残つてゐたが火災に遇ひ今あるものはそのあとで新調したものである。これが駒踊の由來についてやゝ據るべきものでもあらうか。

『駒踊は舊南部藩に於て施行せる野馬取に擬へて組織せるもの、由其創始年代は記録の據るべきなきを以て審かならざるも享保年間吉田有之助吉田嘉左衛門の兩人發起となり農閑の娛樂として組織せりといふ。抑も野馬制は永正年間より舊藩に於て軍馬繁殖の一法として實施せるものにして常に當地方の曠野に放牧をなしたり野馬は性狂暴人を近づけざる等容易に捕獲することを得ざりしを以て藩の之を捕へんことを放牧原野附近の村落に會して數百人の入夫を集め各所の警衛を嚴にし野馬の逸走を防ぎ且數十の選手を以て二歳牡馬の取押を爲さしめたり各村の若者は其選手に當るを榮譽とし孰れも盛裝を爲し鹿毛栗毛青毛を好み駒に打乗りて數多の馬を追集め頓て面綱打掛け率來る態は實に凱旋の將士の捕虜を引來るにも似たりしとかや駒踊の起因にして即ち盛裝せる若者か十二頭の駒に打乗りて太鼓笛の拍子面白く掛聲揃ひて乗出し或は還し行違ひて又戻り勇みに勇みて乗廻はす處一種の古舞たり大刀小刀薙刀棍棒等の附舞は是れ藩掛官の立會を擬するもの、如し其舞踊順序附舞七つ道具左の如し
通り (道路行軍中の拍子)

- 一、雇入 二、直り駒 三、引返し駒 四、休み駒 五、進み駒 六、三方講子(役駒) 七、乗り違ひ 八、廻り駒 九、庭引
- 附舞 七つ道具(四つ舞、三拍子)
- 一、大小刀、薙刀、棒、杵
- 一、太鼓、笛、手びら金、

此踊は七戸地方にては洞内、三本木地方にては吉田、三澤、米田、瀧澤、五戸地方にては石澤は今尚踊る熟練なる若者ありといふ

『駒踊縁起』には書いてある。

『八戸風土誌』の稿本には『鶏舞踊又劍舞、駒踊』の項をあけて次のやうにしてある。

『是は七月十五十六の兩日八戸附近の村落より一隊二十人内外にて大太鼓を前半に横たへ笛鉦等にて囃し八戸町の家々へ到りわさをぎをなして米錢を乞ふものなり。其し、踊なるものは鹿角を立てたる鹿の面を被り背には豊年満作五穀豊饒なごの文字を大字に染抜れたる法皮を着し鶏舞踊は雌雄の鶏形の帽子を冠り白木綿にてはち巻を身には友禪模様の頗る派手なる半纏を着し手毎に太刀薙刀棒を持ち鉦の音に合せ各得物を打合せて踊る中に一人鬼面を被り散々たる亂髪を冠りを載きたるもの右往左往に飛躍奔回するさま最も勇壯を極む。

駒踊は模形の乗馬を腰に着け手綱に鈴を附して菅の饅頭笠を頂き大紋付たる法皮を着圓陣を作りて舞踊す。日本風俗志陸奥の條に昔源義家が安倍貞任を征伐したる時陣中の軍氣を勵ます爲に催されたる遺風と稱せられ、劍舞は又劍振踊と云ふ、こは源義經の藤原氏に頼り平泉の館に在りし時一日牒者の來りて劍と板とを持ちて舞踊の間に暗に藤原氏の一族中鎌倉に通じひそかに義經を殺さんとするを諷したるに初まるる傳ふとあり。新撰陸奥風土記にはひなぶりに古く傳へて于蘭盆に鹿をざりといふもの有その昔し牡鹿頭に起るむかし牡鹿つまを戀ひて死し鹿妻村に在り郷人は是を憐し鹿野苑の因行に比し功德勸進の爲に諷出とありて左の歌二首を擧げたり

へたてなく常はしたしき友なるいかにめしかをかくしおきけむ

萩の床によはの遊のつきされはこゝにめしかをかくしおきけり

駒踊は縁由の徴すべき書を未だ見ざれども古老の傳説には此踊は古く五戸地方より初まりたるものにて故に今に至

りても五戸の駒踊は八戸よりは巧妙なりこいひり云々。」

五戸地方でもさきの野澤では既に滅び、倉石村大字石澤に行はれてゐるがその由来などは一つも傳へずたゞ「や
り來りを傳へた。」といふだけである。石澤の下流にあたる川内村大字切谷内にも昔はあつたが今は影も無く徒らに營
つてそこから傳へられたといふ下苗代村大字高館に行はれてゐるものを「高館のは踊り方が間違つてゐる。」と評する
年寄の若干がありながらその誤を訂すものさへ今の切谷内には失はれてゐた。高館には現存するがこれも残されてあ
るだけで、此處ではもこは盆の十六日に舞つたものであるが今では鶏舞などこひこしくゑんぶりやお祭の餘興と化し
てしまつた。

駒踊には歌詞は無い。高館ので言ふさ舞は四つから成り、一つは「庭入れ」で七頭の駒にまたがつて踊るもの、一つ
は「七つ道具」で大太刀二人小太刀二人碓刀二人棒二人杵二人で舞ふもの、一つは「うづぎあさあ」と呼ばれるもので、
持物は「七つ道具」と同じである。も一つは「扇舞」である。囃子は笛一二挺、鉦二つ、太鼓二つからなつた。「庭入れ」
が前の藝で「七つ道具」「うづぎあさあ」「扇舞」の順序に踊られ囃子はそのおのおので異なつてゐる。この四つの中に
「庭入」に五種、「七つ道具」に八種、「うづぎあさあ」に三種、「扇舞」に五種の踊りが今残つてゐる。駒踊はすべて鉢巻襪
手甲脚絆の扮装で駒に乗る者は菅笠をかぶつた。

十、墓獅子

鶏舞の墓念佛に似たものに墓獅子といふ獅子舞、神樂の一つがある。古くは神樂の行はれた階上、中澤、野澤、湊
館などにも行はれたやうであるが、今は鮫村の一部と湊町の白銀に僅かだけ行はれるに過ぎない。新佛の墓前で哀み

の歌を唄ひ供養するので盆の十六日にまこして行つたが盆中のいづれの日でもこれを行つた。

館村大字八幡では一二度行はれただけで終つたやうである。そこでは心經一卷の讀誦をしたあとで獅子が立つて三
廻りあをやぎを打ちそして坐つた。こゝで焼香がありそのあと獅子が墓前にひれ伏し唄につれて禮拜をした。その唄
は五つだけで終つてまたあをやぎを三定めうつて終つた。

立つ時はわが古里を眺むれば石に書いたる石の塔婆よ 石の塔婆よ

身はこゝに心は信濃の善光寺導き給へ彌陀の淨土に 彌陀の淨土に

白銀にひしやくに曲けて水汲めば天から落つる玉の水かな 玉の水かな

極樂のする木の枝に何はなる南無阿彌陀佛のぶつのはなる 佛のはなる

西見れば紫雲は棚曳きて導き給へ彌陀の淨土に 彌陀の淨土に

鮫の墓獅子の歌は「御神樂掛歌舞詞懷中鑑」の中に「墓獅子の歌。此歌掛け方は春祈禱なる節の掛歌とは異にして
閑靜なる聲にて愁ひを含むべし」として載せてあり「墓獅子歌終る」まで十七首であるが、そのうち九首目の

酒呑まば多くは呑むなすこし呑め

高天の原の色に出るもの

の一首は歌はれなかつた。

始め心經の看經が終るこ

青柳の糸よりかけてよりかけて

又よりかける青柳の糸

谷の松峯より高く生伸て

いかなる神々名をやかるべし

こ青柳の歌を唄ひ、そのあこへ早調子に

極樂の末木の枝に何がなる

南無阿彌陀佛の六つの字がなる

南無阿彌陀佛の六つの字がなる

こ續け、そこから改まつて「えんようほう」こさきにつけては歌をつけて行き、一首こに第一句のつぎに「ヤア」最後に「ヨ、ヤア ハア」こ囃子をいれる。その間獅子は歌についた身振をして全く坐つたま、或ひはひれふしたりしたま、で色々な容姿を示すのである。

東方は薬師の淨土の玉の御構や

君は開らかて誰れがひらかふ

西方は彌陀の淨土の玉の御構や

君は開らかて誰れがひらかふ

南方は觀音菩薩の玉の御構や

君は開らかて誰れがひらかふ

北方は釋迦の淨土の玉の御構や

君は開らかて誰れがひらかふ

中央は大日大悲の玉のみこや

君は開らかて誰れがひらかふ

茶の木にはいかなる木の葉を取り揃ひ

天から落つる玉の水かな (柄杓に水を汲む)

櫻木をうち割り見れば何もなし

花の種こは何にをいふらん (花を手向ける)

白銀を柄杓に曲けて水を汲む

水をば汲まぬさよにこそ汲む (水を手向ける)

戀しさに戀しき人の墓見れば

涙でかいた石の塔婆よ

戀しさに我が古里を來て見れば

替らぬものは森こ林よ

戀しさに戀しき人を來て見れば

見るより早くしほる袖かな

立つ時は我れ一人こは思ひども

死出の三途の連れは多くぞ

闇の夜に啼かぬからすの聲きけば

生れぬ先きの父ぞ戀しき母ぞ戀しき

極樂の末木の枝に何がなる

南無阿彌陀佛の六つの字がなる

我親はいかなる惡非に我れをなす

親をば問はぬ親に問はる、

西見れば紫雲はたなびきて

疑ひなくば(早くなる)彌陀の淨土に

疑ひなくば彌陀の淨土に

こ繰返して獅子がこゝで立つて青柳をうつつて終る。太鼓一つ笛一二挺鉦一つ二つだけで墓前にはうすべりを敷いてその上に獅子が坐つてゐる。

其五 御 詠 歌

お國三十三番の札所さいふのが幾通りもある。したがつてその御詠歌も幾通りもあるがそのうち最も範圍も廣く、行はれてゐるこゝも廣い一つをこゝには選んだ。

『奥州奥通三十三番巡禮札所』として『篤馬家訓』に、名久井の法光寺にあつた元本から『寛延辛未六月寫之』と記されてあるものに據つた。普通行はれてゐるものは殆んどこれによつて多少の相異を認める位のものであるが、今法光寺の本堂に掲げられてある額面は明治十八年十月三戸の俳人松尾頂水の納めたもので、そのあこに

發句 涅槃忌や空飛鳥も落ちて來る

こ句が添へてある。あこで頂水が改作したものである。この二つを並べて載せる。

一番 八戸寺下正觀音

東門めぐりはしめの札うちて寶物寺の下の觀音

小湊や岸打波は寺下の五重の塔にひびく瀧津瀨

二番 八戸是川清水寺觀音

我がこゝろ今より後はこごらじな清水寺へまゐる身なれば

我がこゝろ今より後は濁らずに清水寺にまゐる身なれば (六番に)

三番 八戸岡田千手觀音

かくおかた大悲の御堂拜すれば三毒消滅嗔恚柔順

岡田なる大慈の御堂大慈寺に佛の誓ここに松館 (二番に)

四番 八戸島森高山観音

はるはるを登りて拜む高山の大悲のちかひたのもしきかな
はるはるを登りてをがむ高山の大悲の誓あらたなりけり (八番に)

五番 八戸白濱正観音

罪さかもきへよこいのる観世音はらふ不淨も念彼観音
しら濱に頼みをかける観世音(破損缺字)花のうてなに (七番に)

六番 八戸白銀正観音

むせつふけん白銀濱の観世音於苦惱死厄念非観音
参るより頼みをかける清水寺白銀濱に五色雲立つ (五番に)

七番 八戸岩淵正観音

岩淵や観現堂の観世音しゆかんろうほう常にせんこう
いにしへは権現堂の観世音ながら瑠璃の光なりけり (四番に)

八番 八戸新井田十一面観音

不思議しやの誓はにるた淨松寺大日堂の清きなかれに
錦路や誓は新井田淨正寺大日堂清き流れを (三番に)

九番 八戸長者山大慈寺観音

ひたすらに頼みをかけよ大慈寺のむつのちまたのくにかはるこも
ひたすらに頼みをかけよ大慈寺に六つのちまたの國かわるこも

十番 八戸頼光寺如意輪観音

紫雲山登りてみれば如意観音御影拜む念ひ観音
よもすがら大悲の月は來迎寺紫雲の山に立つは如意輪

十一番 八戸横枕正観音

只たのめまここのときは横枕北へむかへん彌陀の三尊
横まくら今は南に花の寺庭の櫻も盛りなりけり

十二番 八戸根城正観音

根城なるすみの観音ふし拜む川の瀬音か松風の音
みなかみは根城なるらん角の寺松の梢にひびく瀬の音

十三番 八戸坂牛正観音

六の道かねてめぐりて拜むべし亦後の世にもきくも坂牛
六道をかねてめぐりて拜むへし佛の誓おもき坂牛

十四番 櫛引八幡三十三観音

枯木にも花咲く誓普門院八はたの里にみそち三躰
かれ木にも花咲く誓立畑ややはたの鐘のあくる川波

十五番 五戸七崎正観音

たりみあるしるべなりけり七崎の誓は後の世にもくもらし
むかしよりしるべありけり七崎のちかひはのちの世にもかわらす

十六番 八戸斗賀十一面観音

有難や斗賀りやうけん堂の観世音五障の霞うちに残らん
松風や斗賀吹く音は涼源堂後生の霞はれて残らず

十七番 二戸相内正観音西往山圓通寺

何事も今は相内観世音二世安樂きたれもいのらん
何事も今は相内観世音二世安樂も誰もいのらむ

十八番 八戸作和観音

名久井なるそこてあらひの観世音三従五障うちに残らず
名久井なる袖洗の観世音後左の罪は消てのこらす

十九番 八戸法光寺千手観音

ふたらくやよそにはあらし白花山松吹みのり入合の鐘

ふたらくは餘所にはあらずはたわ山松吹く御法入相のかね

二十番 八戸箭立十一面観世音

こやくこ恵みやたての観世音みちひき玉ふそ知るも知らぬも
とやくこめくみ矢館の観世音みちひきたまへ知るもしらぬも

二十一番 三戸野瀬止観音

今そきく松吹風や金花山梢に琴のしらへ有きは
かかる世に松風吹や金花山梢に琴のしらへあるきは

二十二番 三戸長谷十一面観音

なむきめう長谷の御寺や蓮臺の山も誓も深き谷川
南無歸命長谷の御寺の蓮臺に佛の誓深き谷川

二十三番 三戸早稻田観世音 嶺松院門前にあり

わせ出なるしんへん不思議ちや観世音導き給ふそ知るもしらぬも
早稻田なる神へん不思議の観世音みちひき玉へ猶後の世を

二十四番 三戸隅の観音 小向村古町に在り

ゑんぶくの御寺のすみの観世音示現普門の山にこそあれ
ゑんぶくの御寺のすみの観世音流を汲むも後の世の爲

二十五番 三戸悟眞寺正觀音

修なん山登て見れば悟眞寺の佛を拜む身こそ頼もし
修南山登りて見れば悟眞寺の佛を拜む身こそ安けれ

二十六番 田子清水寺十一面觀音 下田子にあり田村將軍建立

田子町に達はしんへん不思議しやの誓はするの世にもかはらし
忽に立や神へん新なる誓は末の世にも變らず

二十七番 三戸釜淵正觀音

釜淵のみきはに達や觀世音慈眼視衆生念彼觀音
釜ふちのみきりに立や觀世音がんし衆生ねんひ觀音

二十八番 福岡岩谷堂觀音

立よりてあまの岩堂や福岡の岩屋の佛拜む尊し
たちよりて天の岩谷は福岡の岩屋の奥の深き御佛

二十九番 福岡戸越山正觀音

いにしへの名のみを聞て尋ね來る戸越山路はそれその山
いにしへの名のみを聞て尋ね來る千歳をこゝに鳥越の山

三十番 福岡岩谷朝日正觀音

あきらけきみよの初の石切寺岩屋の佛光さしけり
あきらけき御代の初の石切寺岩谷の佛光さしけり

三十一番 八戸觀音林觀世音

一 ごとすちに觀音林に來て見ればするの住家は西ここそきけ
一 筋に觀音林來て見れば末の住家は西ここそきけ

三十二番 福岡一戸市近山觀音

一 近の深山の奥のくわんせ音具足妙相念彼觀音
はるはるこそ尋ねて來れば似鳥の大悲の山にひひく瀬の音

三十三番 福岡桂清水正觀音 別當八葉山天台寺桂壽院

極樂や東にきたよ西の門月の桂に清き水浪
六の辻はるくここに西の門導き玉ふ名を後の世に
つみさかの負荷を肩におへすりを桂清水に洒き納むる
極樂は東よ北よ西のすみ月の光に淨き水波
罪科の重荷をかたにおゆつるを桂清水に洗きおさむる。

其六 語り物

語り物には二つある。一つは奥淨瑠璃、一つは松尾節である。そのどつちもがすでに滅びたと言つてよい姿である。も一つ語り物ではないが、オシラ遊びの經文をこゝにあけておく。

一、奥淨瑠璃

市川村に住んでたつた松蔭庵五交の隨筆である『晝むかし』に奥淨瑠璃を

『奥州の大奥なる南部の地にて 座頭連の語る奥ぶし上るりこいふものあり。略して奥上るりこいふ。さながら其ふしは土佐 外記 ゑいかん 文屋にもあらず、まして豊後、義太夫にもあざれば、聲音は鄙びたるやうなれども閑かなる事丁々として流るゝが如く、殊勝なるこゝ安達の姥が角をもぐ。其言の葉は五常五倫の道を教へて人こゝろの中を和ぐれば、道を歡ぶ奥もの、正直、それこそ老若貴賤の男女、迷みに呼び合ひ寄つどひて一心不亂に聞覺ゆれば、自然こ其身その心の胸の袋に染み込んで習はぬ智慧に邪氣を琢き磨けば——』と説いてある。今は殆んどこれを語るのをば聞かぬが年寄りの座頭たちはまだ語るだけは語りうるやうである。この『晝むかし』の中からその一つ二つをあけてみる。

○信田妻六段續

扱も其後 爰に和泉の國の住人阿部郡司安秋にて弓取一人御座します。御子の阿部の安名と申せしは至つて深く神佛を信仰なれば、信田の明神へ月詣なし玉ふに、當月はいまだ參詣申さずと父上に暇を受け、供人少々召供して信田明神の神前に暮打廻し參籠の幣帛上られけり。然る所に河内郡住人石川悪左衛門常平といふものあり、狐の生き肝を取らん爲、信田の森に狐狩して女狐一匹追出し既に危かりし時、狐は安名の幕の内へ駆込み助けて

くれと云はぬばかりに尾をふり頭を低れにけり。本より安名は信者なれば、狐を取つて神前へ入置たり。然れば悪左衛門がせこの者追々に來り狐を出せこのしりけり。下部共申は此方へは參り申さず、他所を御尋ね候へし申せば、本より血氣の悪左衛門、小言言ふより踏込んで打取れよとばらばらと討て入れば、狼籍なりと安名も共に防ぎ玉へども、悪左衛門が大勢になぎ立てられ、終に安名もいましめの繩に引れ玉ふぞ無念なり。ややありてかしこになれば首をや刎んこひしめきけり。かかる所に悪左衛門が且那寺河州藤井寺の和尚通り懸り、囚人を見て是は衣をかけ玉ひ悪左衛門に向ひけるは、某只今檀用にて罷歸り見れば囚人の候故、坊主役に衣は懸けて候へば申請つれ參るなりと仰ければ、悪左衛門中は御尤もには候へ共、今日筒様筒様の次第にてからめ取候囚人なれば平に御免と申けり。和尚の曰御存知の如く筒様の節にさしかかり人を助けるは坊主の役勿論貴殿檀家と申いやとありてもをふとありても申受るなり、左無き時は坊主一人潰れ申さまざまの言譯に悪左衛門も不承不承に渡してこそ歸りけり。和尚は受取ややありて其行方は無かりけり。安名は虎口を遁れたれども暗さは暗しいづくを宛とも無かりしが、遙かの向ふに火の影の見えければ、是を便りに尋行き見れば伏屋の有けるに誰ぞ御頼と申せば二十ばかりの女のあり。近頃ながら道に迷ひ難義仕る御宿一つ願ひけり、女は御安き間の御事なり是へ御入候へし中に、然らば御免と内へ入れば、女は彼是勞りて其夜妹背の中となり、月日積りて男子一人設け玉ふ阿部童子と申けり。成人の後阿部の晴明これなり。童子は五歳の秋の頃庭前の亂菊に母は野干の姿を顯はし幼なきものに見付けられ

戀しくはたつね來てみよいつみなる信田の森のうらみ葛の葉

こ一首の歌を残して信田の森へ歸りけり。晴明のこゝは申もなかなかおろかなり、是明神を敬ひ狐の命を助しより其奇特にや、不思議の子供を授りて末代無双の名残しも感仰すべきことどもなり。右餘略す。

○ 八島合戦 義經弓流し

頃は元暦元年三月十八日、源平互に入亂れ戦ふ折節、義經何まかしたりけん弓を浪間に取落す、其折しもは引沙にて遙に遠く流れ行くを、敵に弓を取られじと駒を浪間にをよがせて敵船近くなりし程に、敵は是を見るよりも船を乗寄せ熊手にかけて既に危く見え玉ひしが、されども熊手を切拂ひ終に弓を取返しもこの渚に上り玉へば、其時兼房申やう口惜しの御振まひやな、譬千金をのべたる御弓なりとも、御命にはかへ玉ふべきや涙を流し申ければ、判官是を聞き召いやまよ弓を惜しむにあらす、義經弓矢を取て源平に私なし、然れども佳名はまだ半ならず。されば此弓を敵に取られ、義經は小兵なりといはれんは中々無念の次第なり、よし夫れ故に討れんは力なし、義經が運の極めと思ふべし、さらば敵に渡さじと浪に引る、弓取の名は末代にあらすや語り玉へば兼房も扱其外の人々も上下感激涙を流しけり。右餘略す。

二、松尾節

松尾節は謂ふ所の『仙臺坊』である。浪花節の一派として、今行はれてゐる浪花節が流行する以前この界限でよく語られたものであつた。今の浪花節が割合に早くこの地方に享け入れられたのは、この浪花節の一派である松尾節によつてさきざきから耳に親しんでゐたためのものであるらしい。

所謂仙臺坊である初代に就いては知る所が無いが三代目は俗に三戸坊と呼ばれ最もこの地方の人々とは親しかつたその先代即ち二代目仙臺坊は轟木坊と呼ばれた市川村木村三四郎の家から出た司市であつた。司市はなほ存命で上北郡三本木町に住んでをり、八十歳から頭を出した高齢ではあり全く齒の無くなつた口でこの松尾節を語り語りしてゐる言はれる。この司市は三味線が巧みであつた。

三代目仙臺坊は三戸坊といはれるやうに、上郷村大字茂市の産で本姓を内條名を金作と呼び藝名が松尾登蝶である幼い頃上北郡百石村の酒屋に奉公してゐた、その十五六歳頃は頓智衆を抜くといふかたちであつたのが、二十一歳で失明してしまつた。盲目の金作は發奮して不具の身をただ一人父母の許しさへ受けずに北海道へ渡つた。そして杖一本で平素好むところの音曲を頼りに諸所方々をめぐつてゐるうちに、函館で浪花節——即ち仙臺坊の松尾節を聞いたのであつた。それから仙臺坊の弟子の鐵といふ男と懇意になり、この鐵といふ男の斡旋で仙臺坊の一座に加へて貰ふことになつた。その時の名は鶴賀登昇でそちこち巡業してゐた。この頃の登昇は『おかりや節』といふ名で七八年も高座に上り随分辛酸を嘗めたもので、その傍ら仙臺坊に師事してゐたのであつた。三代目仙臺坊松尾登蝶の名乗を上げたのはそれから後のことでこの仙臺坊の足跡を印した處は津輕の弘前、黒石、五所川原、藤崎などで、南部一圓は言ふまでも無かつた。別にも八戸では舊藩主の前で語つたといふことを一代の光榮してゐたものであつた。岩手縣にはいると、南は一の關あたりまでか興行區域で、期間は冬の農事閑散の時を巡業にあて、ゐたものであつた。弟子は七人はどあつたが殆んど皆天死し今では福太郎といふが残つただけである。登蝶はすでに六十歳に手が届くであらう三階松の紋所をうつた高座から

「……善と惡との世の中を 渡り苦しきこの時節 人の氣をひく三呼線の 三筋の糸の調子さへ お氣に合ふやら合はぬやら 合ふも合はぬも取交ぜまして 松尾節のこゝなれば 未だにぬけぬは國なまり 文句ちがひや假名ちがひ度々あり勝には候へど あれアあれだけ思召し 千に一つか萬が一 せめて卵の毛で突く程も お氣に召したる事もがな 御座ありましたる事ならば ただよいよい御最負を 偏へに願ひ奉る——」

語り出した枕の文句が、いまだに耳に残つてゐる。語り物は義士銘々傳や岩見武勇傳田宮坊太郎水戸黃門記など、八戸の町は十六日町目時金次郎の家によくかつた寄席で書いた桂川力藏やお妻八郎兵衛なども、どこか心底にこぼ

まつてゐる。この松尾節を語つたあこでは屹度謎かけをした。これが面白さに集まるものも多かつたやうである。「二月猫の喧嘩さかけて」聴家のうちで叫ぶのをすぐ引受けて「二月猫の喧嘩さかけられまして」と繰返し、押返すやうに「これを思案で解くならば」言ふと、この時三味線弾きが突如として「そして心は」を聲を入れる。「勝負は屋根にあるではないかいな」と言つてにやりと眼の見えぬ口元に笑を漂はしたのを記憶してゐる。

浪花節の流行のあこ、登蝶はまだ語つてゐるこはきくが松尾節が耳には響いて來ない。

三、まんのふ長者物語

オシラ神といふのは長さ二尺ばかりの桑の木の棒の一端に男女の顔或は馬の頭などを刻み、その上を錦や緞子や色さまざまな布帛で覆ひ飾つたもので男女一對を一題かじといひ毎年その上へ上へ布帛が覆はれていつた。盲目の巫女であるイダコが村々のオシラ神のある家々に招かれてオシラ遊びをした。オシラ遊びはオシラほろきこもオシラ様を遊ばせるこもいつて、正月の十六日に、或ひは正三九のうちの或日に、又は春秋の彼岸にこいふやうな日を選んで行はれた。家々で行ふ時もあれば、市川村のやうに一村のオシラ神を一箇所に集めて多くのイダコがそこで相會して遊ばせるこもあつた。奥州の北部に行はれてゐる一つの土俗の神事であるが三戸郡が最も多い。このオシラ遊びの語りごこ即ち經文が三つだけあり「くまん長者物語」「きんまん長者物語」「まんのふ長者物語」である。この物語は蠶が病にかつた時にも誦せられてゐる。オシラ神の話は別に書いてあるがこの經文を「民族」から轉載した。

まんのふ長者物語

——オシラ遊びの經文——

十六ぜんのシラの神

御本地讀み上げ頼み奉る

手にさればこそ手になつて

遊んだ神かな

昔よりまんのふ長者こて

あるかの長者こそ

姫君一人もたせたまふ

晝はかけんの座敷

よるはかひごの遊び

ろぎやうかつぎやう限り無し

然るにまんのふ長者のみ既にて

一の名馬こて繋がせたまふ

姫君も御年十六歳にならせたまひし年にこそ

今までや御厩へ下りて

名馬見物致したるこは無し

十二人の女房たちの目を忍び

父母の御目はからひ忍ばせたまふ

姫君きぬのつまを取り
かすみの鞭を杖につき
急ぎみ厩へ下らせたまひて
一々名馬御覽する
中にもいつくしき名馬あり
ぜんだん栗毛
左りの肩さき見奉れば
月こいふ文字は七流れ
右りの肩先見たてまつれば
日こいふ文字は七流れ
左りの背すぢを見奉れば
法華經こいふ文字は七流れ
右りの背すぢを見奉れば
泉こふ字は七流れ
耳こ申せば法華經二本立たる如く
目は日月の如く
尾首は白き糸をよりかけたるに異ならず
爪こ申せば天國ふせたる如く也

人間の身ならば一夜の契りを
こめべきものよこあひくやうふさいで
霞の鞭で二度撫でさせ給ふ
性ある名馬のここなれや
前膝折つて戀のやまふこ惱みける
八人のこねりども水かひ糺かひ
くじよの葉笹の葉こり飼ひたまひど
これ餌食に定まらず
これは何ぞいかがはせんこ
兎にも角にもこの事君に
御披露申さばやこありければ
まんのふ長者これを聞き
さらば博士を喚んで占ひせよこありけれや
七の博士を召よせて
昔の雜書今の曆をひきあはせ
つくづくかがへて申す
是はそもせんだん栗毛
姫君戀ひのやまふこ惱みけるこ占ひを致す

まんのふ長者これを聞き
大きに驚きたまひてありければ
姫君この事きこし召し
いそぎみ厭へ下らせたまひて
一首の歌を遊ばせたまふ
霞の鞭で三度なでさせ給ふ
まんのふ者長それを聞き
大きに腹を立て
白がねの床几に腰をかけ
せんだん栗毛に打向ひ
昔は今に至るまで
今は昔に至るまで
畜類は人間戀にしたる例も無し
人間は畜類戀にしたる例も無し
國のあるじの國守にこそ
わが姫ご縁くませべし思ふそのあひに
わが姫に縁いるべきこは
思ひによらんこ言葉いかひに怒らせ給ふ

性ある名馬の事なれや
北に向つて三度いなまき
前膝折つて舌をくひ切り空しくなる
八人のこねりども
まんのふ長者にきこし召し
さらばもこ綱打切り
御厩より引出せ
ごんが河原に棄てさせよこありけれや
仰せの通り八人のこねり共
もこ綱打切り御厩より引出し
ごんが河原に急がせたまふ
急けば程なきみんなみになりゆけや
四方に杭をつき
さらし置きてぞ還りける
姫君その事きこしめし
せんだん栗毛なれの果
見ばやこおほし召し
十二人の女房の目を忍び

たけとひこしまかんざしかけさせ給ひて

ごんづ草鞋しめはいて

菅の小笠で顔かくし

かすみの鞭を杖につき

みんなみをさして急がせたまふ

急けば程なきみんなみになりゆけや

こゝやかしこゝ尋ねたまひども

姫の力は及ばんこ

南をはるく御覽する

みんなみの桑にこそ

さらし置いたる皮を御覽する

あゝら無残な名馬かな

長き壽命にあるべきに

わが故はや／＼死して候

さらば菩提にこむらうてくればやこ

一卷の經を讀み

六番目の念佛を唱へ

よきに菩提をこひ給ふ

重ねて姫君あるやうな

いかに畜類の身なりこも

性ある名馬のこゝならば

何處へなりこも我もろこもに

つれ行かばやこありけれや

仰せの通りこがねのえんま

せんだん栗毛の形こなる

姫君や飛び來つて

あまたの空へ指をさし

天の羽衣かひぐるみ

西より黒雲立ち

風にまかせて西天竺に上らせ給ふ

十二人の女房たちは

三にち三や尋ねたまひども

姫の行方見えざれや

まんのふ長者にきこし召し

さらばわが姫を尋ねてくれればやこ

八人のこねりども

あまたのないし出立つて
 ごんづ草鞋ぬいて
 七日ほぎ尋ねたまひども
 姫の行方さらに見えざれや
 まんのふ長者はきこし召し
 さらばみこを呼び申して
 み神樂はじめ七つがまたち
 三日三夜神の御託の上で
 姫の行くへを聞き申さばやこ
 さらばみこをほうしみこを呼び申して
 御神樂はじめ七釜立ち
 三日三夜七日七夜申せば
 けふで七夜三卯の刻に
 神や下らせ給ひて
 長者姫の事なれや
 同じ蓮になりけるぞ
 あまたの空に指をさし
 西天竺に上らせたまふ

十六日白毛虫黒毛虫
 二つの虫にてくだりびくぞ
 白毛虫は姫の姿こなり
 黒毛虫はせんだん栗毛の形こなり
 それ餌じきに南百番こいふ木の葉をこつて
 白かねのまな板黄金の脛丁で
 うすきりいづみに飼ふならば
 さら／＼こぶくしけるこて
 長者夫婦は斜めに悦び
 又神やあがらせたまひて
 長者夫婦のここなれや
 三月十六日程や久しき待たせ給ふ
 日過ぎ隙もりすえざりや
 はや三月の十六日にもなりけるぞ
 卯の刻から神の一てんまで
 神風吹いてなごやかに
 五色の雲のたなびき出で
 五色の雲に打つれ

姫の玉手箱はまひ下る
ふた押開きて御覽すれや
急ぎ開いて見たまひば
しろ紙一枚錦にくるみ
みだい取上げ
右りの袂にさんちさん夜
左りの袂に七日七夜
あたゝめ定め
取りや出して見たまひば
まごころに白毛虫黒毛虫
二つの虫にて候な
いつよりもはるみやは
だんぐくこほめ喜びて
神からの仰せの通り
南百番こいふ木の葉をこり
白銀のまな板黄金の庖丁にて
十二人の女房たち
こがひ母こ名づけたまふ

八人のこねりども
桑こり玉子こ名づけたまふ
三七日飼はせたまひばつち子こ名づけ
三七日かはたまひばたき子こ名づけ
たきこなんによこ名づけたまふ
三七日飼はせたまひば
白かねの舟をはでふな子こ名づけ
三七日飼はせたまひばには子こ名づけ
には子なんによこ名づけたまふ
三七日かはせたまひば
こがねのまやはきくだし
三七日飼はせたまひば
これより南の方こうせんこいふ山はあり
高さ七かんどち
廣さ六かん路の山はあり
かの山の木を伐りてつきれて面白や
通ればこそこほりがね
九十九匹のついのあらごも

大きく繭や鶴のごのせ
小さきまゆや鴨のごのせ
かもは河原にしらかはら
つくりつけたる繭なれや
ねりて千人かくて千人かゝるて千人
三千人の女房たち相副ひ
白かねのはんじょうたらひ
黄金のわたばりさりもちて
な、はつかなかあやに掛け
したんのつゝを手に下け
五色の糸をあやにかけ
神や下らせたまひて
白かねのばんに腰をかけ
うんさんも
さくそわかあやてうてう
くだそろそろほくちより
織り出すはたかな

はいさいや
きよいきよからだ
おりやすはたかな
おくないす障子をしめ
いくへひくへ七重も八重も
重ねてもひく

和歌俳句

第一、和歌

八景を詠じた和歌は八戸にも五戸にも三戸にも白銀にもある。
八戸八景

八太郎崎の夜雨

夜の雨誰か通ふらん蓮沼のぬれにそぬれし荒磯の松

大橋の夕照

刈稻や長苗代も通り來て夕日さきもに渡る大橋

上の山の秋月

立鼻や月の照りそふ海の面船歌さもに歸る漁船

種市山の暮雪

見渡せば種市山の雪の暮吉野たつ田も外ならぬかは

小田の落雁

かりがねは幾峰こえて磯近く小田の前田に友を待らん

沼館の晴嵐

沼館はあらしにつれて波間より千舟も見ゆる鮫の浦うら

正榮山の晩鐘

浅山月霜

待えたる法の花なるお會式まじきも今日御満座さ入相の鐘

燕嶋の歸帆

眞帆片帆燕しま沖を行く船は蝦夷か千島をあこの追風

○

八戸近世の八景

長者山盛花

神さふる宮居のさくら花さきて山の名高く世にかほりけり

燕島群鷗

みちのくの黄金花さく燕島に沖のかもめのやこりて來ぬらん

扇ヶ崎驟雨

手にならす扇の崎の松原に夕立わたる風のすすしさ

新坂秋月

ふもこ田の稻葉の露にやこるらむ月もさしある秋のたのみに

白山暮雪

春ならば花さも見ましかきろひの夕日に匂ふ雪の白やま

沼館晴嵐

川霧はあらしにはれて煙のみ立つつきたる沼館のさき

大橋斜陽

橋本波安

大橋もかかりて長し夕日影かたふく山はちかきわたりを
館鼻漁舟

わたのはらみるめはるかにこき出る蟹のを舟のゆくへしらすも

八戸 八景

石橋 次 常

このかみなりける人の家ゐのうしろ垣の外面に秋の田かりほす稻なごおさめまくまひ廣き所を〇〇しめをける
そのおなしかたへにいごわひしくむすひし草の庵より見おろせは打〇〇田面〇〇むかひの村つ木の間も〇やか〇
軒端もはつかに見えし末は浪打磯へさしいたるすすき高からすひくからぬ岡野の西濱邊に〇〇〇〇世ごふりた
る神の林もゆへありけなるさま所ははてもあらぬ海つら嶋の邊にあひきする海士のいごなみ 沖津船も帆にあら
はれあるは遠の高根にいさよふ月は東のまごにさしいるけはひいふばかりなし されはかれこれまのあたりのけ
しきを八景ごやらんになごご兄の子何かしのいひたるにまかせ かしこはそれか爰はかくもやご八つの數ごし
ゑせ歌をさへ添てける いごはらふくるゝわさならぬ

しかはあれご その所の勝景をかそへいはんにはかつはおほん神の御心にもかなふへくや こと美當社へ奉納せ
まほしご子にひごしき何かしら打つごるものし侍るにまかせぬ

小中野落雁

次 常

霞たつ野田の田つらを遇かてにやすらふ雁やかへさわするゝ

菖蒲田夜雨

行さきはいつこあやめもわかぬ夜に〇〇〇〇雨の音をひまなき

種市嶽秋月

立のほる高根を名にも秋の夜の月やうへなき光見すらん

小田平暮雪

暮かかる空ごもわかつて積りにし雪の光にむかふ岡野邊

來迎寺晚鐘

紫の雪路をつるの名にしごこかねてや告る入相の聲

地藏堂夕照

ごころ得てさそや光もにほやかに入日を法の庭の夕はへ

蕪ヶ島歸帆

風よごむ島根をさして泊ごやつれしほかけも近き友船

沼館村晴嵐

立きほふ霧吹をくる嵐にも残る煙や里のにきはひ

○

五戸 八勝

荒木田 舎 暉

市川打魚

もしほたれすなごる浦のあまごころもほすひまもなき市川の里

三木雲雀

あむくまの松にはあらてみごり添ふ三木の末野にひばりなくなり

轟木神碑

ごころきのちひきの神のいにしへもつたへて久し道のいしふみ

樂師躑躅

いはつつしほさげにこそはたてまつれ櫻にならぶ花もあらねは

葛谷温泉

谷の名もつたのはかつら秋くれは色にいてゆの里そにきはふ

七崎古佛

みほさげのふるきためしをひく駒にはこぶたききも七崎のてら

木崎牧馬

霞立つ木崎のまきの木の間よりあされる駒のあごぞしらるる

十和田湖水

湖の十幡の山やそくくらんそくく十幡の山の湖

三戸八景

黄金橋の夕景

暮かけて往來の人はいそげともしばしたゆさふ夕日影かな

古城の秋月

秋風に霧吹はれて城山の松の梢をいつる月かな

菊地東江

龍川瑞苗

龍川寺の晚鐘

波の音にひひきあひてや熊はらの末よりつたふ入相の鐘

早稻田の落雁

馬淵川秋風寒く吹なへに早稻田に宿をかりの鳴らん

龍ヶ口の奇壘

龍ヶ口峰の松風波のまにその世のむかししのはれにけり

箕ヶ坂の夜雨

箕ヶ坂峰の松かせ音たへて雨になり行く夜半のしつけさ

名久井岳の暮雪

名久井岳高根に光あらはれて夕暮しろき雪の色かな

猿巖の紅葉

露霜の手しほに今はそめなして峯のもみち葉錦なしけり

白銀八景

三島大太鼓

海の幸いのる三島に打つつづみ浦々かけて響きわたれり

砂森晴嵐

砂森の晴る、嵐を追手にて千船百船今かへるなり

江鈞木 瑛

松尾 可 權

三齋 市 森

栗谷川 光

坂本 忠

竹村 竹 洲

兜島鷗

鳥羽玉の黒きかぶこの岩の上も白きかもめの住みどころなる

鮒漁船

見渡せば千船百船帆をあけて競ふや沖の鮒なるらむ

渚松明

百ふねの浦にかへるをまつの火は空をもこがす光なりけり

清水川水汲

いさぎよき泉の流れ清ければ水汲む乙女むれ集ふなり

秋葉盆踊

庭廣き所もせまく打むれて踊る手わざの面白きかな

賭博岩

人訪はぬ磯邊の岩は世にかくす手わざあらそふどころなりけり

淺山月霜の八景の歌は「白鶴」も「糠部五郡史」もこれをあけてあるため最も知られてゐる。橋本波安、荒木田舎暉、それに三戸八景はこもに五郡史の載せてゐるものである。あこの二つ、白銀八景は三島神社の献額にあるが詠者はわからない。額は任谷卯之松の納むる所となつてゐる。石橋次常の八景の歌も龍神社の献額にあるものでこれには「延享五戊辰歳七月十九日」三年月が明らかになつてをり、八景の歌では最も古いものゝやうである。石橋次常は多分西町屋一家のものであらうが詮索をしなかつた。その頃の歌人に見えてこの外にも次常等の「るんぶり」の歌が傳はつてゐる。

○

豊けさはむかしを今に傳はれて杵賑ふ奥の糠部

源

次常

○

糠の部に昔をうつす杵歌久しかるべき例なるらし

紀

則明

○

御神樂の音にもかよひ夜深きにむれつ、祝ふ杵なるらん

藤原

長時

○

笛の音に空面白くほの明て杵摺込るいや聲かな

源

茂胤

○

君か代を祝ふ杵のふる唄の拍子も七五三の名に叶ふなり

源

久元

これらの和歌は「杵摺の大意」などのあこに「附録」にして俳句にも添へてある。俳句の方では

杵の句 私大の句 混題

入る時は鞠躬如たり杵摺

乙

因

猶祝ひ増せや杵の榮家聲

志

厚

私大元日

はつ雞や餘所の二日は何こゝろ

粟津義仲寺住(菅原)

重

厚

南部大久しき代々や明の春

東都楓臺

互

來

南部大元日二日三日かな

白

郷

芙蓉したしく鷹の旭に明の春

私大歳暮

○ しの袖さめて壽く古禮かな

渡政輿に『渡東調和歌集』があるが「予もこより歌よむこを學ばざれども讀書のいこまおもひ出るにまかせて口す
さみけるを書集けるなり、見る人心せよ」を斷つてある。

明治改曆のこきよめる

○ 君が代の春なかかれ冬のうちにはやくも年の立にけらしも

○ 春かすみかすまぬ山もなかりけり花なき里もあらしこそおもふ

○ おもふこ書もつくさぬ玉章やかすみかくれの雁の一つら

○ 階上の山の白雪春かけて花こ見るまで降つもりけり

○ 日の本のやまこのさくら咲にけりいろも匂ひも昔なからに

○ 迷入るみちをはみちのしるへにてしらぬ山邊の花も見てけり

迎 月

三 峰

○ 春の日の長きゆかりの色に出てさきてけらしな藤なみのはな

○ うは珠の夜の山路を越來れば人戀しけに鳴くほここきす

○ 一聲は軒のあやめのあやなきに山ほこきすいつち行らむ

○ なく蟬の聲めつらしく聞ゆなり一しきりふる雨のはれ間に

○ こきはなる松から島にうちさひてをしまが崎に月そかかれる

月照古梅

○ 葛城や久米のいはし朽もせて幾夜か月のてりわたるらむ

○ 千歳ふる都留郡にさき匂ふ菊は盛の久しかりけり

○ 打よする波さへ氷る冬の夜をいかにぬるらむ池のをりこり

長 狭 山

○ 冬の夜の長さの山はふる雪に松のあらしもうつもれにけり

青柳のいごまるる日のよりよりにくり返しけり世々のふるこころ

○くれ竹のうきふししけき世なりもまたたなよ竹のなよやかにこそ

○難波江のよしやあしまを行舟のかにもかくにも風のまにまに

○うきなきわか日本のしるしに三鎮りけり不二の高根は

○玉ほこの道のなをきもまかれるもふみみてこそはしるへかりけれ

政興は文化八年二月二十五日に八戸惠比須屋の十二子に生れてゐる。惠比須屋は今の三日町の西角の家で商家であつた。そのために櫓横町から伸びた通りをこゝから北は惠比須屋横町と呼んでゐた。幼名を長三郎といつて九歳の頃から學を好むこゝ甚しく兄正矩が盛岡の商家小野氏にこれを托したが太平記なきのやうな戦記類ばかり讀みしきりこ江戸に出るこゝを願つたが許されぬので八戸藩士駒井某に相談して江戸の古賀某に添狀を貰つて出芳野金陵の塾に學んだ。天保二年の二月であつた。十一年二月には淺草三筋町で塾をひらいたが弟子某のために弘化九年下總飯岡岩崎藩主佐竹侯に仕へたが、安政四年に佐竹侯が宗家を襲ぐこゝにも政興も隨つて四十六石から百石になつた。尊王論の起つた際は尊王を説いて藩論をこゝに固めたものであつた。明治四年藩が廢されてからは東京に出たが十五年の頃脚氣に罹り二十年の九月七十七歳で歿した。政興は正興も書き字は子禮、東嶋又は蓬室と號し書に巧みであつた。『老子集説』『中庸集説』なき一百餘卷の著があつて和歌は全く其餘技に出でたものらしい。嘗て八戸侯が藩儒をえらぶ時

政興を擧ぐるものがあつたけれども政興か町家の生れであるこゝが士分のいさぎよしとする所でなく遂ひに別な學者を用ひるこゝゝなつた。佐竹侯に仕へて一せ展墓のため八戸に歸るや隣藩の交誼から國境まで政興を出迎へねばならなかつた上に一日殿中で政興の四書の講義を聴くこゝになりその造詣と識見とに今更らの如く政興を聘しなかつたこゝを悔いたさいはれてゐる。政興の書や和歌などは八戸にはあちこちのこつてゐる。長者山の野村軍記の彰徳文も政興の撰ぶこゝである。

政興の生家惠比須屋の筋向ふに河内屋文助の家があつたこゝになる。文助は橋本波安で歌人として名のあつたものでは三戸郡隨一であつたやうである。

河内屋文助の家は河内屋八右御門の別家であつた。河内屋は上北郡三澤村平沼から八戸に出て來たためはじめは平野屋と呼び十三日町の北側に店をひらいたが、天明六年に八日町に居を移して河内屋と號した。この河内屋の三代目八右衛門の子に八右衛門昭義があつた四代目八右衛門である。文政五六年の頃に生れ幼名を長次郎、八郎兵衛とも呼んだがあゝで八十郎と改めてゐる。文政度の野村軍記の御改法に「町人が右衛門を稱するは不屈であらう」といふ御咎めを受けた爲であつた。八十郎といふのは代々の通稱として來てゐた名であつた。この八十郎は至つて多趣味な人であり、その子五代目八右衛門は三十五歳の短命で終つたが、この四代五代に亘つた間に蒐集した書籍が數千卷現存するものだけで五千餘卷を數へられ史傳本草國學から歌學繪畫に至るまで廣汎なものである。號を櫻園といつて和歌を福岡町香稻荷の社司小保内孫陸に學び、俳句もこの人に就いたと言はれてゐる。文助の和歌も此處から哺まれたのであつた。文助の家があゝでその本家と相疎隔したために其家に入出入しなくなつてからは詠草が纏まる福岡までそれを持つては出懸けて行き教を受けて倦むこゝを知らなかつた。あゝで本居豊顯に私淑してその風を享くるこゝが多かつたが、これも豊顯と八十郎との關係が多きをなしてゐた。八十郎は明治十二年十二月十三日に歿した。文助は天

保五年正月廿五日に生れ明治四十一年三月九日に終つてゐる。橋本八十郎の詠むところ

春趣

水鳥の青羽の色やはるの海の玉もの床にいをねせむかも

○ 立かへりみかきあふてや玉くしけあけて春てふ今朝の初空

○ 玉かつらたえぬ月日いひながらししのまぢ目はた、一夜のみ

○ いまなみはる立こも白梅の咲くてふ花にかゝる霞か

○ 霜しくれたゆるものからもみちはのあかきこゝろはあらはにれけり

○ ともすれは庭のおしへにもるここの心をせめぬひまなかりけり

父はうち母は抱へてかなしむをかはる心こ子や思ふらん

末子大三郎の病弱なるにあたへて

なでしこは同じ花には匂へこもおくれて咲くはあはれなりけり
などがある。波安のに

旅 春 雨

春雨のふらはふらなむさして行く梅の花笠ありここそきけ

夜 思 花

明日もまた見るへき花を思ひ寝の夢にもこめて行く心かな

燕

つはくらめいつなれそめて春雨の古きのきはのつまに住むらむ

里 卯 花

さくら咲く流れて卯の花のしからみかくる玉川の里

更 衣

世の中の人の心の花染もうつれはかはる夏衣かな

夜 落 葉

木の葉ちる音を時雨のうたかひはのきもる月の影にはれつ、

落葉混雨

くれなるのふり出たりこ見るばかり時雨をそめてちる木の葉かな

月前秋興

あきのよの月のひかりにみかかれし露の白玉緒にやぬかまし

雪晴月出

ふる雪にかくれぬものはあらぬよに月をのこして晴るゝ空かな

煮茶

琴やめてこのめを煮れば釜の場のおこにも通ふ峰の松風

美人

雲こなり雨こなる世はしらねこも匂ひ身にしむ花さくらかな

里

世の中はからしこおもふ心にも住めは住まる、階上の里

詠史

すめろぎのあまやこりせし笠置山なご守る人のすくなかるらむ

この門に集つたのに浪打磐彦、橋本理宇吉、駒嶺賢治、小井川元吉、武尾猛三郎、川村末吉、などがあつた。

柳

打なひく姿に露の玉かつらうけてゆかりにもゆる青柳

浪打磐彦

河春曙

川風も絶て流る、浪の音ものこかにかすむ春のあけほの

江上春月

風なきてかすむ入江の浪間よりのこかにいつる春の夜の月

海邊眺望

見わたせは浪路のはてもなかりけりそらより空につく海はら

首夏

くれて行はるの名残のさくら花ちりはてぬ間に夏は來にけり

蚊やり火

竹むらの奥にも賤や住ぬらん蚊やり火のけふり立のほる見ゆ

閑居菊

こはるへき友なき宿は咲きにはふ菊見る秋もひこりきたれぬ

初雪

まごの戸にさわくすゝめにおそろきてみれば積れる今朝のはつ雪

○

河花

谷川のかへらぬ水に影見えて心のこまる山さくらかな

○

咲盛るかきりなりしかきのふ見しめに忘れぬ花のおもかけ

○

訪ひこはれこもに老ゆく末かけてちかひしかひもなく涙かな

○

雲雀

鯨の野や海原かけて大空に心ひろくもなく雲雀かな

小井川元吉

古戦場

駒嶺賢治

橋本理宇吉

矢さけひの音かききは比叡おろし打出の濱によする白波

關落葉

守る人もなき世となりぬは、かりの關は落葉にあまたへしより

寄時雨述懐

はる、かこ見れば時雨る、神無月空さためなき浮世なりけり

夜春雨

はるさめのふるこもしらぬさよなかに夢おころかす軒の玉水

折にふれて

よし人は蟹のあごをはたさるこも踏みなたかへそ敷島の道

○

首夏

武尾 猛三郎

きのふまで花にいこひし風の音もしたしまれぬる夏は來にけり

社頭新樹

みやしろの木々の若葉のしけりあひてこ、ろ涼しき鈴の音かな

谷川

ながれてはうき世に出る谷川の水の底にも月はすみけり

山雪

おもひ入る人しなればあし曳の山はみ雪にあごを絶えたる

炭竈

奥山にたれすみかまの煙かもやかても雲こ立のほりつ、

旅愁

うつゝにはあふよしもなし草枕夢みるたひになくさまれつ、

○

柳

川村 末吉

願はくはわれも柳になりなましく春かけて若かへるへく

天壤無窮

天地のむたかきりなくさかえんこのらせたまへる神の國かな

さきの八戸藩王子爵南部榮信未亡人麻子の方を中心にして菊園會といふが成つたのは明治四十二年の頃からで、その頃八戸地方の和歌に志あるものゝ殆んすべてがこれに集まつたやうなものであつた。しかしこれは單にこれらの人々の詠草を集めて麻子の方の和歌の師である田中鏡子女史に送つて批評添削を乞ふといふだけの機關といふに過ぎなかつた。けれどもこの會が橋本波安歿後の八戸地方の和歌に一つの生面をひらいたものであつたのに惜しい事には大正二年麻子の方の逝去となり、今の子爵夫人證子の方がこれに代つて主宰せられたものゝ、二年ばかりで選者證子女史が亡くなつたりしたので、その後を全うすることが出来なかつた。かうして選んだ歌は新聞「はちのへ」に載せられて久しく眼にふれたが今はまつたくその事さへ無くなつた。こゝに集まつた人たちには松原秀男、坂本榮教、鳥屋部虎太郎、枋内八太郎、佐野貫一、駒嶺賢治、小幡茂周、及川恒道、西村宗博、鈴木浪江、漆澤好方、藤井鐵之助、笠范忠作、武尾候、橋本復三、神山文次郎など、女では南部かつ、中里りう、奥寺貞、遠藤愛子、小山田芳子、大川

菊子、和田豊子などがあつた。

南部麻子の方の歌に

○ 常緑なる松をみぎりにうつしうゑて千代も變らぬ友をみるかな

池のくに神さひたてる松が枝を千代のやまに風も吹くらむ

立 春 天

○ ざりかなくあつまの空のほのかにも霞むや春の來るなるらむ

早 苗

賤か女か千まち山田におり立ちて取る手ひまなきつゆの玉苗

新 竹

かは衣けさぬきすて、竹の子のふしにも千代の色は見えけり

夏 瀧

涼しさをおりて出せるぬのひきのたきのもこそ夏なかりけれ

秋 田

○ 千町田のわせもおくても色つきて穂なみゆたかに見ゆる秋かな

くれ竹のふしもすくなる真心を行末なくわれはたのまむ

富 士

しきしまの大和の國のしつめそこ仰くも高し富士の神山

曉 天 鶴

雲もなくはれたる空に舞ふ天鶴はいく代はかりの年をへぬらむ

などがある。

故人の歌に

梅 雨

浅間山烟も雲に立そひてはる、まのなきさみたれの空

樓上夏月

小簾まきてひこり風まつ高殿にまつさし入りぬ夏の夜の月

○

曉 春 月

ほのほのこ月影かすむ庭の面に花の雪散る春の明ほの

露 底 虫

○ おのかよもしはしこ虫の鳴くならむ秋ふかくさの下葉に

兔

うきここの聞えぬ山に住みながら何に兔の耳を立つらむ

西 村 宗 博

及 川 恒 道

鈴 木 浪 江

門 柳

我門の柳のいも春の日もこの頃長くなりけるかな

○ 月前落花

花ふふきうつまきあくる谷風に影くもるなり山の端の月

古 寺 蟲

まうてくる人なきのへの古寺の佛の御手にこほろきの鳴く

○ 霞中春月

薄きぬに似たる霞をこほりきて眠るかこき春の夜の月

冬 竹

君か代のためしにひかむ千代かけて各枯しらぬ庭の吳竹

○

夜 花

咲花の色は見えぬ山さくらかほりうれしき春の夜半かな

田家夏月

小山田の蚊やりの煙り末きえて軒もる月の影ぞ更けたる

藤 井 鐵 之 助

佐 野 貫 一

漆 澤 好 方

武 尾 候

水

岩間もる清水のめくみ朝な夕なこゝろにかけてくまぬ日そなき

蜂

をちこちの花を尋ねてみつ蜂のいこなみもなほいこまなの世や

月前女郎花

照る月をかさせる露にやこしつゝあかぬ姿の女郎花かな

今在る人たちのうちでは菊園會の仕事を主としてやつてゐた松原秀男などが優れた歌を詠んでゐたやうである。そのほかにもかすかすありはありながらその詠草が手に入らなかつたので次の數氏だけのをか、けて現況を推したよりとする。

○

霞中春月

うちかすむ月に笠さへさしそひて雨ちかけなる夜半のしつけさ

梅 雨 晴

さみたれのふりし日數をかそへけり今日のはれぬこ日記にしるして

秋寒（八戸大火のありし年）

來む冬をいかに過さむ秋もなほかはかり寒きかり小屋にして

海 寒 月

あさらしうこめく岩に霜見えて月さえわたる北の海はら

松 原 秀 男

歳暮

埋火のもこに眠れる兒猫のみひまありけなる年のくれかな

○ 大石良雄

○ 月花にうかるさ見せて思ひこしうらみを雪に晴らしつるかな

○ 山家新年

何こも昔なからの手ふりもてゆかしくも年をいはふ山里

梅雨晴

梅雨の雲間をいつる日の影にまつはれ行くは心なりけり

折にふれて

○ 萬代をよはふもあかすいかにしてむかへまつらむこのかちいさ

○ 天の下青人草のくらふへきものたらくめよ豊受大神

○ 老ぬれは世のいさなみのなきまゝにむかしかたらふ友そまたるゝ

釜 范 忠 作

坂 本 榮 教

鳥 屋 部 虎 太 郎

○ 春の霜よへもふりぬこ朝またき人立さわく里の桑畑

○ 杉むらに夕日かくれて山路行く汽車ぬちくらくなりにけるかな

○ 昨日今日こさせるまゝの枝折戸のあたりに深く木の葉積れり

霞 中 月

○ 咲き匂ふ花の雲間を分け出てゝをのへにかすむ春の夜の月

新 竹

九重のみ庭に生し若竹は一ふしここに千代こもるらん

海上風靜

○ 嶋山の松のこゑさへしつまりて風なきわたる海の面かな

刀

○ みるにたに寒けかりけり遠つ祖のいさをを立てし太刀の光は

飛行機

○ あれよとて仰く間もなく飛行機のかげは雲井に消えにけるかな

奥 寺 貞

大 川 菊 子

限りある身をは忘れて限りなき道に入らむと思ひ立ちぬる

○ 我命あらむかきりは姫小松おほしたて、む庭もせきまで

○ 東の間も儘ますたのます分け入らむおくかしられぬふみの林に

○ 春

たつね來る友もなければおのつから咲くにまかせて花を見るかな

○ 夏

夕立にあつさは流れさやかにものきははる、夏の夜の月

○ 秋

おく露の玉より白くさきいて、匂ひこほる、御園生の菊

○ 冬

山おろしやみにし窓の夜はふけてふみよむひまにつもる白雪

明治年代の末葉から新派の和歌も頭を擡げて來、下野白果、藤原元などの『北響』のあこ、海野篁等の『アマチュア』戀川なぎさ、川合染之助、菊地夕霞等の『木立』その頃になつて金田芳香、古川爛醉等の『アボロ』それから『現代』こいふが海野篁、東光、常夏幸夫、黒澤林泉四人の同人雜誌として立つたりしたが、それらはいづれも同好の間の動きであつて對世間的には大した影響を持たなかつた。大正九年一月『奥南新報』に『奥南歌壇』をつくつてから初めて

八戸地方といふよりは三戸郡の新派の歌が著しく進展した。それは『はちのへ』に據つてゐる菊園會に對する若い人たちの一つの時代的な動きを見れば見られぬこも無かつた。奥南歌壇は東光(菊池増三)黒澤林泉(黒澤精一)戀川なぎさ(小井川潤次郎)が主宰して行きこれまでには顔觸れの違つた若い人たちが續々現はれて來た。

この歌壇創設について、久しく沈黙してゐた下野白果が再起し、盛壽川、名久井遊歩、木村靄村など、こもにその年小中野村に『くれなる』を組織したが、遊歩の死も、もに滅び、このあこへ大正十年の七月海野篁、盛壽川等の『歌聖』が結ばれたがこれも久しからずして終つた。更に若い人達の『流星』が『塑像』を改題してゐる、これと同じ頃に『蒼求』が今までの多くのもの、中からその頭目を集めて大正十三年の新春に起つこもになつた。これは東光、海野篁、黒澤林泉、下野白果、根市木陽、福田晨星、盛壽川、戀川なぎさ八人の同人を中心になつたのであつたが、そのうちの根市木陽(瀧澤萬吉)が第二號の原稿を手許においたま、病遂ひに癒えず共に葬られるまで爲すなくして終つた。

『奥南歌壇』はいま黒澤林泉の手で持續され『塑像』は大正十五年に解散し、そのあこで『土甕』が生れたがまだなすこころが無く、現在では海野篁(稻垣浩)黒澤林泉、盛壽川(盛壽)福田晨星(福田豊重)戀川なぎさ、三浦惣三郎、藤本浪夫(河野元太郎)など、そのほかに大正十三年頃關東大震災の後郷里に歸つた島守寒光(島守定光)が下野白果こもに『はちのへ』に作歌を發表してゐるなどである。これらのうち數氏の作をつらねる。

○ 『十首』

下野白果

○ ひこもこの落葉松の樹さへ雪にいたみ庭うこまれつ見る日すくなし

○ 心寄々見るもの、なき庭なればひこもさ松のいのちかなしも

○ かすかなる夜風に耳をすましけりなやめるいのち靜かにあらなん

○ 血をわけし現し子われの寂しさを知らざる母と爐邊にるより居り

○ 木々の葉の鳴るをきつゝさね床にうつし身さむくしこね重ねつ

○ いさゝかの風さ思ふに家うらの葡萄の葉鳴り今宵しるしも

○ はゝそはの母に誤まり思はれて吾がむらぎもの心たかぶる

○ 雪に埋れ葉の秀も見えずあけくれの慰めに見し青き笹はも

○ 水の面に小波すなりひそやかに草あをきあたり鳥水漕りしつ

○ 障子立てゝ部屋はくらかり炬燵べにひそまり居れば心おちつく

○ 「霜」

根 市 木 陽

庭つべの樹々のこすゑの影どころ朝どき寒く霜残る見ゆ

○ 干竿に懸け忘れし吾子の着物いたくも霜のおきてぞありけり

○ 肩びえのせまり來おほゆ夜ふけつゝをりをり庭に落葉のまろび

○ 明けやらぬ宵まだ暗き庭の面しろきひこころ霜にやあらむ

○ 燈火の影ほのくらし河岸にせまる夕べの冷えに姉をいためり (姉)

○ ま白なる胸腹見せて鷗鳥我が近き上飛びまはりけり

○ 雪明り夏近からんアカシヤのさゆれ木の間に月見出でたり

○ けしの花咲き出でたれど今日もまた雨さなりなば散りはてぬべし

○ 夕日さす木肌ぬくみか毛蟲の子群るゝを見れば秋は深かり

松かざり飾りつゝあれば庭つべはほのほのミして月あかりせり (大正十三年歲暮)

『雜抄』

稻垣浩

○ 日にはえてゐる燃えさかる葉鶏頭わが立ちあつゝ顔のほてれり

○ 冬の夜の星のひかりをたよりつゝ物さがしをれば身はひえにけり (以下二首路上にて物を探して)

○ 天にゐる星のひかりの青けれど夜路の上に光さかぬ

○ 遠山に雪かも降りしぬばたまのやみ夜の空にすさむから風

○ 眠る子を見むミ手燭をさし擧げて蚊帳をのぞけばその顔の見ゆ (以上大正十一年作)

○ 雨風のはげしき丘に兒を埋めてわが身しごどに濡れて來にけり (兒を葬りて大正十二年作)

○ 部屋の灯のさどるそこの茂りにもきりぎりす鳴けり見れば居るべく (庭を見つゝ)

わが腕によりて眠れる兒の顔のま青きまでに月は冴えたり

○ 高槻のこすゑたどるにその盡きてま青き空の目にすみこほる (大正十三年作)

○ 雪の上に冬の日はやもかたぶきぬ歩まざる兒が手をひきわが行く (大正十四年作)

○ 逃けてゆく蚊を目に追へば部屋隅のうす暗き方にまぎれて飛べり

○ 夜の時雨はらゝ降りつゝほのかにも空あかるきは月のゆるかも (大正十五年作)

『歸去來』

黒澤林泉

○ 井戸の邊にけふ日影のさし來れば顔をぞ洗ふささくあるがに

○ かすかすのここの空しさ知りそめてなつかしまるゝ今日の日影や

○ 山椒の若芽を噛みて思ふこころなしこいはめや春山に來つ

○ ゆくりなく草生のなかの馬の糞をわれは踏みたり武者龍膽の花

往きかへり路べに見れば咲く花の名は知らねどもあはれがりつ、

○ 咲きむる、紫苑はしたし朝々を置く霜しるくなりけるかも

○ 灯面ひおもてに傾かしぐ白菊くまもあらず底寒き映りは眼を凝らさしむ

○ わがこゝろしみらに重し花瓶の枯れにし花をかへず久しき

○ 夕軒に集あがきいこなむ蜘蛛くまのひそやかにしていちづなるかも

○ 夕風に胸毛吹かせて歸り來る雌の雄の鶏はうち連れにけり

【山居】

盛

壽

○ 松林うねりうねりて行く道のたえなんこしてまたあらはる、

○ 穗すゝきのゆれいちじるし野のはてにたてる一つ家さりもかこみて

○ 木下路ちらほら見ゆるほす、きかけもおほろに夕ぐれにけり

○ ほろほろ木の葉の散りくる音すなり夕づく家に酒くみをれば

○ 岸べなる野茨の軟葉ゆらくこゆる、がま、に日かけみだる、

○ 風吹けば香のけむりのみなぎりにかなしき部屋に人聲のなし (二首「はらから」)

○ 後の世に生れし我の近よりてみ祖おぢのかたみ見るにかしこし (寛兆の遺物をみて)

【く、たち】

島 守

寒 光

○ さらさらこ小篔の鳴るを聞きながら雪解のみちを遠行きにけり

○ 雉子笛を吹かむこおもひつつ見やる櫟根くわねまここの雉子の歩みてるにけり

○ つばらには何ともわかずはつはつに莖立つものゝこゝだあるかも

○ 海なぞへ南に向ける丘なればはやも福壽草の萌えてありけり

飼はんもおもふ久しけれもいまだ飼へず隣家のカナリヤを聞くにしたしき

「穂芒」

河野元太郎

○ おもむかひ人親しくものをいふ息こそみゆれ月夜さむきに

○ ひごりかへる野のさびしさやすき穂のそよぎかすに夕つきにけり

○ この吾に抱かれ寝ねるはうれしきか弟はかたく胸にすがるも

○ 眼の見えぬ乙女子あはれ頸すぢにつけし白粉のまばらなるかも

○ こころにも言はねき母が心のうち思ひはかりて嘆けかひにけり

○ ひたこゝろあかしは兼ねつせつなさをこらへてこの夜たち別れ來し

○ 一羽鳴けばつぎて鳴きかはし籠のひわ鳥は鳥どち戀しかるべし

○ 若葉山すみこほり鳴く蟬のこゑ湖にひゞきて晝靜かなり (十和田湖にて)

○ けだものゝ兎の胃の腑割きしかば草の匂ひの液こほれける

○ 顔よせて嗅けばほのけき花の匂ひ鼻の病は癒えたるらしも

「花鳥」

戀川なごさ

○ 土ほこり足袋にしるしも街裏の柳の花は伸びすぎにけり

○ 朝の日のきらきら光り波の上にかごめの鳥のむらがり見ゆる

○ 谿底に生へし樹なれば杣の花さへ見せて匂ふなりけり (大正十一年)

○ 安比川の川原の畠碑ばたけ曇り日の風さむざむざ渡る (淨法寺途上)

○ かみなりの鳴りこゝろきの下にして田の面をわたり白蝶飛ぶ見ゆ

○ さぞ落ちしうぜんかつらの花の上いま新しく落ちしが鮮か

秋あらし吹き出でにけり田の畦の柳しるしもよ白銀のいろ

朝霧の雨よりはけしき中にしてわが手折り來ぬ濱菊の花を

障子の外はたゞちに海のひろがれり千鳥のこぼる羽音がきこゆ (大正十四年)

簷下に生ふる杉菜をしけらせて朝な夕な露を見るかな (寓居)

鶺鴒の霜踏む音の小さけれどちひさき身にはひびくなるべし

鮫の野に生ふる小松の年をかぞへいゆきなれつゝ心恒なし (大正十五年)

第二 俳 諧

寶曆八年の三月、藩士船越三藏恭康が八戸藩主南部遠江守信興に俳諧の系統の奉つたことから八戸の俳諧が萌したと言はれてゐる。その俳諧の系統といふのは『俳諧相傳系統』といふものであるらしく、それには

『逍遙軒松永貞徳。幼名勝熊 別號長頭丸 延陀王丸 明心居士 花咲翁 山本西武。九郎右衛門尉 高瀬梅盛。太郎兵衛尉 伊藤信徳。助左衛門尉。梨柿園 植村信安。甚左衛門尉、掉歌齋、凡竹子 山本掉鶴。庄次郎、頼流

堂、光桂子 船越掉佐。三藏、頼月堂。』

こある。船越掉佐は三藏恭康である。あこで牛言堂互山と號した。この恭康のまきは小笠原氏であるが、閉伊郡船越村を領知してゐたために船越を姓とした。恭康は正徳三年閏五月白康の二男に八戸で生れ、享保十年船越氏康壽の養子となつたが、幼時から穎悟、はなはだ學を好み十四歳の時に四書の講義を滞るころなくしたといふ程でその頃神童と呼ばれてゐた。四書五經は當時本壽寺の隣地に在つた玄中寺の鐵作和尚に就いて學んだ。この玄中寺はあこで滅びはるか後になつて下組町に再建になつてゐる。この寺址から掘出された鐵作和尚の碑は、今南宗寺の右の横門を出て右へ折れた本堂の左側にあたる塀の外の杉の樹の根元に建て、ある。尺三寸に尺程の角石の正面に『臨濟正宗三十七世當寺二世鐵作行肝大和尚禪師。』左側に『寛延四辛未年十月二十八日。』右側に『三世普門建之。』裏は石がそけて判明しないが『川右屋。』『助二郎』と讀まれる。兵學は藩士奈須川光命、飯岡種春、中里正康、山崎古考などから學び、享保二十年には、光命から徒鞍流馬術、元文元年には、種春から川崎流柔術の免許を受けた。元文五年の九月、養父に随つて同志の者數人藩主廣信に極諫して罪を得、離縁になつたが、三年を経てこの咎は赦された。しかし恭康は仕官せず諸國周歷に出かけた。齡二十九歳であつた。延享二年種春から丸流兵法を、その四年、古考から新當流槍術の免許をうけた。寺下應物寺の僧律要の許に通つて教を享けたのはその以前のこゝであつた。京都に出て速水房常河野通清等に就き有職職原抄や韻學を修め、寛延三年六月にその免許を得、江戸に來て修學してゐるうちに、藩主信興に召出され諸藝指南役を仰せつかり故山に歸つて來ることになつた。それから吟味役となり、明和四年には物頭格となり、更めて家中藝事師範役といふものになつた。この以前越後流兵學の免許を加治景通から享けてあるので、さきからの甲陽流兵法を併せてその師範となり、槍術柔術砲術馬術から儒書律令なぞ十二箇條の指南をし且信依の侍講となつた。數百の門弟が常に堂に一杯で寢食の遣さへ無い程で、博學多能未曾有と稱せられたが、その最も長ずる所

は兵學で、甲越二流の陣法はその奥底を究め、明和六年八月には上杉流の道統を嗣いだ。隠居してから髪を下ろし互山と號し、養老の月俸を給はつて餘暇あれば禪機を尋ね悟道に入つた。のち中風症に罹り手が使へなくなり言語が塞澁したが安永七年六十六歳で歿するまで講書をこどもなかつた。墓は類家の新寺今の心月庵にあつて、『義川院悟山潛流居士』とその法名を自然石に刻んである。恭康に數人の子があつたが皆早世してしまつた。明治二年二月、藩主信順が、藩祖直房の靈を長者山に祀つた時、中里覺右衛門正康がこの恭康をその左右に合祀した。或者は船越三藏恭康を八戸藩古今を通じての第一人者であるを賞してゐるが、或ひはさうかも知れなかつた。和歌俳諧詩文の末にまでも通じ俳諧は貞徳派の傳統を襲いでをり、この傳統を信興に奉つたのであるが、信興が俳諧に遊んだ形迹は無いやうである。

掉佐がのづりを享けた山本掉鶴は田名部の人であつた。掉佐の俳諧修業については判明しないしその句も殆んど傳はらず、僅かに『俳諧風雅帖』が次の一句を載せてあるに過ぎない。

君が春四方に五つの道ひろき

掉佐の門に掉雪、掉之、掉關などがあつたやうである。掉雪は北田氏で玉桂と號した人であらう。玉桂は觀魚館と號し鑑魚館とも書きあこで白仙とも號してゐる。この人の手記である『短歌行』に

稻妻や睦まじからぬ契りやう

月の出しほは蟲のきぬぎぬ

○

重九

心靜かに亡母の喪をつこめ又忌中御免とあればこもに重陽をいふ。ああ太平の代ありがたきころなり

手向残ありがたの世や菊の酒

掉佐先生の嫡男追悼

世の水に假りの遊ぶぞ法の月

など、いふがある。重九の句は寶曆十一年に詠んだのである。この玉桂の獨吟の歌仙を掉鶴の評したのもある。その中に

分け登る道や霞の山櫻

永き日の丈け長ふなる藝

物申のしばしおくりも燕

見上る顔江拾ふ急雨

暮の會に月が出て來て桂馬道

はねればやはりはねる蟲こり

二三年鹿に親しき庵の主

樂に事かき谷の名を算む

折々は雲の帯こく風の音

飛んで火に入る父は曲者——』

この表紙に竹に雀を描き

時雨や竹にこぼるゝむらすすめ

もある。

『俳諧五十韻』といふのは掉佐が點をして掉鶴がその評をしてゐた。

散墨をすこしづつ摺る寒さかな 掉 之

筆置く音も冬は堅まる 掉 雪

山々は已み松の茂るらん 掉 關

石も賢き暉麗なる庭 掉 之

飼猫も今日は除きし池の水 掉 雪

子供遊びの竹馬嘶く 掉 關

丸い事准て見れば二日月 掉 之

廣野の蟲も月の程の戀 掉 雪

掉雪の句につきのものもある。

寒聲や老の寢ざめの節細し

掉之は『通稱山崎勘太夫號哥仙堂仙又東仙』と風雅帖はつぎの句をあけてある。

待宵は石ほどびびく落葉かな 掉 之

掉雪のあこに『通稱北田貞右衛門 一柳軒東林舎』と風雅帖がしるしてある白郷があつた。

蕪島や雪より雪の飛ぶかもめ 白 郷

この白郷や玉桂即ち掉雪などこにも野中氏白畫も掉佐に師事してゐる。白畫は壽老庵、方尺堂、あこで星積堂と號した野中頼母である。

家建る繪圖に春日の匂ひかな

初蝶の芥に下りて白若し

一寸の馬も霞の野末かな

鶯や生れ訛の京の水

蹴毬を置し軒端の春日かな

若芝や盃洗ふ御垣守

掉佐の傳へた系統が貞徳派の主系であらうと傍系であらうと、兎に角この派の俳諧がここまで伸びてきたことだけは明らかである。

天明の頃になつて藩主伊勢守信房が文武の道に精しくまた俳諧を好んだ。その御側御用人である窪田半右衛門が、雪中庵三世蓼太の高弟で清風軒とこなひまた楓臺と號してゐたので、信房はこれを師として俳諧の道にはいつたわけである。窪田半右衛門は別號を互來ともいつた。それで信房は蘭長、白隼などと號したがあこで互扇樓畔季を號した。

畔季は江戸に住むこが多かつたために交友が夥多あつた。平沙、完來、桃隣など、こりわけ江戸の町醫であつた熊谷徳元とは親しく、侍醫としてこれを招いでは俳諧を談じてゐた。徳元の俳友である星霜庵白頭が畔季に親しくなつたのもそのためであつた。徳元は貞徳派の名人の部にあげられたもので辭世に消えてゆく露おもしろしおもしろし

がある。白頭はその派の七仙の一人である鷄冠井良徳の門から出その系脈をひいてゐる野々口氏であるが

梅一輪一幅に乗る渡しかな

と辭世の句をのこして終つたあこ、その名を嗣ぐものがなかつた爲互扇樓畔季が二世星霜庵のゆづりを承けたが、直

ぐにその頃道遙軒花の本を稱してゐた秋杵を立て、三世星霜庵とした。秋杵は江戸の指物師、文臺作りであつたが自ら俳諧に親しんで得るところがあつたのであつた。花の本は即ち花咲亭で、秋杵が星霜庵を襲ぐと、畔李は、菅丸屋貞居から花の本の號を譲られたのでしばらくこれを稱してゐたが、そのうち貞居が何かの罪に坐して獄裡の人となる、畔李は花の本を稱へることを厭ひ、貞居の子の貞嶼に之を譲つてしまつた。しかし花の本と一緒に畔李の妾である李州が譲られた吟花堂はそのままになつてゐた。その後三世星霜庵秋杵が病歿し之を嗣ぐものが無かつたので、畔李はこれを藩士野中房政に嗣がせた。四世星霜庵畔李がこれであつた。

畔李の叔父に互連があつた。風雅帖に「松雲院殿右京君 百丈軒に申上」にして今書ものに對して

あれ聞よ花のお江戸のはこぎす 互連 君

をか、けてゐる。互連はまた互連も書いて寛政五年には江戸で互來や瓢馬にも芭蕉百年忌の歌合せをしてゐるこの互連の子逸見玄蕃に、畔李は互扇樓を譲つて自ら五梅菴を號した。

畔李には詠む所の句が甚だ多く、そしてその詠むところによく下情をうつしたのを見た。それは好んで社會の諸方面に近づいた爲であつた。長者山に自ら春納句碑を建てたのには孤松海江田信壽の書で

國の光みなこの山の春風ぞ
こ刻み、風雅帖は

仙溪院殿信房公

花の春何にたこへん句ひかな

畔李 公

蘭秀齋互扇樓花咲亭三世星霜庵後五梅菴に申上

こしてある。

梅一輪ごまめ臍も時めきて

雉子の聲翌日は都ご寝てかたる

若草に乗込む岸や獨活荷舟

花に行くや米の残りの錢二百

蚊の聲や馬も起たる壁ごなり

血を分けし蚊を追ひめぐる紙燈かな

若鮎の影さるにてもさるにても

茶入より持てば重たき眞桑瓜

花芹や頼の面出す種俵

啄木鳥や己が木魂にふりかへり

名月やねまる下から鳴くいこど

名月や棧くぐる鳥の影

畑にはぬすむものなし後の月

○

願ひのままに致仕の身ごなりて

世を永うほろうつ雉子の籠抜かな

この句は寛政八年二月十三日ののである。

畔李の生れたのは明和二年六月十五日で天保六年五月十二日に歿してゐる。辭世の句に

伸々として夢の世の涅槃かな
一生の舌うち響く清水かな
不二はもこの座に直りけり野分あこ
驚こんで暫らく青し雪の楠

の詠があるうち、季節の上から『一生の舌うち響く』を辭世として傳へた。

畔李の愛妾に李州、李有などがあつた。李州は江戸の町家の娘で、畔李の妾になつて俳諧を學んだが早くその道を究め、その詠む所も巧みにまた數も多かつた。常に畔李に随つて俳筵に連なつた。花の本貞居から吟花堂を譲られたが自らは花月堂と號した。その甥が森川壽人で、星雪軒蘭路と號し、李州のあこを承けて花月堂二世を稱した。

ほこぎす四天王達立れけり 蘭 路

扇々亭李有もおなじく江戸の町家の出であつた。これにも句は甚だ多い。

李州の句に

霞立つ中や鶯舞雲雀
風柳にかぜは有ながら
姿鏡に春こそうつれ除夜の梅
さかさまに飛ぶ影をかし雀の子
これはこれはこ菖蒲待たる、雛かな
七寶の眞砂に咲て花菖蒲

ほほづきをつひかみ碎く話かな

紅しほる垣根や月の女郎花

鶉啼く野中は七日月夜哉

水へ何か飛込む音や時雨佛

野分したあこやからんこ海の音

李有の句に

むつまじき世の初めなり鶏の聲

去年の極月はじめて居どころをうつしければ

居直りて見ても初日の誠かな

さけし山とけぬ山あり春の雨

名月や行儀直して鹿の寝る

川中を馬率て行く春日かな

もこの巢へ戻りて拾ふ土筆哉

夏のすすしき所から木の芽かな

などがある。

二世互扇樓を嗣いだ逸見玄蕃は、はじめ桃雪と號しあこで賢白堂子彦といつた。當時家老の職にゐるが頭顱の至つて大きな人で、ひとりて坐つてゐるこゝに困難な程であつた。のち玄蕃を主計と改めてゐる。逸見氏は今南部氏と稱してゐる。

清涼院殿主計君

春風の届くや園の隅までも

桃雪君

風雅帖にはこの句を載せてある。その句に

花鳥の封じほぐる、初日哉

子彦

此野邊の馬も孕まん春の風

藤の芽や皆ふくらかな花たくみ

何ひろふ鶴や角ぐむ芦の中

芹摘や時めく脛のさくら色

鶯や舌でゆり出す日の初め

富士をうつす湖水に蝶の影もあり

ものゝのおし手もゆるむ鹿の子哉

なんのなき句持けり茗荷竹

白魚も年かくされぬ二月かな

貴ひ人を別間に菊の根分かな

子彦の長男を兵部、あこで藏人に改めた。逸見氏元治郎である。教皇堂又玄芝堂の號があつた。三世互扇樓を襲いで子孝と號したが、隱居ののちは互扇を號した。

爪ごりに出れば薫るや梅の花

子孝

黄鳥の噂にかけのさす日かな

我影に怒り移すや春の猫

山もこに米ふむ音や藤の花

夜の明る方へしだる、柳かな

咲花の中でもきけり人の角

竹の子や日はいたづらにすこされず

見かへれば羅生門なり蜂のこゑ

羽織だけ寒くなりけり鳴の聲

子孝は明治二十八年の八月三日に歿してゐる。南宗寺の献額にあるのは辭世であらう。

煩惱の離れてきよし夏の月

子孝君

四世星霜庵畔鳥の野中氏房政は、倅佐の門弟であつた壽老庵白畫の息で、はじめ政恒のち房政又は房輔と呼び剃髪の後頼母と稱した。白鳥または梅巢と號したが星霜庵嗣號のをり畔李が

種こなる餌を拾へ畔の明鴉

の句を贈つたので畔鳥と號した。入道して北正と稱へた。寛政五年十月十日に生れ文化四年十月朔日に歿し、辭世の句

五月雨や今日にまつての曼陀羅華

は菩提寺本壽寺にある石碑に刻まれてある。

梅か香も入れて明けたり初湯殿

畔鳥

今年中のどかに見ゆる初日かな

鶯の仕あふせがはよ朝景色
しら雲の吉野にふけて花芒
おろそかに踏むな枯野は花の種
庵の除夜耳の垢でもこらばやな

畔島の室は花月堂季州の女で、星の下梅操と號した。

『しぐれ笠』さいふに

桃青居士一百遠忌於互蓮子亭歌合興行此筵に筆をこる
寛政五丑十月十二日 楓臺 互來

奥南八戸の好士いしふみを建て蕉翁百年の忌をいこなむ。古人白河の關に風流の田植唄を残し今はた風流を玉川に遊ぶ。

風流の終りぞ野田の夕衛 互 來
時雨に輕し一蓋の笠 互 來
我門を木履ながらに入待て 瓢 馬
主も注せこ見ゆる藍瓶 互 來
さらさらこ小笹に繫ぐ月の魚 互 來
水引草に露結ぶらめ 瓢 馬
野の庵の別れを悼む鷄の聲 互 來
杖をのの字に突折らぬ婆々 互 來

鹿積り山となりたる大勸化 瓢 馬
箒の中へ箒を折込む 互 來
羊麻草の花匂ひ散る青嵐 互 來
何處か鄙めく下京の妹…… 瓢 馬
さある、互來は窪田半右衛門、互連は百丈軒互連であるが瓢馬が判らない。風雅帖には
妹山と背山の形や活大根 瓢 馬

の句をあけ「古人、神山氏」にしてあるから風雅帖の出來た嘉永四年には世になかつた人である。畔季の侍醫に神山氏があつて俳諧に遊び、秋杵を推舉して星霜庵を嗣がしてゐるからこの神山氏であらう。その傳を詳かにしない。江戸で行はれたこの會の謂ふ「奥南の好士」等が建てた句碑は長者山の玉垣の外猫柳の樹の下にある。蕉翁の初しぐれ猿も小囊をほしけなり

の句を刻し裏に寛政五年十月十二日、家文瓢馬と二人の名を連ねてある。この碑はもこ女坂を登つたところの杉の樹の根もこにあつたのを六世星霜庵白錦が此處に移したのである。

瓢馬も一人の家文は上野氏名を伊右衛門と呼んだ。家は八戸二十三日町に在り商家ではあつたが何を商なつたかは判らない。天明八年の九月、町家の子弟に漢籍を教へ町家の風儀をよくしたさいふ廉で、藩主から生涯一人扶持を賜はつたほかには記録された何物も無い。文化五年辰七月二十四日七十二歳で此世を終り法名は家文豪榮居士とあるこの位牌の右に一相自寂大姉、左に石蘭貞松大姉と並べ前のは明和八卯十二月十一日に歿してゐるが後のには歿年が無い、恐らく後妻であらう。家文のこの二人の妻の一人は朶曉松橋半十郎の妹の夫である掬來俗名菟六の妹である。掬來はあこは白鱗とよび今七尾氏を稱してゐる。文化十一年の祥月命日に弟子の理英が願主となつて碑を菩提寺であ